

左衛門、世の中の年月の立事夢まぼろし、はやすぎゆかれし親仁五十年忌になりぬ、我ながらへて是迄吊ふ事うれし、古人の申傳へしは、五十年忌になれば、朝は精進して暮は魚類になして謠酒もり、其後はごはぬ事と申せし、是がをさめなればすこし物入もいとはず、はんじその用意すれば、近所の出入のかゝごも集まり、椀家具壺平るすちやつ迄取さばき、手毎にふきて膳棚にかさねける。爰に椀屋の女房を日頃御念比なれば、勝手にてはたらく事もご御見廻申けるに、兼て才觀らしく見えければ、そなたは絨戸にありし菓子品々を縁高へ組付てご申せば、手元見合まんぢう御所柿唐ぐるみ落雁櫃杉やうじ、是をあらましに取合時、亭主の長左衛門より入子鉢をねらすとて、おせんがかしらに取おとし、うるはしき髪の結目たちまちさけて、あるじ是をかなしめば、すこしもくるしからの御事と申て、かい角ぐりて臺所へ出けるを、かうじやの内儀とがめて氣をまはし、そなたの髪は今のさきまでうつくしく有りしが、納戸にて俄かにとけしはいかなる事ぞといはれし、おせん身に覺えなく、物しづかに旦那殿棚より道具を取おとし給ひ、かくはなりけるとありやうに申せど、是を更に合點せず、さては晝も棚から入子鉢のおつる事も有よ、いたづらなる七ツ鉢め、枕せずにははしく寐れば、髪はほごくる物じや、よい年をして親の吊ひの中にする事こそあれと、人の氣つくして盛形さしみをなげこぼし、酔にあて粉にあて、一日此事いひやまず、後は人も聞耳立て興覺ぬ、かゝるりんきのふかき女を持合すこそ、其男の身にして因果なれ、おせんめいわくながら聞暮せしが、おもへばくらくき

心中、とてもぬれたる袂なれば、此うへは是非におよばず、あの長左衛門殿になさけをかけ、あんな女に鼻あかせんと思ひそめしより、格別のこゝろざしほごなく戀となり、しのびくんに申しかはし、いつぞの首尾とまちける、貞享二とせ正月廿二日の夜、戀は引手の寶引繩、女子の春なぐさみ、ふけゆくま、取みだれて、まけのきにするも有り、勝にあかすあそぶもあり、我しらす躰を出すもありて椀屋もごもし火消かゝり、男は晝のくたびれに鼻をつまむもしらす、おせんがかへるにつけこみ、ないくく約束今といはれて、いやがならず、内に引入、跡にもさきにも是が戀のはじめ、〇〇〇〇ときもあぬへに、椀屋は目をあき、あはゝのがさぬと聲をかくれば、よるの衣をぬき捨て、丸裸にて心魂飛がごごく、はるかなる藤の棚にむらさきのゆかりの人有りければ、命からくにてにげのびける、おせんかなはじごかくごのまへ鉤にしてこゝろもとをさし通しはかなくなりぬ、其後なきがらもいたづら男も同じ利野に耻をさらしぬ、其名さまくのつくり歌に遠國迄もつたへける、あしき事はのがれず、あなおそろしの世や、

好色五人女卷之二終

好色五人女卷之三

●姿の關守

天和二年の曆、正月一日吉書萬によし、二日姫はじめ、神代のむかしより此事戀しり鳥のをしへ、男女のいたづらやむ事なし、爰に大經師の美婦とて、浮名の立つべき都に情の山をうごかし、祇園會の月鋒かつらの眉をあらそひ、姿は清水の初櫻いまだ咲かゝる風情、口びるのうるはしきは高尾の木未色の盛と詠めし、すみ所は室町通、仕出し衣裳の物好み當世女の只中、廣い京にも又有るべからず、人のこゝろもうきたつ春ふかくなりて、安井の藤今をむらさきの雲のごとく、松さへ色をうしなひ、たそがれの人立ち、東山に又姿の山を見せける、折ふし洛中に隠なきさはぎ仲間の男四天王、風義人にくれて目立、親よりゆづりの有るにまかせ、元日より大晦日迄一日も色にあそばぬ事なし、きふは島原にもろこし花崎かほる高橋に明し、けふは四條河原の竹中吉三郎、唐松歌仙、藤河吉三郎、光瀬左近など愛して、衆道女道を晝夜のわかちなく、さまざま遊興つきて芝居過より松屋といへる水茶屋に居ながれ、けふ程見よき地女の出でし事はなし、若も我等が目に見しもある事もやご、役者のかしこきやつを目利頭に、花見がへりを待暮く是ぞかはりたる慰さみなり、大かたは女中乗物見ぬがてゝろにくし、亂ありきの一むれいやなるもなし、是ぞと思ふもなし、兎角はよろし

き女計書きとめよと、硯紙とりよせてそれを寫しけるに、年の程三十四五と見えて首筋立のび、目の
 はり、んとして額のほへぎは自然とこうるはしく、鼻おもふにはすこし高けれど、それも堪忍頭なり、
 下に白ぬめのひつかへし、中に淺黄ぬめのひつかへし、上に樺つめのひつかへし、本繪にかへせて左
 の袖に吉田の法師が面影、ひとり燈のもとにふるき文など見てのもんだん、さりとは仔細らしき物好、
 帯は敷瓦の折びろうど、御所かづきの取まはし、薄色の絹足袋、三筋緒の雪駄、音もせずありきて、
 わざとならぬ腰のすわり、あの男めが果報と見る時、何かしたくへ物をいふとて口をあきしに、下
 齒壹枚ぬけしに戀を疊しぬ、間もなふ其跡より十五、六七にはなるまじき娘、母親と見えて左の方に
 付、右のかたに墨衣きたるびくにの付て、下女あまた、六尺供をかため、大事に掛る風情、さては縁
 付前かと思ひしに、かね付て眉なし、顔は丸くして見よく、目にはつ顯れ、耳の付やうしほらしく、
 手足の指ゆたやかに皮薄に色白く、衣類の衣こなし又有べからず、下に黄むく中に紫の地なし鹿子、
 上は鼠じゆすに百羽雀のきりつけ段染の一幅帯、むねあげ掛て身ぶりよく、ぬり笠にとら打て千筋ご
 よりの緒を付、見込のやさしさ、是一度見しに脇貌に横に七分あまりのうち疵あり、更にうまれ付と
 はおもはれず、さぞ其時の抱姥をうらむべしと皆々笑ふて通しける、さて又二十一二なる女の木綿の
 手織縞を着て、其うらさへつぎを風ふきかへされ耻をあらはしぬ、帯は羽織のおとしと見へて物
 哀にはそく、紫のかはたび有るにまかせてはき、かたしくのなら草履、ふるき置わたして髪はいつ

櫛のはを入しや、しごもなく亂れしを、つひそこ〜にからげて、身に様子もつけず、獨たのみて行
 くをみるに、面道具ひとつもふそくなく、世にかゝる生付の又有物かど、いづれも見とれて、あの女
 によき物を着せて見ば、人の命を取べし、まゝならぬはひんぶくと哀にいたましく、其女のかへるに
 忍びて人をつけゝる、誓願寺通のすゑなるたば一切の女といへり、聞に胸いたく煙の種ぞかし、其跡
 に廿七八の女、さりとは花車に仕出し、三ツ重たる小袖、皆くろはふたへに裾取の紅うら金のかくし
 紋、帯は唐織寄縞の大幅前にむすびて、髪はなげ島田に平元結懸て、對のさし櫛はさかけの置手拭、吉
 彌笠に四ツかはりのくけ紐を付て顔自慢にあさくかづき、ぬきあし中びねりのあるきすがた、是々是
 じや、だまれとをの〜近づくを待ちみるに、三人つれし下女共にひとり〜三人の子を抱せける、
 さては年子と見えておかし、跡からかゝさま〜といふを聞かぬ振して行、あの身にしては我子なが
 ら、さぞうたてかるべし、人の風俗もうまぬうちが花ぞと、其女無常のおこる程どやきて笑ひけり、
 またゆたかに乗物つらせて、女いまだ十三か四か、髪すき流し先をすこし折もごし、紅の絹たゝみて
 むすび、前髪若衆のすかるやうにわけさせ、金元結にて結せ、五分櫛のきよらかなるさし掛、まづはう
 つくしさ、ひとつ〜いふ迄もなし、白じゆす墨形の肌着、上は玉むし色のしゆすに孔雀の切付見え
 すくやうに、其うへに唐糸の網を掛、さてもたくみし小袖、十二色のたゝみ帯、素足に紙緒のはき物、
 うき世笠跡よりもたせて、藤の八房つらなりしをかざし、見ぬ人のためといはぬ計の風儀、今朝から

見盡せし美女ごも、是にけをされて其名ゆかしく尋けるに、室町のさる息女今小町と云つて行く花の色は是にこそあれ、いたづらものとは後に思ひあはせ待り、

●枕の夢

男世帯も氣さんじなるものながら、お内儀のなき夕暮一しほ淋しかりき、爰に大經師の何がし年久しくやもめ住せられける、都なれや、物好の女もあるに品形すぐれてよきを望めば、心に叶ひがたし、詫ぬれば身を浮草のゆかり尋ねて、今小町といへる娘ゆかしく見にまかりけるに、過ぎし春四條に關据て見どがめし中にも、藤をかざして覺束なきさましたる人、是ぞここがれてなんのかのなしに縁組を取りそぐこそおかしけれ、其頃下立賣鳥丸上ル町にしやべりのなるこて隠もなき仲人がた有り是をふかく頼み樽のこしらへ願ひ首尾して、吉日をえらびておさんをむかへける、花の夕月の曙此男外を眺もやらずして夫婦のかたらひふかく、三とせが程もかさねけるに、明暮世をわたる女の業を大事に、手づからべんがら糸に氣をつくし、するくくの女に手袖を織せて、わが男の見よげに始末を本とし、竈も大きく、べさせず、小遣帳を筆まめにあらため、町人の家に有りたきはかやうの女ぞかし、次第に榮えてうれしさ限もなかりしに、此男東の方に行事有て、京に名残は惜めご身過程悲しきはなし、思ひ立旅衣、室町の親里にまかりてあらましを語りしに、我娘の留守中を思ひやりて、萬にかしこき

人もがな、跡を預て表むきをさばかせ、内證はおさんが心助けにもなるべしと、何れもあれ親の慈悲心より思ひつけて、年をかさねてめしつかひける茂右衛門といへる若きものを、賀のかたへ遣はしける、此男の正直かうべは人まかせ、額ちいさく袖口五寸にたらず、髪置して此方編笠をかぶらず、ましてや脇差をこしらへず、只十露盤を枕に夢にも銀もふけのせんさくばかりに明しぬ、折節秋も夜嵐いたく、冬の事思ひやりて身の養生の爲とて、茂右衛門炙おもひ立ちけるに、腰元のりん手かるく居る事をえたれば、是を頼みてもぐさ敷捨て、りんが鏡臺に縞の木綿ふとんを折りかけ、初一ツ二ツはこらへかねて、お姥から、中かから、たけまでも其あたりをおさへて、貌しかむるを笑ひし跡程煙つよくなりて、鹽炙を待兼しに、自然と居落して、背骨つたひて身の皮ちやみ苦しき事暫くなれども、居手の迷惑さをおもひやりて目をふさぎ齒を喰しめ堪忍せしを、りんかなしくもみ消して、見より肌をさすりそめて、いつとなくいとしやとばかり思ひ込、人しれすこゝちなやみけるを、後は沙汰しておさんさまの御耳にいれど、なをやめがたくなりぬ、りんいやしかるそだちにして、物書事にうとく、筆のたよりをなげき、久七が心覺ほごにじり書をうらやましくも、ひそかに是をたのめば茂右衛門よりは、先へ戀を我物にしたがるこそうたてけれ、是非なく日數ふる時雨も儂のはじめごろ、おさん様江戸につかはされける御狀の次手に、りんがちは文書でとらせんと、さら／＼と筆をあゆませ、茂のじ様まいる身よりとばかり引むすびてかいやり給ひしを、りんうれしく、いつその時を見合けるに、見

せよりたばこの火よといへ共、折から庭に人のなき事を幸に其事にかこつけ、彼文を我事我と遣しにける、茂右衛門もながれ事かおさん様の手とも知らず、りんをやさしきと計におもしろおかしきかへり事をして又渡しける、是をよみかねて御きげんよろしき折ふし、奥さまに見せ奉れば、おほしめしよりておもひもよらぬ御つたへ、此方も若いもの、事なれば、いやでもあらず候へども、ちぎりかさなり候へば、取あげば、いやはやがむつかしく候、去ながら着物羽織風呂身だしなみの事共を其方から賃を御書なされ候は、いやながら協へてもやるべしとうちつけたる文章、去逆はにくさもにくし、世界に男の日照はあるまじ、りんも大かたなる生付、茂右衛門の程成男を、そもや待かねる事や有ると、かさねて又文にしてなげき、茂右衛門を引なびけてはまゐらせんと、かすくかきくごきてつかはされける程に、茂右衛門文づらより哀ふかくなりて、始の程嘲りし事のくやしく、そめくご返事をして五月十四日の夜はさだまつて影待あそばしける、かならず其折を得てあひみる約束いひ越ければ、おさん様いづれも女房まじりに聲のある程は笑ひて、とてもその事に其夜の慰にも成ぬべしと、おさんさま、りんに成かはらせられ、身を木綿なるひとへ物にやつし、りん不絶の寝所に曉がたまで待給へるに、いつとなく心よく御夢をむすび給へり、下々の女ども、おさん様の御聲たてさせらるゝ時、皆々かけつくるけいやくにして、手毎に棒断切手燭の用意して、所々にありしが、宵よりのさはぎに草臥て我しらす舂をかきける、其後おさんおのづから夢覺て、おごろかれしは、枕はづれてしどけ〇〇、

帯はほごけて手元になく、鼻紙のわけもなき事に心はづかしく成て、よもや此事人にしれざる事あらじ、此うへは身をすて命かざりに名を立、茂右衛門と死出の旅路の道づれと、なをやめがたく心底申きかせければ、茂右衛門おもひの外なるおもはく違ひ、のりかゝつたる馬はあれど、君をおもへば夜毎にかよひ、人のとがめもかへりみず、外なる事に身をやつしけるは、追付生死の二ツ物掛、是ぞあふなし。

●人をはめたる潮

世にわりなきは情の道と源氏にも書残せし、爰に石山寺の開帳とて都人袖をつらね、声山の櫻は捨物になして、行くもかへるも是や此關越て見しに、大かたは今風の女出立、それがひこり後世わきまへて参詣けるとはみへざりき、皆衣裳くらべの姿自慢、此心ざし観音様もおかしかるべし、其頃おさんも茂右衛門つれて御寺にまゐり、花は命にたどていつ散るべきもさだめがたし、此浦山を又見る事のしれざれば、けふのおもひ出にと、勢田より手ぐり舟をかりて、長橋の頼をかけても、短は皆々がたのしみと、浪は枕のこの山、あらはるゝまでの亂髪、物思ひせし顔ばせを、鏡の山も曇る世に、鰐の御崎の、がれがたく、壁田の舟よばひも、若やは京よりの追手かど、心の魂もしづみて、ながらへて長柄山、我年の程も爰にたどて、都の富士、廿にもたらずして頼て消ゆべき雪ならばと、親度

袖をぬらし、志賀の都はむかし話と、我もなるべき身の果すと、一しほに悲しく、龍燈のあがる時、白髭の宮所につきて、神いのるにぞいと身のうちへはかなし、兎角世にながらへる程つれなき事こそまさされ、此湖に身をなげてながく佛國のかたらひといひければ、茂右衛門も惜からぬ命ながら、死でのさきはしらす、おもひつけたる事こそあれ、二人都への書置残し、入水せしといはせて此所を立ちのき、いかなる國里にも行きて、年日を送らんといへば、おさんよろこび、我も宿を出しより、其心掛ありと、金子五百兩挾箱に入れ来りしとかたれば、それこそ世をわたるたねなれ、いよく愛をしのべとそれづくに筆をのこして、我々悪心おこりてよしなきかたらひ、是天命のがれず、身の置處もなく、今月今日うき世の別と、肌守に一寸八分の如來に黒髪のを切添へ、茂右衛門はさし馴れし一尺七寸の大脇差、關和泉守銅こしらへに卷龍の鐵鐙、それはよく人の見覺しを跡に残し、二人が上着、女草履、男雪踏、それにまで氣を付けて、岸根の柳がもとに置捨、此濱の獵師ちやうれんして、岩飛とて水入の男をひそかに二人やとひて、金銀とらせて有増をかたれば、心やすく頼れてふけゆく時、待合せけるおさんも茂右衛門も身ごしらへして、借家の笹戸明掛、皆々をゆすりおこして思ふ仔細のあつて、只今最期なるぞとうけ出、あらけなき岩のうへにして念佛の聲曲に聞へしが、二人ともに身をなげ給ふ水に音あり、いづれも泣きはぐうちに茂右衛門おさんを肩にかけて、山本わけて木ふかき杉村に立ちのけば、すうれんは浪の下くやりて、おもひもよらぬ汀にあがりける、つきづくの者

共手をうつて是を歎き、浦人を頼さまぐ探して甲斐なく、夜も明行けば涙に形見色々巻込、京都にかへり此事を語れば、人々世間をおもひやりて、外へしらすぬ内談すれども、耳せはしき世の中、此沙汰つのりて春感にいひやむ事なくて、是非もなきいたづらの身や、

●小判しらぬ休み茶屋

丹波越の身となりて道なきかたの草分衣、茂右衛門おさんの手を引て、やうく峯高くのぼりて、跡おそろしくおもへば、生ながら死だぶんになるこそ心ながらうたてけれ、なを行くさき柴人の足形も見えず、踏迷ふ身の哀もと女のはかなくたどりかねて、此くるしき息も限と見へて貌色替りてかなしく、岩もる雫を木の葉にそそぎ、さまぐ養生すれども次第にたよりすくなく、豚もしづみて今に極まりける、薬にすべき物とてもなく命のおはるを待居る時、耳ちかく寄て、今すこし先へ行けばしるべある里近し、さもあらば此憂を忘れて思の儘に枕さだめて語らん物をと歎けば、此事おさん耳に通じ、それじや命にかへての男じやものと氣を取なほしける、扱は魂にれんば入り代り、外なき身いたましく、又負て行く程にわづかなる里の垣ねに着きけり、爰なん京への街道といへり、馬も行違ふ程の岨に道もありける、わら苜ける軒に杉折掛て上々諸白あり、餅も幾日になりぬ、ほこりをかづきて白き色なし、片見世に茶笥土人形かぶり太鼓、すこしは目馴し都めきて、是に力を得、しばし休みて

此うれしさに、あるじの老人に金子一兩とらしけるに、猫に傘見せたるごとく、いやな貌つきして茶の錢置給へといふ、さても京より此所十五里はなかりしに、小判しらぬ里もあるよとおかしくなりぬ、それより柏原といふ所に行きて、ひさしく音信絶て無事をもしらぬ姨のもとへ尋入て昔を語れば、流石よしみてむごからず、親の茂助殿の事のみいひ出して、泪片手夜すがら咄し明ればうるはしき女臈に不思議を立、いかなる御かたぞとたづね給ふに、是さしあたつての迷惑此事までは分別もせずして、是はわたくしの妹なるが、年久しく御所方にみやづかひせしが、心地なやみて都の物がたき住ひを嫌ひ、物しづかなるかゝる山家に似合の縁もがな、身をひきさげて里の仕業の庭働らき望にて伴ひまかりける、敷銀も二百兩許たくはへありと、何心なく當座さばきに語りける、何國もあれ慾の世中なれば、此姨是におもひつき、それは幸の事こそあれ、我一子いまだ定る妻とてなし、そなたものかぬ中なれば、是にと申かけられ、さても氣毒まさりける、おさんしのびて泪を流し、此行すゑいがあるべしと物おもふ所へ、彼男夜更てかへりし其様すさまじや、すぐれてせい高く、かしらは唐獅子のごとくちみあがりて、髭は熊のまぎれて、眼赤筋立て光つよく、足手其ま、松木にひとしく、身には割綴を着て、藤繩の組帯して、鐵砲に切火繩、かますに兎狸を取入是を渡世とすと見えける、其名をきけば岩飛の是太郎とて、此里にかくれもなき悪人、都衆と縁組の事を母親語りければ、むくつげなる男も是をよろこび、善はいそぎ今宵のうちにと、びん鏡取出して面を見るこそやさしけれ、

母は盃の用意とて鹽目黒に口の欠たる酒徳利を取まはし、筵屏風にて二枚敷ほごかこひて、木枕二ツ薄縁二枚、横稿のふとん一ツ、火鉢に割松もやして、此夕一しほにいさみける、おさんかなしき、茂右衛門迷惑、かりそめの事を申出して、是が因果とおもひ定、此口惜さ、またもうきめに近江の海にて、死べき命をながらへしとて、天われをのがさずと脇差取て立を、おさん押とめて、さりとは短かし、さまざま分別こそあれ、夜明て爰を立のくべし、萬事は成にまかせ給へと氣をしづめて、其夜は心よく祝言の盃取かはし、我は世の人の嫌ひ給ふ、ひのえ午なるとかたれば、是太郎聞て、たごへばひのえ猫にても、ひのえ狼にても、それにはかまはず、それがしは好て青とかげを喰ふてさへ死なぬ命、今年二十八迄虫ばら一度おこらず、茂右衛門殿も是にはあやかり給へ、女房共は上方をだちにして、物にやはらかなるが氣にはいらねども、親類のふしやうなりと、ひざ枕してゆたかに臥ける、かなしき中にもおかしくなつて寢入を待かね、又爰を立のき、なを奥丹羽に身をかくしける、やう／＼日數ふりて丹後路に入りて、切戸の文珠堂につやしてまごろみしに、夜半とおもふ時、あらたに靈夢あり、汝等世になきいたづらして、何國までか其難をのがれたし、されどもかへらぬむかしなり、向後浮世の姿をやめて、惜きとおもふ黒髪を切、出家となり、二人別々に住て悪心さつて菩提の道に入らば、人も命を助くべしと、ありがたき夢心に、すゑ／＼は何にならうともかまはしやるな、こちや是がすきにて身に替ての脇心、文珠さまは衆道ばかりの御合てん、女道は曾つてしろしめさるまいと

いふかと思へば、いやなゆめ覺て、橋立の松の風ふけば、塵の世じや物と、なほくやむ事のなかりし。

●身の上の立聞

あしき事は身に覺て博奕打まけてもたまり、傾城買取あげられてかしこ顔するものなし、喧嘩しひけるど分かくし、買置の商人指をつゝみ、是皆闇がりの犬の糞なるべし、中にもいたづらかたぎの女を持あはす男の身にして、是程なさけなき物はなし、おさん事も死ければ是非もなしと、其通りに世間をすまし、年月のむかしを思ひ出て、にくしといふ心にも僧をまねきて、なき跡を吊ひける、哀や物好の小袖も旦那寺のはたてんがいと成り、無常の風にひるがへし、更に又なげきの種となりぬ、されば世の人程だいたんなるものはなし、茂右衛門そのりちぎさ、闇には門へも出でざりしが、いつとなく身の事わすれて、都ゆかしくおもひやりて、風俗いやしげになし、編笠ふかくかつぎ、おさんは里人にあづけ置き、無用の京のぼり、敵持身よりはなほおそろしく行くに、程なく廣澤のあたりより暮々になつて、池に影ふたつの月にもおさん事を思ひやりて、おろかなる泪に袖をひたし、岩に數ちる白玉は、鳴瀧の山を跡になし、御室北野の案内知よし、ていそげば、町中に入て何とやらおそろしげに、十七夜の影法師も我ながら我をわすれて、折々胸をひやして、住馴し旦那殿の町に入りてひそかに

様子を聞けば、江戸銀のおそきせんさく、若いもの集つて頭つきの吟味、木綿着物の仕立ぎはをあらためける、是も皆色よりおこる男ぶりぞかし、物語せし末を聞くにさてこそ我事申出し、さても、茂右衛門めは、ならびなき美人をぬすみ、おしからぬ命しんでも果報といへば、いかにもく一生のおもひ出といふもあり、また分別らしき人のいへるは、此茂右衛門人間たる者の風うへにも置くやつにはあらず、主人夫妻をたぶらかし、彼是ためしなき悪人と義理をつめてそしりける、茂右衛門立聞して、儘今のは大文字屋の喜助めが聲なり、哀を知ずにくさげに物をいひ捨つるやつかな、おのれには預り手形にして銀八十目の取替あり、今のかはりに首おさへても取べしと齒ぎしめして立ちければ、世にかくす身の是非なく、無念の勘忍するうちに、又ひとりのいへるは、茂右衛門は今にしなすに、ごころ伊勢のあたりにおさん殿をつれて居るといひ、よい事をしてをると語る、是を聞と身にふるひ出て俄にさむく、足ばやに立のき、三條の旅籠屋に宿かりて、水風呂にもいらす、休みけるに、十七夜待の通しに十二灯を包みて、我が身の事すゑくしれぬやうにと祈りける、其身の横しまあたご様も何として助け給ふべし、明れば都の名残とて東山しのびく、に四條川原にさがり、藤田狂言つくし三番つゞきはじまりといひけるに、何事やらん見てかへりておさんに咄しにもと、圓座かりて遠目をつかひ、もしも我をしる人もと、心元なくみしに、狂言も人の娘をぬすむ所、是さへきみあしく、ならび先のかた見れば、おさん様の旦那殿、またしる消てちごくのうへの一足飛、玉なす汗をか

きて木戸口にかけ出、丹後なる里にかへり、其後は京こはかりも、折節は菊の節句近付て、毎年丹後より栗商人の來りしが、四方山の咄しの次手に、いやこなたの御内儀様はと尋ねけるに、首尾あしく返事のしてもなし、旦那にがい貌してそれはてこねたといはれける、栗賣重ねて申すは、物には似た人も有物かな、是の奥様にみじんも違はぬ人、又若人を生うつしなり、丹後の切戸邊に、有りけるに語り捨かへる、亭主聞とがめて人遣はし見けるに、おさん茂右衛門なれば、身うち大勢もよふしてごらへに遣はし、其科のがれず、様々のせんぎ極め、中の使せし玉といへる女も同じ道筋にひかれ、栗田口の露草とはなりぬ、九月二十二日の曙のゆめさら〜最後いやしからず世語りとはなりぬ、今も淺黄の小袖の面影見るやうに名はのこりし。

好色五人女卷之三終

好色五人女卷之四

●大節季はおもひの闇

ならひ風はげしく、師走の空、雲の足さへはやく、春の事共取いそぎ餅突宿の隣には、小笹手毎に煤はきするものあり、天秤のかねさへて、取やりも世の定めとていそがし、棚下を引連立て、こん／＼小目くらにお壹文くだされませいの聲やかましく、古札納め、ざつ木賣、櫃、かち栗、かまくら海老、通町にははま弓の出見世、新物たひ雪踏、あしを空にしてと、兼好が書出しおもひ合せて、今も世帯もつ身のいとまなき事にぞ有りける、はやおしつめて二十八日の夜半に、わや〜と火宅の門は、車長持ひく音、籠葛かけ硯かたに掛てにぐるも有り、穴藏の蓋とりあへず、かる物をなげ込みしに、時の間の煙となつて、焼野の雉子を思ふがごとく、妻をあはれみ、老母をかなしみ、それ／＼のしるへの方へ立のきしは、更に悲しこかぎりなかりき、爰に本郷の邊に八百屋八兵衛とて賣人むかしは俗性賤しからず、此人ひとりの娘あり、名はお七といへり、年も十六、花は上野の盛、月は隅田川のかげきよく、かゝる美女のあるべきものと都鳥、其業平に時代ちがひにて見せぬ事の口惜し、是に心を掛けざるはなし、此人火元ちかづけば、母親につき添、年頃頼をかけし旦那寺、駒込の吉祥寺といへるに行きて、當座の雞をしのぎける、此人々にかぎらず、あまた御寺にかけ入り、長老様の寢間にも赤子

泣聲 佛前に女の二布物を取ちらし、或は主人をふみこえ、親を枕とし、わけもなく臥まろひて、明れば鏡鉢鉦を手水だらひにし、お茶湯天目も假のめし椀となり、此の中の事なれば、釋迦も見ゆるし玉ふべし、お七は母の親大事にかけ、坊主にも油断のならぬ世中と、萬に氣を付侍る、折ふしの夜嵐をしのぎかねしに、亭坊慈悲の心から着替の有程出してかされける、中に黒羽二重の大ふり袖に、梧銀杏のならべ紋、紅うらを山道のすそ取わけらしき小袖の仕立、焼かけ残りてお七心にとまり、いかなる上臈か世をはやうなり給ひ、形見もつらしと此寺にあがり物かど、我年の頃おもひ出して哀にいたましく、あひみぬ人に無常たこりて、思へば夢なれや、何事もいらぬ世や、後世こそまことなれと、しほくとしづみ果て、母人の珠數袋をあけて、願の玉の手にかけ、口のうちにして題目いとまなき折から、やことなき若衆の銀の毛貫片手に、左の人さし指に有るかなきかのとげの立けるも心にかゝると、暮方の障子をひらき、身をなやみおはしけるを、母人見かね給ひ、ぬきまゐらせんと、その毛貫を取て、暫なやみ給へども老眼のさだかならず、見付る事かたくて、氣毒なる有さまお七見しより、我なら目時の目にてぬかん物と思ひながら、近寄かねてすむうちに、母人よび給ひて、是をぬきてまゐらせよとのよしうれし、彼御手をとりて、難儀をたすけ申しけるに、此若衆成をわすれて自が手をいたくしめさせ給ふを、はなれがたかれども、母の見給ふをうたてなく、是非もなく立別れさまに覺えて毛貫をとりて歸り、又返しにと跡をしたひ其手を握りかへせば、是よりたがひの思ひと

はなりける、お七次第にこがれて、此若衆いかなる御方ぞと納所坊主に問ひければ、あれは小野川吉三郎殿と申して、先祖たゞしき御浪人衆なるが、さりとはやさしく情のふかき御かたどかたるにぞ、なほおもひまさりて、しのびくくの文書て人しれずつかはしけるに、便りの人かはりて結句吉三郎方より、おもはくかすくくの文おくりける心ざし、互に入亂れて是を諸思ひとや申すべし、兩方共に返事なしに、いつとなく淺からぬ戀人こはれ人、時節をまつうちこそうき世なれ、大晦日はおもひの間に暮て、明れば新玉の年のはじめ、女松男松を立飾て、曆みそめしにも姫はじめおかしかりき、されどもよき首尾なくてつひに枕も定めず、君がため若菜祝ひける日もをはりて、九日十日過十一日二十三日の夕暮、はや松の内も皆になりて、甲斐なく立し名こそはかなけれ、

●虫出しの神鳴もふんごしかきたる君様

春の雨玉にもぬける柳原のあたりよりまゐりけるのよし、十五日の夜半に外門あらけなく叩くにぞ、僧中夢おごろかし聞けるに、米屋の八左衛門長病なりしが、今宵相果申されしに、おもひまふけし死人なれば、夜のうちに野邊へおくり申し度きこの使なり、出家の役なればあまたの法師めしつれられ、晴間をまたす、傘をどりくくに御寺を出てゆき給ひし跡は、七十に餘りし庫裏姥ひとり、十二三なる新發意一人、赤犬ばかり、残る物とて松の風淋しく、虫出しの神鳴ひ々き渡り、いづれも驚て、姥は

年越の夜の煎太豆取出すなど、天井のある小座敷たづねて身をひそめける、母親は子を思ふ道にまよひ、我をいたはり夜着の下へ引よせ、きびしく鳴時は耳ふさげなど心を付給ひける、女の身なればおそろしさかぎりもなかりき、され共吉三郎殿にあふべき首尾、今宵ならではとおもふ下心ありて、扱もうき世の人、何とて鳴神をおそれけるぞ、捨てから命すてしも我はおそろしからずと、女のつよからずしてよき事に無用の言葉、すゑくの女共まで是をそしりける、やう／＼更過て人皆おのづから寝入りて、軒は軒の玉水の音をあらそひ、雨戸のすきまより月の光もありなしに静なるをりふし、客殿をしのび出けるに、身にふるひ出て足元も定めかね、枕ゆたかに臥したる人の腰骨をふみて、たましひ消がごとく、胸いたく上氣して物はいはれず、手をあはして拜みしに、此もの我をどかめざるを不思議と、心をどめて詠めけるに、飯たかせける女のむめといふ下司なり、方丈に行てみれども彼兒人の寝姿見えねば、かなしくなつて臺所に出ければ、姥目覺し、今宵鼠めはとつぶやく片手に、椎茸のにしめあげ麵葛袋など取をくもおかし、夜や八ツ頃なるべし、常香盤の鈴落て、ひ々きわたる事しばらくなり、新發意聲立て、こはあお七さまよい事をといひけるに又驚き、何にてもそなたのほしき物を調進すべし、だまりたまへといへば、それならば錢八十と、松葉屋のかるたど、淺草の米まんぢう五つと、世に是よりほしき物はないといへば、それこそやすい事、明日はやく／＼遣し申べきと約束しける、此小坊主枕かたむけ、夜が明たらば三色もらふはず、必もらふはずと、夢にもうつゝに

も申寝入に静りける、程なくあけばのちかく、谷中の鐘せはしく、吹上の板の木朝風はげしく、うらめしや今寝ぬくもる間もなくあかぬは別れ、世界は廣し晝を夜の國もがなと俄に願ひ、とても叶はぬ心をなやませしに、母の親是はとたづね來て、ひつたてゆかれし、おもへばむかし男の鬼、一口の雨の夜のこゝちして、吉三郎あきれ果てかなしかりき、新發意は宵の事をわすれず、今の三色の物をたまはらずば、今夜のありさまつげんといふ、母親立歸りて、何事かしらね共お七が約束せし物は、我が請にたつといひすて、歸られし、いたづらなる娘もちたる母なれば、大かたなる事は聞ても合點して、お七よりはなほ心を付て、明日の日はやく其もてあそびの品々調て、おくり給ひけるとかや、

●雪の夜の情宿

油断のならぬ世の中に、殊更見せまじき物は、道中の肌付金、酒の酔に脇指、娘のきはに捨坊主と、御寺を立歸りて其後はきびしく改めて戀をさきける、され共下女が情にして文を數通はせて、心の程は互にしらせける、或夕板橋ちかき里の子と見えて、松露土筆を手籠に入れて、世をわたる業とて賣きたれり、お七親の方に買とめける、其暮は春ながら雪ふりやますして、里までかへる事をなげきぬ、亭主あはれみて何と、ろもなく、つひ庭の片角にありて、夜明なばかへれといはれしをうれしく、牛房大根の蕨かたよせ、竹の小笠に面をかくし、腰袋身にまどひ一夜をしのぎける、嵐枕にかよひ土間

ひえあがりけるにぞ、大かたは命もあやうかりき、次第に息もきれ眼もくらみし時、お七聲して先程の里の子、あはれやせめて湯成共呑せよと有しに、食焼の梅が下の茶碗にくみて久七にさし出しければ、男請取て是を興へける、忝き御心入といへば、くらまぎれに前髪をなぶりて、我も江戸においたらば、念者の有時分じやが痛しやといふ、いかにも淺ましくそだちまして田をすく馬の口を取、眞柴菊より外の事をぞんじませぬといへば、足をいらひて、きどくにあかやりを切らさぬよ、是なら口をすこしと、口をよせけるに、其悲しさ、切なさ、齒を喰しめて涙こぼしけるに、久七分別して、いやいや根深にんにく喰し口中もしれずと、やめける事のうれし、其後寝時に成て下々はうちつけ階子を登り、二階にぞもし火影うすく、あるじは戸棚の錠前に心を付れば、内儀は火の用心能々云付て、なほ娘に氣遣せられ、中戸さしかためられしは、懸路つなされてうたてし、八ツの鐘の鳴時、表の戸叩て、女と男の聲して、申姥様只今よろこびあそばしましたが、しかも若子様にて旦那様の御機嫌と頻りによばゝる、家内起さわぎて、それはうれしやと寢所より直に夫婦連立、出さまにまくりかんざうを取持て、かたし／＼の草履をはき、お七に門の戸をしめさせ、急心ばかりにゆかれし、お七戸をしめて歸りさまに、暮方里の子思ひやりて下女に其手燭までとて面影をみしに、豊に臥しいと哀の増りける、心よく有しを其まゝおかせ給へど、下女のいへるを聞ぬ貌してちかくよれば、肌につけし兵部卿のかほり、何とやらゆかしくて、笠を取除みればやごどなき脇貌のしめやかに、髪もそゝげざり

しをしばし見されて、その人の年頃におもひいだして、袖に手をさし入れて見るに、淺黄はぶたへの下着、是はどころをどめしに吉三郎殿なり、人のきくをもかまはず、こりや何としてかゝる御すがたぞと、しがみ付きてなげきぬ、吉三郎もおもて見あはせ、物えいはざる事しばらくありて、我かすかたをかへて、せめては君をかりそめに見る事ねがひ、宵の憂思ひおぼしめしやられよと、はじめよりの事共をつゞ／＼にかたりければ、兎角は是へ御入有て、其御うらみも聞まゐらせんと、手を引まゐらすれども、宵よりの身のいたみ是非もなく哀なり、やう／＼下女と手をくみて車にかきのせて、つねの寐間に入まゐらせて、手のつゞ／＼ほごはさすりて生薬をあたへ、すこし笑ひ貌うれしく、盃事して今宵は心に有程をかたりつくしなるとよろこぶ所へ、親父かへらせ給ふにぞかさねて憂めにあひぬ、衣箱のかげにかくしてさらぬ有さまにて、いよ／＼おはつ様は親子とも御まめかといへば、親父よろこびて、ひとりの姪なれば、とやかく氣遣せしに、重荷おろしたと、機嫌よく産着のもやうせんさく、萬祝て鶴龜松竹のすり箔はと申されけるに、おそからぬ御事明日御心静にぞ下女も口々に申せば、いや／＼かやうの事ははきやこそよけれど、木枕鼻紙をたゝみかけて、ひながたを切るゝこそうたてけれ、やう／＼其程過て色々たらしねせまして、語たき事ながら、ふすま障子ひとへなれば、もれ行事をおそろしく、灯の影に硯紙置て、心の程を互に書て、見せたり、見たり、是をおもへば鴛のふすまどやいふべし、夜もすがら書さくごきて、明がたの分れ又もなき戀があまりて、さりどては物

うき世や、

●世に見をさめの櫻

それとはいはずに明暮女こゝろの慕なや、あふべきたよりもなければ、ある日風のはげしき夕暮に、日外寺へにげ行世間のさはぎを思ひ出して、又さもあらば吉三郎殿にあひ見る事の種とも成りなんと、よしなき出来ごゝろにして、悪事を思ひ立つこそ因果なれ、すこしの烟立さはぎて人々不思議と心懸見しにお七が面影をあらはしける、これを尋ねしにつゝ、まず有し通を語けるに、世の哀とぞなりにける、けふは神田のくすれ橋に耻をさらし、又は四ツ谷芝の浅草日本橋に人こ寄りてみるに惜まぬはなし、是を思ふにかりにも人に悪事をさせまじきものなり、天是をゆるし給はぬなり、此女思ひ込みし事なれば、身のやつるゝ事なくて、毎日有し昔のごとく、黒髪を結せてうるはしき風情、惜や十七の春も花も散々に、ほとゝぎすまでも總鳴に卯月のはじめすがた、最期ぞとすゝめけるに、心中更にたがはず、夢幻の中ぞと一ねんに佛國を願ひける心ざし、去迎は痛しく、手向花とて咲おくれし櫻を一本もたせけるに、打眺めて、世の哀れ春吹く風の名に残しおくれ櫻のけふ散し身は、と吟じけるを、聞人一しほにいたはしく、此姿をみをくりけるに、限ある命のうち、入相の鐘つく頃、品かはりたる道芝の邊にして其身はうき煙となりぬ、人皆いづれの道にも煙はのがれず、殊に不便は是に有りけ

る、それはきのふ、今朝みれば塵も灰もなくて、鈴の森松風ばかり残て、旅人も聞つたへて只是通らず、同向して其跡を吊ひける、されば其日の小袖郡内縞のきれゝ迄も、世の人拾もどめてするゝ物語の種とぞ思ひける、近付ならぬ人さへ忌日々々にしきみ折立、此女をこひけるに、其契を込し若衆はいかにして、最後を尋問さる事の不思議と、諸人沙汰し侍る折節、吉三郎は此女にこゝちなやみて前後を辨ず、憂世の限と見へて、便すくなく、現のごとくなれば、人々の心得にて、此事をしらせなば、よもや命も有るべきか、つねづね申せし言葉のする、身の取置までして最後の程を待居しに、おもへば、人の命やと首尾よしなに申なして、けふ明日の内には其人爰にましゝて、思ふまゝなる御げんなごいひけるにぞ、一しほ心を取直し、あたへる薬を外になして、君よ戀し其人まだかどそゝろ事いふほどこそあれ、しらすやけふは早や三十五日と、吉三郎にはかくして其女吊ひける、それより四十九日の餅盛など、お七親類御寺に参りてせめて其戀人を見せ給へと歎きぬ、様子を語て又も哀れを見給ふなれば、よしゝ其通にと道理を責ければ、流石人たる人なれば、此事聞ながら、よもやながらへ給ふまじ、深くつゝみて病氣もつゝがなき身、折節お七が申し残せし事共をも語りなぐさめて、我子の形見にそれなりとも思ひはらしにと、卒都婆書たてゝ手向の水も涙にかわかぬ石こそ、なき人の姿かと跡に残りし親の身、無常の習とて是逆の世や、

●様子あつての俄坊主

命程頼みすくなくて、又つれなき物はなし、中々死ぬればうらみも戀もなかりしに、百ヶ日に當る日
枕始てあがり、杖竹を便に寺中靜に初立しけるに、卒都婆の新しさに心を付てみしに其人の名に驚て
さりさてはしらの事ながら、人はそれとはいはじ、おくれたるやうに取沙汰も口惜と腰の物に手を掛
しに、法師取つきさまへとやめて、逆も死すべき命ならば、年月語りし人に暇乞をもして、長老さ
まにも其斷を立、最後を極め給へかし、仔細はそなたの兄弟契約の御かたより、當寺へ預置給へば、
其御手前への難儀、彼是覺しめし合させられ、此上ながら憂名の立ざるやうにといさめしに、此斷至
極して自害おもひとやまりて、兎角は世にながらへる心ざしにはあらず、其後長老へ斯と申せば、お
ごろかせ給ひて、其身は念頃に契約の人、わりなく愚僧をたのまれ預りおきしに、其人今は松前に罷
て、此秋の頃は必ず爰にまかるのよし、くれぐれ此程も申越れしに、それよりうちに申事もあらば、
さしあつての迷惑、我ぞかし、兄分かへられてのうへに、其身はいかやうともなりぬべき事こそあ
れと、色々異見あそばしければ、日頃の御恩思ひ合せて、何か仰はもれしと御請申あげしに、なを心
もとなく覺しめされては、物を取てあまたの番を添られしに是非なく、つねなるへやに入りて人々に
語しは、さてもくわが身ながら、世上のそしりも無念なり、いまだ若衆を立てし身のよしなき人の

うき情にもだしがたくて、剩其人の難儀、此身のかなしき、衆道の神も佛も我を見捨給ひしと感涙を
流し、殊更兄分の人歸られての首尾、身の立べきものあらず、うれより内に最後急たし、され共舌喰切
首しめるなど世の聞えも手ぬるし、情に一腰かし給へ、なにながらへて甲斐なしと、涙にかたるにぞ
座中袖をしぼりてふかく哀みける、此事お七親より聞つけて、御歎尤とは存ながら、最後の時分くれ
ぐれ申置けるは、吉三郎殿まことの情あらば、うき世捨させ給ひ、いかなる出家にもなり給ひて、か
くなり行跡をこはせ給ひなば、いかばかり忘れ置まじき、二世迄の縁は朽まじと申置しと、様々申せ
共中々吉三郎聞分す、いや／＼思ひ極て舌喰切色の時母親耳ちかく寄て、しばし小語申されしは
何事にか有哉らん、吉三郎うなづきて兎も角もどひいへり、其後兄分の人も立歸り、至極の異見申盡て
出家と成ぬ、此前髪のちるあはれ坊主も剃刀なげ捨、盛なる花に時のまの嵐のごとくおもひくらぶれ
ば、命は有ながらお七最後より人も古里松前にかへり、墨染の袖とはなりけるとや、さても／＼取集
たる戀や哀や、無常なり、夢なり、現なり、

好色五人女 卷之四終

好色五人女 卷之五

●連吹の笛竹息の哀や

世に時花歌源五兵衛といへるは、さつまの國かごしまの者なりしが、かゝる田舎には稀なる色このめ
る男なり、あたまつきは、所ならはしにして、後さがりに髪先みじかく、長脇差もすぐれて目立なれ
ども、國風俗、是をも人のゆるしける、明暮若道に身をなし、よい／＼としたる髪長のたはふれ、一
生しらすして、今は、や廿六歳の春とぞなりける、年久しくふびんをかけし若衆に、中村八十郎とい
へるに、はじめより命を捨て浅からず念友せしに、又あるまじき美兒、たごへていはゞひとへなる初
櫻の、なかばひらきて花の物云風情たり、或夜雨の淋しく只二人、源五兵衛住なせる少座敷に取こも
り、つれ吹の横笛さらにまたしめやかに、物の音も折にふれては哀さもひとしほなり、窓よりかよふ
嵐は梅がかほりをつれて振袖に移、くれ竹のそよぐに寝鳥さはきて、とびこふ音もかなしかりき、灯
おのづららに影ほそく、笛も吹をはりて、いつよりは情らしく、うちまかせたる姿して、心よく語し
言葉にひとつ／＼品替て戀をふくませ、さりとはいとしさまさりて、うき世外なる慾心出來て、八十
郎形のいつまでもかはらで、前髪あれかしとぞ思ふ、夜の明がたになりていつとなく眠れば、八十郎
身をいためて起しあたら夜を夢にはなし給ふといへり、源五兵衛現に聞て心さだまりかねしに、我に

語給ふも今宵をかぎりなりしに、何か名残に申たまへる事もといへば、寝耳にもかなしくてかりにも心掛りなり、ひとへあはぬさへ面影まぼろしに見えけるに、いかに我にせかすればとて、今夜かぎりとは無用の言事やと手を取かはせば、すこしうち笑て、是非なきはうき世、定がたきは人の命といひ果す、其身はたちまち豚あがりて誠のわかれとなりぬ、是はと源五兵衛さはぎて、忍びし事も外にして男泣にごよめば、皆々たち寄さまなく薬あたへける甲斐なく、萬事のこときれてうたてし、八十郎親元にしらせければ、二親のなげきかぎりなし、年月したしくましくける中なれば、八十郎が最後何かうたがふまでもなし、たれからそれ迄兎角は野邊へおくりて、其姿を其まゝ大瓶に入れて萌出る草の片蔭に埋ける、源五兵衛此塚にふしづみて悔ごも、命すつべきより外なく、とやかく物思ひしがさてもくもろき人かな、せめては此跡三とせは吊ひて、月も日も又けふにあたる時、かならず爰に來て露命と定むべき物をと、野墓よりすぐに醫きりて、西園寺といへる長老に始を語、心からの出家となりて、夏中は毎日の花をつみ香を絶さず、八十郎ぼだいをとひて夢の如く其秋にもなりぬ、垣根朝顔咲そめ、花又世の無常をしらせける、露は命よりは間のあるものぞと、かへらぬむかしをおもひけるに、此ゆふぐれはなき人の來る魂まつるわざとて、鼠尾草折しきて、爪なすびおかしげに、そだ大豆かれくをりかけ、燈籠かすかに棚經せはしく、むかひ火に麻がらの影きえて、十四日のゆふま暮、寺も借銭はゆるさず掛乞やかましく、門前に踊太鼓ひきわたりて、爰もまたいやらしくな

りて、一たび高野山へのころざし、明れば文月十五日古里を立出るより、染墨はなみだにしらせて、袖は朽けるとなり、

●もろきは命の鳥さし

里は冬まへして萩柴折添て、ふらぬさきより雪垣など、北窓をふさぎ、衣うつ音のやかましく、野はづれに行けば、紅林にねぐらあらそふ小鳥を見掛、其年のほご十五か六か七まではゆかじ、水色の裕帷子に、むらさきの中幅帯、金鍔のツ脇差、髪は茶先に取亂、そのゆたけさ女のごとし、さし竿の中ほごを取まはして、色鳥をねらひ給ひし百たびなれ共、一羽もとまらざりしをほいなき有様、しばし見とれて、さても世にかゝる美童も有ものぞ、其年の比は過にし八十郎に同じ、うるはしき所はそれに増りけるよご、後世を取はづし暮がたまで詠つくして、其かた近く立寄て、それがしは法師ながら鳥さしてとる事をえたり、其竿こなたへと片肌ぬぎかけて、諸々の鳥共此兒人のお手にかゝりて命を捨が何とて惜きぞ、さてもく衆道のわけしらすめと、時の間に數かぎりもなく取まゐらせければ、此若衆外なくうれしく、いかなる御出家ぞと問せけるほどに、我れ忘て始めを語れば、此人もだくど涙をみて、それゆるゑの御修行一しは殊勝さ思やられける、是非に今宵は我笹茸に一夜こゝめられしに、なれくしくも伴ひ行に、一かまへの森のうちにきれいな殿作りありて、馬のいなく

音、武具かざらせて、廣間をすきて椽より梯のはるかに、熊笹むらゝとして、其奥に庭籠ありて、はつがんで唐鳩金鶏さまゝの聲なして、すこし左のかたに中二階四方を見晴し、書物棚しほらしく、爰は不斷の學問所とて是に座をなせば、めしつかひのそれゝをめされ、此客僧は我物讀のお師匠なり、よくもてなせとて、かすゝの御事ありて、夜に入ればしめやかに語慰み、いとなく契て千夜とも心をつくしぬ、明れば別を、しみ給ひ、高野のおぼしめし立かならず下向の折ふしは、又もと約束ふかくして、互に涙くらべて人しれず其屋形を立のき、里人にたづねけるに、あれは此所の御代官と、しかくゝの事をかたりぬ、さていとお情うれしく、都に上るもはかざらず、過にし八十郎を思ひ出し、又彼若衆の御事のみ、佛の道は外になして、やうゝ弘法の御山にまゐりて、南谷の宿坊に一日ありて奥の院にも参詣せず、又國元にかへり約束せし人の御方に行けば、日外見し御妾かはらず出むかひ給ひ、一間なる所に入て、此程のつもりし事を語り、旅草臥の夢むすびけるに、夜を明て彼御人の父此法師をあやしくとがめ給ひ、起されておどろき源五兵衛落髪のはじめ、又このたびの事有のまゝに語れば、あるじ横手うつて、さてもゝ不思議や我子ながら妾自慢せしに、うき世とてはかなく、此廿日あまりに成る跡にも、もろくも相果しが、其きは迄彼御法師と申せしを、おかされての事におもひしに、扱はそなたの御事かと、くれぐれなげき給ひける、なを命をしからず、此處をさらす身を捨てさとおもひしが、さりとて死れぬもの人の命に有ける、間もなく若衆ふたり迄のう

きめをみて、いまだ世に有事の心ながら口惜、さるほごに此二人が我にかゝるうき事しらせける、大かたならぬ因果とや、是を申べし、かなし、

●衆道は兩の手に散花

人の身程あさましくつれなきものはなし、世間に心をどめて見るに、いまだいたひけ盛の子をうしなひ、又はすゑゝ永く契を籠し妻の天死、かゝる哀れを見し時は即座に命を捨て我も人もおもひしが、涙の中にもはや怨といふ物つたなし、萬の實に心をうつし、あるは又出来分別にて息も引とらぬうちより、女は後夫のせんさくを耳に掛、其死人の弟をすくに跡しらすなど、又は一門より似合しき入縁取事、こゝろ魂にのりてなじみの事は外になし、義理一べんの念佛、香花も人の見るためぞかし、三十五日の立をどけしなく忍びゝの薄白粉髪は品よく油にしたしながら、結もやらすしごけなく、下着は色をふくませ、うへには無紋の小袖、目にたゝすしてなほ心にくき物予かし、折ふしは無常を觀じ、はかなき物語りのつひでに髪をきり、うき世を野寺に暮して、朝の露をせめて草のかけなる人に手向なんど、縫箱鹿子の衣装取ちらし、是れもいらぬ物なれば、てんがい、はたちう、敷にせよと云ふ心には、今すこし袖のちいさきをかなしみける、女程おそろしきものはなし、何事をも留ける人の中にては空泣しておごしける、されば世の中に化ものと後家たてすます女なし、まして男の女

房を五人や三人ころして後よびむかへてもとがにはならじ、それとは違ひ源五兵衛入道は、若衆ふたりまであへなきめを見て、誠なるこゝろから、片山陰に草庵を引むすび、後の世の道ばかり願ひ、色道かつてやめしは更に殊勝さかぎりなし、其頃又さつまがた濱の町といふ所に、琉球屋の何がしが娘おまんといへる有りけり、年の程十六夜の月をもそねむ生つき心ざしもやさしく、戀の只中見し人おもひ掛ざるはなし、此女過し年の春より源五兵衛男盛をなづみて、數々の文に氣をなやみ、人しれぬ便につかはしけるに、源五兵衛一生女を見限り、かりそめの返事もせざるをかなしみ、明暮是のみにて日數をおくりぬ、外より縁のいへるをうたてて、おもひの外なる作病して、人の嫌ふうは言など云ふ正しく亂人とも見ぬける、源五兵衛姿をかへにし事もしらざりしに、或時人の語りけるを聞きあへずさりさて、情なし、いつぞの時節には此思ひを晴すべきを樂しみける甲斐なく、惜や其人は墨染の袖うらめしや、是非それに尋行きて、一たび此うらみをいはではと思ひ立を、世の別と人々にふかくして自よき程に切て中剃して、衣類を兼ての用意にや、まんまと若衆にかはりて忍びて行くに、戀の山入をめしより、根笹の霜を打拂ひ、頃は神無月儂りの女ごゝろにして、はるく過て人の申せし、里ばなれなる杉村に入れば後にあらけなき岩ぐみありて、にしの方に洞ふかく、心も是にしづむばかり朽木のたよりなき丸大を二ツ三ツ四ツならべてなげ渡し、橋も物すごく、下は瀬のはやき浪もくだけて、魂散る如く、わづかの平地のうへに片びさしおろして、軒端はもろくのかづらはひかゝりて、

をのづからの滴、爰のわたくし雨ごや申べき、南のかたに明り窓有て、内を覗は、しづの屋にありしちんからりとやいへる物ひとつに、青き松葉を焼捨て、天目二ツの外には、しやくしといふ物なくて、さりさては淺まし、かゝる所に住なしてこそ佛の心にも叶ひてんと見廻しけるに、あるじの法師ましまさぬ事なげかはしく、何處へと尋べきかたも、松より外にはなくて、戸の明を幸に入て見れば、見臺に書物ゆかしさにのぞけば、待宵の諸袖といへる衆道の根元を書つくしたる本なり、さてはいまも此色は捨給はずと、其人のおかへりを待詫して、ほごなく暮て文字も見えがたく、ごもし火のたよりもなくて次第に淋しく獨明しぬ、是戀なればこそかくは居にけり、夜半とおもふ時源五兵衛入道、わづかなる松火に道をわけて、庵ちかく立歸りしを嬉しくおもひしに、枯葉の萩原よりやごとなき若衆、同じ年比なる花か紅葉か、いづれか色をあらそひ、ひとりほうらみ、ひどりは歎き、若道のいきごみ、源五兵衛坊主はひとり、情人はふたり、あなたこなたのおもはく、戀にやせなくさいなまれて、まだくとしてかなしき有様、見るもあはれ、又興覺て、扱も心の多き御かたど、すこしはうるさかりき、され共思ひ込し戀なれば此まゝ置べきにあらず、我も一通り心の程を申しほごきてなんと立出れば、此面影におごろき二人の若衆姿の消て是はとおもふ時、源五兵衛入道不思議たちて、いかなる兒人さまぞと言葉を掛ければ、おまん聞もあへず、我事見えわたりたる通りの若衆をすこしたて申、かねく御法師さまの御事聞傳へ身を捨是迄しのびしが、さりとはあまたの心入それともし

絶てさりとはかなしく、人の戀もぬれも世のある時の物ぞかし、同じ枕はならべつれども、夜かたるべき言葉もなく、明れば三月三日童子草餅くばるなど、鶏あわせさまの遊興ありしに、我宿のさびしさ、神の折敷はあれど、鯛もなし、桃の花を手折て、酒なき徳利にさし捨て、其日も暮て四日なほうたてし、互に世をわたる業とて、都にて見覺し芝居事種となりて、俄に貌をつくり、髭戀の奴の物まね、嵐三右衛門がいきうつし、やつこのくとはうたへども腰さだめかね、源五兵衛ごこへ行、さつまの山へ、鞘が三文下緒が二文、中は檜木のあらけなき聲して、里々の子供をすかしぬ、おまんはさらし布の狂言綺語に身をなし露の世を送りぬ、是を思ふに戀にやつす身、人をもはちらへす次第にやつれて、むかしの形はなかりしを、つらき世間なれば、誰あはれむかたもなく、おのづからしほれゆくむらさきの藤のはな、ゆかりをうらみ身をなげき、けふをかざりとなりはてし時、おまん二親は此行方たづね詫しに、やうくさがし出して、悦こぶ事のかすく、兎角娘のすける男なれば、ひとつになして此家をわたせと、あまたの手代來りて二人をむかへれば、いづれもよろこびなして、物數三百八十三の、諸の鍵を源五兵衛にわたされける、吉日をあらため藏びらさせしに、判金貳百枚入の書付の箱六百五十、小判千兩入の箱八百、銀十貫目入の箱は、かびはへて下よりうめく事すさまじ、牛とらの角に七ツの壺あり、蓋ふきあがる程、今極め一步錢などは砂のごとくにしてむさし、庭藏みれば元渡りの唐緋山をなし、伽羅掛木のごとし、さんごじゆは壹匁五分から百三十目迄の無統の

玉千二百三十五柄、鮫青磁の道具かざりもなく、飛鳥川の茶入かやうの類ごろつきあげるをまはず、人魚の鹽引、めなうの手桶、かんだん米かち杵、浦島が庖丁箱、辨天の萬巾着、福祿壽の髮刀、多門天の枕槍、大黒殿の千石ごほし、えびす殿の小遣帳、覺えがたし、世に有るほどの萬寶ないものはなし、源五兵衛うれしかなしく、是をおもふに江戸京大坂の太夫のこらす請ても、芝居銀本して捨ても、我一代に皆になしがたし、何とぞつかひへらす分別出す、是はなんとしたものであらふ、

好色五人女 卷之五終

本館二十不孝

雪中の筭八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり、世に天性の外祈らずとも、先々の家業をなし、祿を以て萬物を調へ、教を盡せる人常なり、この常の人稀にして悪人多し、生とし生ける輩孝なる道を知らずむば、天の咎を免るべからず、其例は諸國見聞するに、不孝の輩眼前に其罪を顯す、之を梓にちりばめ、孝を勸むる一助ならむかし。

貞享三年孟陬日

本朝二十不孝(貞享三年)

卷之一

今の都も世は借物

京に悪所銀の借次屋

大節季無い袖の雨

伏見に内證掃きちぎる竹箒屋

跡の剥けたる嫁入長持

加賀に美人絹屋

適興改めて嘶の點取

大坂に後世願屋

本朝二十不孝

●今の都も世は借物

世に身過は様々なり、今の都を清本の西門より眺めまはせば、立ち續ける軒端の内藏の景色、朝日に映りて夏ながら雪の曙かと思はれ、豊なる御代の例、松に音無く、千歳鳥は雲に遊びて、限りも無く打ち聞き、九万八千軒といへる家数は信長時代の事なり、今は土手の竹藪も洛中になりぬ、それ〴〵の家職して朝夕の煙を立てける、千軒あれば友過ぎといへるに、爰にて何を爲たればとて渡りかぬべきか、五條の橋辨慶が七つ道具の紙職を年中畫ける人もあり、また子を思ふ夜の道、手を打ち振りて當所なしに、疍の虫を指先から鑿り出しますといふもあり、鉤を持つて粗白げにまはる、大小に限らず三文宛なり、念佛講の貸盛物、三具に敲鉦を添へて一夜を十二文、産屋の倚懸臺大枕まで揃へて、七夜の内を七分、餅搗頭の蒸籠、晝は三分、夜は二分、薬鍋七日千文、大溝の掃除、熊手、竹箒、塵籠まで持ち來り、一間を一文宛、木缺かたげて立木によらず作るを五分、接木一枝を一分宛、一時大工六分、行水の湯沸かして、一荷を六文、夏中の貸簾、世智賢き人の心見透きて、始末を所帯の大事といへり、徒居なく手足動かせば、人並に世は渡るべし、爰に新町通四條下る所に、格子造りの奇麗なる門口に、丸に三つ萬の暖簾懸けて、五人口を親に懸かりのやうに裕と暮らしぬ、知らぬ人は醫者かと思ふべし、

長崎屋傳九郎とて、京中の悪所銀を借り出す男なり、語り半分ともいふに、是れは元日から、人の寄る年を若うならしやりましたと嘘をつき初めて、大晦日まで一つも眞言はなかりき、されども差し詰りたる時人の爲めにもなるものなり、又室町三條の邊に隠れもなき歴々の子に、變名は篠六といふ人、如何に若ければとて、七年以來に請け取りし金銀を若女二つに費し、隠居の貯あるに、極まれる分限なれども随意ならず、俄に浮世も罷め難く、手條聞き出し、長崎屋傳九郎を頼み、死一倍の借金千兩才覺させけるに、都は廣し、之れに貸す人もありて、借手の年齢のほごを見に遣はしける、笹六美男を俄に逆鬢にして、身を見苦しうなし、今年二十六なるを三十一になりますと、知れてある年をまご／＼と五歳隠されし、世上の習にて、年若にいふを悦ぶに、さりとは不思議晴れざりし、銀貸す人の手代つく／＼見定め、御年はいくつにもせよ、此方の御親父なれば、未だ五十の前後なるべしといへば、私は年寄られましての子なり、最早親仁は七十に程近しいふ、手代合點せず、此の中も見ますれば、店に御腰を掛けられ、根芋を直切り給ふ言葉つき、大風の朝、散り行く屋根板を拾はせらるる心遣、あれならば御養生残る所あるまじ、まだ十年や十五年に灰寄はなるまじ、死一倍に貸されまじきといふ、それは大きに思召しの違うた事、持病に眩暈、殊に次第肥満は中風下地、長う取つて五年か三年、外にしまうてやる思案もあり、是非に貸して給はれと云ふ時、諸々の末社口を揃へ、我々が思ひ入れにて、長うはあるまじ、是れに相詰めし者共は、あの親仁様の葬禮を頼みに此の大臣に御

奉公申せば、時節を待たず婿の明けさしましやうとござるといふ、さもあらば手形の下書と言ひ捨て、歸る、抑死一倍、金子千兩借りて其の親相果つると、三日が中にも二千兩にて返すなり、手形は二千兩の預りにして、小判一兩月一匁の算用に、一年の利金ばかり首に取るなり、千兩の二百兩減きて八百兩にて渡しけり、此の内借次の長崎屋世並にて百兩取つて占め、手代への禮とて二十兩取られ、相判に家屋敷のある人頼みしに、此の二人に判代とて利なしに二百兩借られ、此のほご此の事に入用銀とて取られ、此の座に居賃といふ人もあり、大分事首尾して御祝儀を貰はれ、はらりと切り解きて、千兩のものを手取りは四百六十五兩残りしを、あまたの太鼓持いさめて、是れは目出たし、大臣御立ちと直に御供申し、四條の色宿にて硯紙取り出だし、拂方の覺書、久しく埋もれたる揚屋のどいけ、野郎の花代、茶屋の捌き、大臣の御意にて二階の天井仕りました、萬事の拂十兩までは入らずと、遺日記を御目に懸くる、二三年以前に旅芝居の時損したこと申すやら、覺はもなき奉加帳取り出し、無縁法界六親眷屬までに掻き立てられ、悲しや此の金物の見事に皆になし、一兩三步残りしを、さもしや、方々大臣に金子など持たしますとはと、取つてからりと錢箱に抛げ入れられ、浮々と酒になる時、あの夢の覺めぬ内にと一人々々立ち退き、残る者として内より附きし六尺一人、御宿の戸を閉時と、連れままして歸りけり、いよく親仁の無事を歎き、江州多賀大明神に参り、親の命を短く祈れど何か利きし、此の神は壽命神なれば尙ほ長生を恨み、諸神諸佛をたゝきまはし、七日が内にと調伏すれば、願

任せに親仁眩暈心にて各々騙り着けしに、笹六嬉しき片手に年頃拵へ置きたる毒薬取り出だし、是れ氣付ありと、素湯取り寄せ、咬み碎き、覺ゆる毒の試して、忽ち空しくなりぬ、種々口を開かすに効なく報立所を去らず、見出だす眼に血筋引き、髪縮み上り、身軀常見し五倍ほどになりて人々奇異の思をなしぬ、其の後親仁は諸息通ひ出で、子は先立ちけるを知らで之れを歎き給へり、慾に目の見えぬ金の貸手は今思ひ當るべし、

大節季に無い袖の雨

桃は必ず貧家に植ゑて花の盛り、山城の伏見の里、墨染といふ所に、昔は櫻咲きて都の人をも愛に招きて入日を惜ませ、上戸は殊更、下戸の目にさへ行く春の名残、毎日見る人こそ替れ、此の一本の蔭にて飲み懸け、間もなき滴瀝、露より軽きことなれども積れば真砂の下行く川となり、此の根ざしに流れ込み、可惜櫻は枯れて名のみ残りて、墨染の水といふは其の庭にありて、秀吉公の御茶の水ともなれり、今は其時に變りて京街道の辻井戸となり、町造りも次第に淋しくなりぬ、此の邊荒れたる宿に住みなして火桶の文助といへる男、世を渡る業とて竹箒の細工さはがしく、風の朝夕も身を凌ぐ衣なく、霜夜を埋み火に命を繋げば、彼がある名は呼ばず、火桶々々と呼びぬ、悲しや年の暮も餅搗かず松立てず、箒で掃きたるやうに薪棚絶えて、米櫃にいかな事何にも無く、世にある人の衣配、丹後鱈

の肴掛を羨み、夫婦さこそは老の波、かゝる憂き事も是非なし、せめて子どもが正月に太宰取らぬも情なし、身過の常に定めなきこそ轉てけれ、數年此の里に早桃といふを作りなし、梢の春より初秋を待ち兼ね、色も着かぬを枝に見て、京なる日暮の八百屋へ遣はし、賣錢大分に徳を得て、此の幾年が大晦日心易く越し、に、八月二十三日の大風諸木根を打ち覆へし、殊に年切して、世間並とはいひながら勝れて我ばかり悲しく、板廂も樽止のみ残りて、其の後の時雨には、不思議に賣り残せし長持の蓋開けて、親子五人是れに蹲りて、片隅に木枕をかひづめにして、呼吸出しの不自由さ、浮世の闇に迷ひ、をかしからの命と悔むに効ぞなき、我が家ながら賣るに買手なく、然ながら四間口人に無料も遣られず、樽代に五十目か三十目おこせば、遣るに此の家も京橋の舟の乗場ならば、捨て、も六貫目が物はあるに、十八町の差違格別、と所を悔み、身を恨み過ぎにして行末を思ひ回らし、御上洛のある事もがな、松は永代此の家退くまじと我を出しける、此の者三人の子を持つ、物領は文太左衛門とて今年二十七になりぬ、然も素勝切ありて大男、生得ての頬鬚、眼光りて、不斷笑へる顔色、他の人の喧嘩の時より恐ろし、然も逞しければ、肩の上の働しても兩親過ごし兼ねべきにあらず、形に人恐れければ、博奕の場に蹴り込みて糞を言ひても、口過なるまじき身軀にあらず、此の大男大悪人、十六の夏の夜、妹に扇がせしに、未だ七歳なれば手先に力無くて、團の風も間意きとて、首筋逆手に取つて擲げしに、庭なる碓の上にあらけなく中りて呼吸絶え、脈に頼みなく、當坐に露と消えしを、母

親歎くに限りなく、其の死骸に取り付き、身も果てむと思ひ極めしに、其妹五歳になりしが、童心にも袖に縋りて泣き出すに不便増り、前後を見合はず内に、近所の人如何にと訪ひ寄るにぞ氣を取り直し、時節の怪我なれば是非なしと、野邊の送葬を急ぎ、其の跡は隠し濟ましぬ、又二十七の年、主ある人を横に車道、竹田の里に毎夜通ひしを母聞き付けて、命のほごも異見するに、ある曉方に歸りて蹴立てけるに、母はそれより腰抜け、起居も心に任せず空しく年ふりしに、妹娘おとなしくなり、湯茶をも汲みて孝を盡しぬ、父親に世を持がせ、己は樂寢して朝顔の花つひに見た事なく、親仁世は露の命と睨め廻して、天命知らずと人皆指を差せど、深く憎めど隨意ならず、因果は親子の中、是にも同じ家に置きて、無い物食はうと言ひたいまゝ、に月日を重ね、今といふ今差し詰りて一日を暮し兼ね、水を湯になす生柴も無く、同じ枕に最後を極めぬ、斯る時にも母親娘を悲しみ、人置の口鼻を招き、内證を語り、是れが命を助け、問屋町の宜しき方へ奉公に頼みければ、人置も袖を絞り、十分一は取らずに濟まし申すべきと連れ行くに、足立たずしてやう／＼負ふて行くにぞ涙なる、者恵はあれども小さくして、銀貸す旦那なければ、我ばかり身を助かりて詮なしと、又親許に歸り、彼れ口鼻に呟きは、自分賤しき顔ながら、それ／＼の勤もあれば、傾城屋に身を賣る事は、といふにぞ、志優しく、いづれの爲にも親達の爲めなればとて、島原の一字屋とかやへ連れ行きしに、子供を聞きて情をかけ、女は然もなければ其の心根末々頼もしと、金子二十兩定の年季にして貸しけり、伏見に歸

り、此の金親に渡せば、世に類はあれども、子に身を賣らせ、其の金にて年取る事はと歎くを、人置いろ／＼諫めて戻し、跡にて子ながら思入を嬉しく、明くれば十二月二十九日萬づの買物心當しけるに、此の事を聞き付け、商人の習なれば、米屋よりは一俵庭に運ぶ、味噌、鹽、酒屋より持ち懸け、久敷音信不通の魚屋も御用はなきかと尋ね來り、少しの内に銀は自由なる物はなしと歎びし、其の夜惣領の文太左衛門二十兩の金子を盗み出し、行方知れずなりにき、程なく明けて大年なれど、此の仕合せなれば買懸濟ますべきやうも無く、皆々取り返されて又夢の間の昔になりぬ、今は是非なく、夫婦宿を忍び出で、又の世の嚮導六地藏の邊に行きて、高泉和尚の寺近き野原に坐を卜めて、遠くは過去慳貧の果なるを念ひ、近くは求不得苦を觀じ、當來を祈らむにはと佛名繰り返し、舌食ひ切りて、骸は山犬のものごなりける、諸人文太左衛門を憎み、此の行末東の方なるべし、逢坂の關をゆるすなど追ひ懸けしに、粟津の松原より空しく歸りぬ、知らぬ事とて是非もなし、文太左衛門は手近なる榎木町に忍び入りて正月買と浮かれ出し、あまた女郎を聚め、七草の日まで一步残らず撒き散らして、不首尾顯はれ渡り、宇治の里に立ち退きしが、彼の二人の親の最後所になりて足審み、様々身を悶へ眼眩みて僵れしに、兩親の亡骸を啖ひし狼又出で、終夜黽喰ひ大方ならぬ憂き目を見せて、其の骨の節々までを數多の狼啣へて、狼谷の街道端に又人形を並べおきて、文太左衛門が恥を曝させけり、世にかゝる不孝の者例なき物語、恐ろしや、忽ち天之れを罰し給ふ、慎むべし／＼、

●跡の剥けたる煙入長持

煙入、煙取に礫を打つこと狼籍なり、如何なる故ぞと思ふに、是れ格氣の始めなり、人が好き事あれ
 ばとて脇から腹立ちけるは、無理の世の中の人心、我が子さへ親の随意ならず不孝となり 女子縁附
 の年の程ありて人の家に適き、其の夫に親み、親里を忘れぬ、此の風義何國も變る事なし、加賀の城
 下本町筋に絹問屋左近右衛門といふ所久しき商人、身代不足なく、其の身堅固に暮し、子二人ありし
 が、家嗣は龜丸とて十一歳、姉は小鶴と名づけ、十四才なるが、貌勝れて一國是れ沙汰の娘なり、不
 斷も加賀染の模様よく色を作り、態をやれば、誰いふともなく美人絹屋と門に立つ人絶えず、折節縁
 附頃なれば彼方此方の所望、此の返事母親も迷惑して申し陳べし、手前宜しければ、かねて手道具は
 高蒔繪に美を盡し、衣装は御法度は表向は守り、内證は鹿子類様々調へ、京より躰方の女を呼び寄せ、
 萬事おとなしく身を持たせ、今は誰殿の煙子にも恐らくはと、母親鼻の高きこと、白山の天狗殿も顔
 を振りて逃げ給ふべし、實にや娘の親の習にて、化物盡しの嘶の本の中ほごに赤子を頭から嚙り喰ふ
 顔色なる娘も、花見紅葉見の先に立て、搦白の行く様なる後から黒骨の扇にてあふぎ行くは、可愛
 さばかりにはあらず、母の目からは昔の伊勢小町、紫の抱帯、前から見ても横から見ても、風采好し
 と思ふ可笑し、是れさへ如此あれば、左近右衛門娘に衣類、敷銀を附けしは、好い事はかり揃へて、

人の欲しがるも尤もなり、此の娘の物好きに、男好く、姑無く、同じ宗の法華にて、奇麗なる商賣の
 家に適く事をこいへり、千軒も聞き比べ、見定め、願の如く呉服屋へ遣はしけるに、兩方互角の分限
 馬は馬連、絹屋、呉服屋然もあるべしと沙汰しけるに、此の娘半年も立たざるに此の男を嫌ひ初め、
 度々里に歸れば馴染も薄くなりて、暇の状を遣はしけり、間もなく其の跡へ呼べば、娘も亦菊酒屋と
 て名高き所へ嫁入せけるに、爰も秋口より物姦しとて否がれば、縁なきものよと呼び返しぬ、其の後
 貸銀して仕舞屋へ遣しけるに、爰も人少なにして算用する家を嫌ひ、名残惜しがる男を見捨て、恥を
 も構はず歸るを、親の因果にて捨て難く、三所四所去られ、長持の剥けたるを昔の如く塗り直して生
 薬屋へ送りけるに、男に仔細もなく、身上に言分なければ、暇状取るべき事もならねば、作病に癩癩
 病み出し、目を見出し、口に沫を吐き、手足震はせければ、是れ見て堪忍なり難く、竊に戻す喜び、
 親には先の男に嫌ふ難病ありと、跡形もなき告口、此の報あるべし、程なく振袖似合はず、脇塞ぎて
 からも二三度も縁組み、十四より嫁入爲初め二十五まで十八所去られる、女にも斯る悪人あるもの
 ぞと後に聞き及び、捨て所なく年を経りけり、煙入の先々にして子を四人産みしが、皆女の子なれば
 暇に添へられ、是れも親に厄介をかけて育てしに、夕に泣き出し、朝に煩ひ、憂き目を見せて此の懊
 惱きこと、藥代にて世を渡る醫者も、後には見舞はず、死次第に不便をかさねけり、弟龜丸女房呼び
 時なれども、姉が不義ゆる其の相手もなく過ぎぬ、龜丸是非もなき思となり、二十三歳にて果てぬ、

二人の親も世間を恥ぢて宿に取り籠り、悔死、さう口惜しかるべし。其の後は獨り家に残れど、夫にならざるべき人なく、五十餘歳まで有るほどを皆無になし、親の世に使はれし下男を夫として、所を立去り、片里に引き込み、一日暮に男は犬を釣れば、己は髪を油を賣れど、聞き傳へて之を買はず、今日を送り兼ねて朝の露も吭を通り兼ね、目前の限りとなりぬ、花に見し容は昔に變り、野澤の岩根に寄り添ひ、身鱗の如くなりて死にけり、惣じて女の一生に男といふもの一人の事なるに、其の身持悪しく、去られて後夫を求むるなど、末々の女の事なり、人たる人の息女は嗜むべき第一なり、縁結びて再び歸るは、女の不孝此れより外なし、もし又夫縁無くて、死後には比丘尼になるべき本意なるに、今時の世上勝手づくなればとて心のさもしき事と、偽を商賣の仲人屋も、是れは眞言を語りぬ、

●適興改めて嘶の點取

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、何も入らぬ浮世とは思へども、一日も食はねば餓し、人は盜人、火は燒亡と、舞々の又太夫が言葉の末、さるほどに今時の出家氣質ほど可笑しきはなし、智恵才覺には構はず、武士の家にては弓馬の藝に疎く、又病者にして勤のなり難きを勤めて法衣を着せ、町人は算用恩かに、秤目覺えず、日記附さへならざるを、とても商人には思ひも寄らず、世を樂に墨染になれど、親類了簡の上にて髪をおろさせ、生國の邊高津の宮の片蔭、鹽町の裏に合力庵を結び、始めのほどは法

師珍らしく、朝水手向け、夏花摘むなど殊勝に、世間の取り遣りの物前にも、根付にする瓢箪の口を細工して居るなど、山椒は辛し、昆布出は甘し、萬づの精進物を覚え、昔の鰾汁も忘れ果て、おもしろや此の境界と思ふたばかりにして、又世の佛の道をも、心の駒の跳ね次第に知らず、衆生を勤むる資もなく、布袋肥に齋米を費やし、娑婆塞げに今の世に多きものは、供一人連れし醫師と道心者、扱も坊主勝にぞなりにける、殊更近年女の墨染も佛の身ならば彼等が心底を聞きたし、後の世願ふは稀なるべし、只夢なれや難波津の大湊、横堀あたりの問丸に搦屋の何某が年久しく子の無き事を歎きしに、適男子を設け、花にも月にも眺め、大事に育てし効ありて、十五歳にして脇を塞ぎ、六の年角を入れて、然も美男なれば讚草も靡き、二人の親も我が子自慢して、此の上の富貴は何にても望なし、此の子が娘なるべき容儀もがなこやうく尋ね、堺の大道由緒ある人の息女を縁極して、表屋作りの大普請、萬事に清雜を盡し、離れて隠居拵、此の霜月の吉日を待ちしに、其の頃は嘶作りて點取の勝負流行りしに、折節の兼題に、返咲の花蔭は哀れに可笑しき物、初霜の朝に四人泣くは悲しきもの、世の中にあれば嫌なものなければ欲しきもの、始め懼ろしく、中ほどは怖く、後は好かぬもの、時雨の夜は跡先の知れぬもの、此の五つの題を取りて明暮案じ入り、嘶ほどの事ながら心をそれになして、安達ヶ原の鬼ども胸を燃し、人の物を遣らぬ分別も出で、今も知れずと無常を觀じ、今日の首尾太夫は如何に暮しけるぞと思ひ、様々に移り氣、魂我ながら定めかね現に枕引き寄せ、寝入りもやらぬ耳

近く、十月十五日の曉方に浮世念佛の連聲艶しく、殊勝に思ひ入り、明くるを待ち兼ね、出家の書置して難波の寺に入るを、各言葉を世にあるほど盡し、意見を聞き分けず國遠して面影もなかりき、二人の親又もなく泣き焦れ、五年餘りを待つに音信なきを猶悔みて思死の時、誰に残してこ、可惜財寶をなくなし、其の家名絶へて後は言ひ出す人もなし、難波を出で、筑紫瀉に下り、善導寺に勤めしが又心取り亂して、跡を顧みず還俗して、上りの舟路にて精進をあげ、昔に歸る家もなく、心當も大きに違ひ、せめては以前の家來に少しの合力を請けて、堀詰の新道に宿を求め、南京獅子笛の細工、土佛の水あそび、自から身けづりし無用の道心、何の見付け所もなく、尊き事をも辨へず、無我無分別の發心、親に思はざる外の氣を惱ませ、是れ比びなき不孝坊といへり、

本朝二十不孝卷之一終

本朝二十不孝

卷之二

我ご身を焦す釜が淵

近江に悪い者の寄合屋

旅行の暮の僧にて候

熊野に娘やさしき草の屋

人は知れぬ國の土佛

伊勢に浮浪の針釣屋

親子五人仍而書置如件

駿河に分限風吹かず虎屋

本朝二十不孝

●我ご身を焦す釜が淵

黄金こがねの釜かまの掘り出し今の世には無かりき、富貴にしても苦あり、貧賤にしても樂あり、一切いっさいの人間應たのしみせぬ分限ぶんげんを願ひ、身を亡ぼす古例、其數を知らず、漣なみだや大津の浦より矢橋に渡す舟師ふねしの身は、比叡ひゑの山風やまかぜの燈火とうしと危く、入相の鐘を聴けば命いのちの内外うちそとの憂慮うれ、我に雲となり雨となる鏡山かがみやまも、人顔見えず暮い悪り、旅人心りょじんの急げば、爰いっせいには一勢出だし船を蚤めてなど聲々に頼めば、我老の波六十に餘れども、今いま時の若者拙者わかものが裸思ひもよらずと、諸肌もろはだを脱ぎしに、肩先かたさきより手首てくびまで切疵空所きりきずあきところもなく、枝も深山木みやまの漆うるしの如し、なほ背せなか中に憂うれき目見せける、あれでも死なぬものかなと各々横手よこてを拍うつて、是れはいかなる故ゆゑに如此かくまで身みをあやしめけるぞ、親仁問おやぢはれて涙なみだに袖そでを浸ひたし、されば人間にんげん前生ぜんじやうの因果いんぐわを知らず、某それ抑おさは石川五太夫いしかわごたふとて滋賀の片里かたがはに住すみなして、あまたの人馬じんばを抱かかへ、物ものつくりをして世の中の秋あきにあひ、春を送り、然しかも一子いっしに五右衛門ごゑもんとて、勝れたる大力たからき、殊ことに諸藝もろぎに達し、老の未々みま頼たのもしかりしに、巳おのが農作のうさくを外ほかに無用の武藝ぶぎを嗜たしなみ、柔術やわら、捕手とらてを稽古けいこに、闇やみの夜よの櫛ちまたに出で、往來わうらいの人ひとを悩なやましけるが、後のちは慾心よくしん起りて、勢田の橋に出で、水を飲み、盜跖たうてつ、長範ちやうはんに勝り、國くにに盜人たうじんの司つかさとなり、類るいに聚あまる悪人あくじん、關寺せきでらの番内ばんない、坂本の小虎ここら、音羽ねはの石千代いしちよ、膳所ぜんじよの十六じゅうろく、此この四人よににんをはじめ其の外ほか鍵かぎ

放の長丸、手輪の風之助、穴堀の團八、繩之の猿松、窓潜の輕太夫、格子毀の鐵傳、猫の眞似の關右衛門、隠松明の千吉、白刃取の早若、此等をそれ々の役分して近在所々に入りて、夜毎に寢耳を驚かし、萬人の累となりぬ、此の事次第に暮れば、天の咎、世の穿鑿、いかなる憂き目にあはむかと頻りに意見するに却て仇をなし、現在の親に繩を掛け、それにて思ひ知れど、捨て置き、己が寶を己と盗み眷屬召し連れ、都の方へ行きける、其の後に日頃五右衛門に恨深き狼籍者亂れ入り、子の代りに此の親を、死なぬほど斬れ〜と、此の如く身を苛責れ、これにも惜しきは命、世の業替へて生死の海の渡舟、さりとほ〜悲しき物語の内に、軸岸に着けば各上り、斯る悪人もあるものを、天竺阿闍世、唐土の惡王にも劣らじと、皆々涙になりて別れし、彼の五右衛門は都にて白晝に鎗を三人並の手振を先に立て、其の身は乘馬、後より狹箱持、沓籠、歴々の侍と見せて檢分に廻り、大盜の手段をして、仲間仔細あれば大佛の鐘を撞き鳴らし、是れ合圖に集り、己は六波羅の高敷の中に隠れ居て、爰夜盜の學校と定め、命冥加のある盜人に此の一通り指南をさせ、前髪立の野郎には巾着切を教へ、大膽者には追剝の働を習はせ、人跡らしき者には騙の大事を傳へ、里育の者には木綿を盗ませ、色々四十八手の傳授を印可まで此の道修行するこそうたてけれ、後は三百餘人の組下、石川が控を背き、夜分別もなく京都を騒がせ、ほごなく搦め捕られ、世の見せしめは七條河原に引出され、大釜に油を焼き立て、之れに親子をへれて煮られけり、其の身の熱さを七歳になる子に拂ひ、とても通れぬ今の間

なるに、一子を我が下に敷きけるを見し人笑へば、不便さに最後を急ぐといへり、己その辨あらば斯くはなるまじ親に繩掛けし報目前の火宅、なほ又の世は火の車、鬼の引肴になるべしと、之れを惜まざるはなし。

●旅行の暮の僧にて候

雪こんくや、霰こんくよ、小襖に溜めて、里の小娘嵐の松蔭に集り、袴の寒けき事は厭はず夕暮を惜む所へ、熊野參詣の旅僧山々の難所を越え、やうく麓に下り、此の童子の方に立ち寄り、呼吸も絶え〜の聲して、人の住家は遠いかと、足腰爰を立ち兼ねしを見て、皆々宿に走りぬ、其の中に岩根村の勘太夫が娘小吟といへるは、未だ九歳なりしにおとなしく、今少し行けば我が方なり、湯をも進すべし、と御出家に力を附け嚮導して宿に歸れば、夫婦立ち出で小吟が志を思ひ遣り、又旅人哀れと、萩柴折り燃き、さま〜饗しけり、法師草臥を助けられ歡喜限りなく、心靜に油團包を拾め、肩に懸けて、某國里は越前福井の者なるが、過ぎし年二人の親に別れ、それより世を過ぎて、かく墨染の袖に涙は少時も干し兼ねて、せめては死後の供養に諸國を巡りける身なれば、重ねて又もやと手を合せて拜み、夜を籠めて立ち行く後にて、娘申しけるは、今の坊様は風呂敷包の中に小判嵩高く革袋に入れさせ給ふを見付けたり、御一人なれば人の知る事にもあらず、殺して金を取り給へと囁きけ

るに、思はざる慾心發り、山刀を差して枕鎗提げ、跡を慕ひて追ひ懸け行く、未だ此の娘九歳の分として、かゝる事を親に勸めけるは悪人なり、殊更熊野の山家なれば、干鯛も木になるものやら、傘は何の爲めになるものをも知らざる所に、小判といふもの見識りけるも不思議なり、彼の出家廣野に枯れし草分衣の裙高に取りて、霜月十八日の夜の道、宵は月もなく推量に辿り行くに、脇道より人の足音軽く立ち佇まりけるに、大男鎗の鞘放して飛び蒐るを、これは悲しく、逆さまに願れば最前情に預りし亭主なり、言葉懸けて、我出家の身なれば命惜しきにあらず、然れども何の意趣ありて、斯く害し給ふぞ、路銀を取るべき望ならば命に代へて惜まじと、小判百兩ありのまゝに抛げ出せば、之を請け取り、銀が敵となる浮世と思へ、と脇腹を刺し通せば、苦しき聲を揚げ、汝此の一念幾程かあるべし、口惜しや〜といふ呼吸の次第に弱り、野澤の汀に僵れしを、押へて止を刺し、死骸を浮藻の下に沈め、竊に宿に歸れど、世間に識る人も無く、其の後は家榮えて、牛も一人して持ち、田畠も求め、綿の花盛り、米の秋、思ふまゝなる月日を重ね、小吟も十四の春になりて櫻色なる顔を作れば、山里には殊更に目立ち、之れを懸ひ忍ぶこと限りなし、妾の自慢より男選みして、つひに夫を定めず、身を存在に持ちて浮名の立つ事うたてし、様々意見するに曾て親のまゝにもならず、此の富貴は自分が智恵付けて箇様になりけると、折々大事を謂ひ出し、子ながら持て餘しける、ある時我と男を見立て、あれならばと言ひけるほどに、兎角は心任せにと、人頼みして橋を懸け、世を渡る持に愚か

ならぬ舞なりと一入敷び、契約の酒事まで済みて後、此の男の耳の根に見ゆるほどにもなき腫物の痕を嫌ひ、和歌山の姥の方へ逃げ行きしを、所に置き兼ね、屋敷方の腰元つかひに遣はしける、其の身いたづらなれば、奥様の手前を憚らず旦那に、戯を仕懸け、いつとなく我が物になしけり、さすが武士の息女なれば、世にある例ど、知らぬ振したまひて過ぎぬ、小吟慕りて此の懸止まず、家も亂る、ほどになれば、世上の取沙汰思し召して、此の事隔てぬ夫婦の中に語り給へば、旦那今まで過失の至極の心になりて、それより此の道堅く止めさせ給ふを、小吟奥様を深く恨み、ある夜御番の留守を見合せ、御寢姿の夢の枕元に立ち寄り、御守刀にして心臓を刺し通しければ、驚き給ひ、汝道さじと長刀の鞘放つして、廣庭まで追ひ懸け給へども、かねて拔道拵へ置き、行方知らずなりにき、色々御身を揉み給へども、重傷なれば弱らせ給ひ、小吟めを打ち留めよと、二聲三聲めより幽かに、はや命はなかりき、御次に臥したる女ども事過ぎて起き合はせ、是れはと歎くに甲斐なく、小吟が逃げ延びし道筋に追手をかけしに、女には健氣に立ち退きし、小吟が出づるまでは其の親ども牢舎とありて、憂き目を見せけり、愈出でぬに極まり、霜月十八日に成敗と仰せ出だされしに、此の者預かりし役人不便に思ひ、子ゆるに如此は成り行くなり、臨終を覺悟して又の世を願へど、終夜酒を侷めけるに、此の親仁の機嫌よく、更に歎く氣色なし、外にも科ありて命を取らるゝ者、我が悪は謂はで歎きしに、汝は子の代りに斯る憂き事にといへば、此者出家を殺せし因果のほどを語りて、七年目に廻り、月も

日も明日に當れり、此の理と思ひ定め、觀念したる有様、悪は悪人にして此の志を皆々哀れに感じけり、とても免れぬ道を急がせ、首討ちての明の日、親の様子を聞きて、隠れし身を顯はし出でけるを其のまゝ之れも討たれける、いづくまでか一度は捜さるゝ身を隠しぬ、おのれ出づれば仔細なく助かる親を、これ例もなき女なり、と憎まざるはなかりけり。

●人は知れぬ國（土佛）

御經にも、命は水上の泡の如しとあり、浪は風の立たせ、人は友の囁がしぬ、伊勢の國鳥羽といふ大港に出崎の藤内とて、貧家に煙を立て、蝋の手業の釣針の鍛冶住みしが、藤助と名付けて一人の子を持ち、老の起居の手助かり、鏝の槌を打たせ、斯る浮世のならひにて、親は憐み、子は孝を竭すを道なり、此の浦邊に近年の出來分限神部屋といへる人、仕合丸とて大船を造りて、大廻しの江戸商、此の舟の上乗に若きもの、抱へられしに、藤助家職を捨て、之れを望みしを、二人の親深く歎き、身過は様々なり、萬里の海上を行く事一つの命を二つ物がけ、是非に思ひ留まれど、大方ならず旅の名残を惜み、死に別るゝが如く、涙は目の前の海ともなりぬ、此の有様を構はず、東路見る爲めなれば此の度ばかりと出で行く、其の跡は風の夕暮、雨の朝を物案じ、て、諸神に大願、諸佛に歩運び、後世を忘れて現世を祈り、我が子の無事願ひしに、明るる年の春の風、舟は美濃の湊に着きて二度顔

を見し事、喜びの酒の上に様々の誓言にて、親たる人の心を背くなれば、重ねては思ひ寄らぬ舟の上と、言葉にて安堵させしが、心底には中々思ひ留まる事にあらず、慾は人の常なり、戀は人の外なり、最前下りし時伊豆の下田に舟がゝりせしに、其の苦の屋の女に假初の誓して、故郷の住居を捨て、各に暇乞無しに、出船あるを幸ひに乘行く、折節は中の秋、空恐ろしく雲の叢立ちけるが、日和見も定めなく、此の舟沖に出づると、寅の刻より大風吹き暮れ、九日流され、月の光に晝夜の差をやう／＼に覺え、夢心になりて行くほどに、淺瀬に舟底觸ると思ふ時、皆々魂を取り直し、目を開きて見しに、國里の草の形はありて、蘆の枯葉の芭蕉の如くなる中に、二角後へ生へる獸、是ぞ水牛ならめ、其の他人形ありて羽のあるもの、聲は宛然犬にして一丈餘耳の長きもの、一つも目馴れず、物凄く、近附くに身を縮めけり、山も里も見事絶えて、船中三十二人男泣にして暮れぬ、米はあれども水を切らし、吭渴けば伊丹鴻の池の四斗入りを酌み交はし、此の中にも酔に憂きを忘れ、鹿の巻筆の小歌唄へば、觀音經讀むもあり、六字南無右衛門節の淨瑠璃を語るもあり、下戸は荷物開けて、旅硯に露を澆ぎ、願狀を書きぬ、又は一步小判を取り出し、四五年に折角延ばしける甲斐なしと、算用して居るもあり、今果つべきも知らぬ命の内に、足が觸つたと口論をする機嫌もあり、來年の正月の事をいふもあり、人の心は様々に變れど、此舟爰を去らぬ難儀、思ひ出せば惣泣に、哀れを訪ふ人もなく伏し沈みぬ、なほ立つ浪荒く、腥き風吹きて、又此の舟を散らし、遙なる磯邊に着きて、岩組に上れば、

清き流の幾條かありて之を搦ひ上げ、舟にも貯蔵をして命を繋ぎぬ、心静に眺めければ、諸木五色の枝を垂れ、玉敷の光に驚き、我もくゞと拾ひしに、不思議や老いたる社人顯はれ、一つも取る事恐なり、やれ船に乗れど、難有き教に任せけるに、藤助ばかり聴き入れず、玉拾ふ内にどつと吹き來るは是れ神風ならむ、波路心に任せ、仔細なく伊勢の大淀の濱に戻りて、藤助が身の上語りければ、夫婦の人焦れ泣き、五歳あまり待ち詫び、兩親ともに果敢なくなりぬ、彼の藤助は島に残されたりしを、見馴れぬ、唐人あまた來り、取り圍みて連れ歸り、鐵門の嚴き人家に入れて、銅の柱に貫き通せし中ほごに倒懸に釣り掛げ、手足の筋を取りて人油を絞られしは、生を更へず地獄の責にあひぬ、弱れば、藥を與へて、生けつ、殺しつ、日數経るうちに、日本より渡唐の僧四百餘州を巡りて此所に來り暫し行み、此の有様を見給ふに、藤助昔の形は目ばかり動きて、右の小指を喰ひ切り、左の袂に心のほごを書きて見せけり、自身は生國勢州鳥羽の淺、藤助といふものなり想はざる難風に遭ひて爰に流され、斯る憂き事に身を責めらるゝは悲し、此所は瀨瀨城とて怖ろしき國なれば、命を取られ給ふなと、書き付けて見せしに驚き、爰を立ち退き、修行の後歸朝し給ひ、此の里に來りて、此の物語遊ばしける、聞く人涙に暮れて、此の藤助が身の難儀は、皆親の言葉を背きし罰ならんと思ひ遣りぬ、

●親子五人仍而書置如件

人は皆煙の種、富士の山劇しき風病はやりて、難儀を駿河の町に醫師疎なく、旦那寺の門を敲き、無常は何時を定め難し、折節の寒空にも經帷子一重を浮世の旅衣、爰に吳服町二丁目に虎屋善右衛門とて分限國中に沙汰し、棟高き家あり、年榮えむ時より法鉢しての十徳、名を善入と呼ばれて、何の役なし坊となりぬ、物領を善右衛門、是れに家督を渡し、二男善助には殿方の商賣、三男善吉に町屋、善八に寺方と、それ々に商賣の道筋を付け、いづれも若盛りにして器用に勝れ、笛、鼓、太鼓をならべて朝暮座敷能を、善入太夫をし給ひば、四人の子ども囃方を勤め、手代あまたあればツキ、ツレ、地謠まで家内にて仕舞ひ、歡樂ならびなく、いつ年の寄るべき者とも知らぬ身の、夕暮より風邪心と少しの事の覺め難く、色々醫術を盡すに驗氣もなく、次第弱りの枕に四人の子御機嫌の程を伺ひけるは又もなく美々しく、人は病家を他人に見せけるは悲しきものなり、斯る時節には妻子ならでは頼みなし、善入浮世の限りと思ひ定め、書置狀を残さむと、四人の子ども近く寄せ、通口の戸を閉めて、我れ此の度絶命なれば申し置く事外に無し、兄善右衛門を親にして、我に隨ひし如く何によらず少しも背く事なかれ、扱世間を思ひ廻すに、見分より無いものは金銀なり、此の家久しく榮えて、外よりの思はくには五萬兩もあるべきやうに見ゆべし、汝等先として頼もしく思ふべけれど、人には聞かさぬ事、さりとて格別の内證なり、内藏の鍵渡すなれば、諸道具檢むべし、我か名跡を襲がせぬれば、此の屋敷萬事を此のまゝ善右衛門に取らすなり、有銀は甲乙なしに四つに分けて譲るなり、爰に秘密の

内談あり、手前宜しき人には、大分の金銀をも預け、縁組の爲めにもなり、彼れ是れ勝手の好きこと多し、それによつて我分別して、世の所聞ばかりに無い金子を書置する事ぞ、必ず心にて済ますべし、やう／＼小判二千兩ならでは淺間を誓文にて外になし、是れを八千兩にして、一人に二千兩づゝと書き置くなり、無用の借上なれども、人間は外聞、と申されければ、いづれも御志に涙を流し、誓御譲り無きとも願ひ申すにあらず、自然死去遊ばすとも、兄親の事なれば随分御心に随ひ、渡世に精を入れ、末々繁昌になし申すべしと、言葉揃へて申しければ、善入嬉しく、今は思ひ残す事もなしとて、此の通りに遺言状を認め、それより四五日過ぎて極まる往生を各悲み、野邊の葬送花を降らし、死光とや提燈道を輝かし、葬禮までを人の羨みけり、地獄極樂の道も錢ぞかし、四十九日迄の吊魂、諸僧の經の聲絶えず、人皆之れを殊勝に思ひしに、二男善助七日も經たぬうちより惡心起り、香花をも取らず、十露盤枕にして思案を回らし、善吉、善八を招き、此程情思ふに、いかにしても此の家に二千兩ばかりの有金世上にも實にせぬ事なり、是れは善右衛門親仁を誑し、かくは書置をさせける、八千兩金子あるに極まりし事なり、其の上大分の道具を取るなれば、是非書置の通り金子請け取れと申出だせば、慾に目の見えぬ若者進みて、段々親仁仕方悪し、兄顔をして善右衛門憎し、書置を證據に此金子請け取れと、前先輩はす談合占め、此の通り申せば善右衛門驚き、其方皆々相對にて親仁世に在す時よく／＼合點して、今更商様に申すは如何なる事ぞ、人に聞かすな、心許なしといへば、三人

顔色變へて、何か秘す事には非ず、親の遺言の通り金子渡し給へと、詮議に及ばず責め付けられ、善右衛門身にしては扱も悲しく親の恥を露はし、又斷り申せば家の滅亡、色々意見してもなか／＼聞き入る、氣色もなし、證文の立つ世上なれば、是非もなき仕合せなり、よしなき外聞を思し召しての跡式忽ち難儀となり、我一人の迷惑、汝等も了簡の上にて此の首尾に濟し、偽なき某を疑ふと天命免るべきか、之れを思ふに、大方ならぬ因果なり、世に存へて嬉しからずと思ひ究はめ、親の名を下すと後の世までの不孝なり、命惜しからしと、夜更けて宿を忍び出で親達の墓に詣り、此の段々を歎き、卵塔の水艇に腰を懸け、四十二の十一月五日の明方に腹掻き割いて夢とはなりぬ、野寺の坊主告げ來りて、又もや愁に沈みぬ、善右衛門妻の悲歎理せめて哀れにこそ、三人の弟ども、他の人の顔して死白痴と申しなし、亂氣の沙汰になりて濟みぬ、其の後三人の者藏の鍵請け取り、吟味をするに小判二千兩の外になし、此の行方の詮議止む事なく、其の夜は三人ながら藏なる金戸棚の前に臥しける、夜半に善右衛門係を顯はし、我が女房に心を残さずまざ／＼と語りければ、夢の中にも胸を定め、目覺めてなほ一念やめず、枕にかけし長刀取り延べ、藏に驅入り、善助、善吉、善八を漏さず切り据ゑ、二歳になりし男子を姥が添乳をせし懷より取り出し、自害せられし善右衛門脇差を持ち添へさせ、目前に親の敵討と三人ともに止め刺し、此の事姥に語り置き、其の身も心刺し通して消えける、露の世の朝の霜、これほど果敢き事はなし、子細聞き傳へて弟三人の大惡を憎み、兄の心底推し量りて、見

ぬ人までも袖を浸しぬ、其の跡は二歳ふたつこ兒の善太郎にしせらけるとなり、家榮え、家滅ぶるも皆是れ人の孝と不孝とにありけり、

本朝二十不孝卷之二終

本朝二十不孝

卷之三

娘盛りの散り櫻

吉野に恥を晒せし葛屋

先斗ほんてに置いて來た男

堺にすつきりと仕舞屋

心を吞まるゝ蛇じゅうの形

宇都の宮に慾の離れぬ漆屋

當社の案内申すほご可笑し

鎌倉かまくらに枯々の藤澤屋

本朝二十不孝

●娘盛りの散り櫻

大和國吉野の里に内裏雛を立て、娘友達集り、彌生の節句遊戯、菱の餅、桃の酒を送れば、返へす袂の色榮えて、人は育ちにて容の見好げなるぞかし、爰に住み馴れて晒葛屋の彦六といへる人あり、家榮えて何事に不足もなし、雑書の通り娘の子ばかり五人、いづれも生れつきて美しく、女に仕合せの種なり、惣領お春といへるを其の里のよろしき方へ貰はれ、縁組の間もなく懐胎の身となれば、日を算へ、月を繰り、産れぬ先乳姥を定め、鶴龜の附きし小袖を拵へ、夜更けて松吹く風の戸に音づる、をも其の事かど、母の親目も合はず氣遣ひせしに、悲しや腹痛みて身を悩み、五七日も憂き目を見せし、常々千安の地藏に祈り、腹帯の明神に宿願懸けしも効なく、惜しや命十六の卯月ひとへの明け方に無常鳥の鳴き出し、親兄弟に深く歎かせ、なほ袖の雨降り續き五月の頃まで思に沈みしを、世には一人の子を失ふもあるに、未だ數ある事なれば愁を霽らせと、道理をよく考へし人に諫められて、思ひ流す吉野川、泡沫の消ゆる習と其れが事を忘れ、其の次の娘お夏はごなく十六になりて、然も風俗姉に見増りて彼れ是れ焦るゝ中に、此の所の庄屋を捌き、聲にしても苦しからぬ方へ契約して諸道具拵へしが、當年十六、姉がこゝ憶へば吉凶悪しきとて、其の年を延べて十七の正月に祝言取り急ぎけ

るに、是れも懐妊して月を重ね、姉が如く持ち籠りにして果てけり、いかなる因果ぞと、二親之れを悔む事限りなく、野邊の葬送せし時、さる人の差し出で、言へり、かくある死人は左鎌を打たせ、其の身二つになさでは浮む事なく、後の世覺束なしといふにぞ、なほ悲しく、沐浴其の通りに念佛講中を頼みける、女の身ほど果敢なきはなかりき、されども世上を住む習ひとて次第に後を忘れて、又三番目の娘お秋といひしも早十五歳になりぬ、とりわき奇麗なる容、志もやさがたに情深し、近所の人々執り持ちて、由緒ある人の子ごもに美男なるを入縁に娶らせ、念ひ晴しにといはれけるに、何事も打ち任せて其の男子を頼ひ、ほごなく家督を譲り、夫婦一度に法牀して、世の樂みといふ事今ぞと嬉しく、尊き寺へ詣り、下向の道に暮しけり、明くれば入習孝を盡し、遠き海魚を斯る山家に調へ、忙しき事は餘所の吹く風に聞きなし、雪にも焼火して冬なき國の守をも恐れず、此の上に願もなかりしに、いつの頃よりかお秋青梅を好けるにぞ、度々懲りて轉て、諸神に祈誓を懸け、平産は身の羸生、之れを大事と、事に馴れたる婆を雇ひ、腹帯の締め加減、庭働きに身をこなし、腰を少しも冷さず、目通りより高く手を舉げさせず、寐姿も足を延さず、頭は關枕にてとめ、身を固むるに残る所なく、食物をも檢め、産月を待ちけるに、是れも五躰を悶へ、十日ばかりも憂き事に遭ひて、睡る如くに呼吸絶え、さりとは外聞も宜しからず、不便は外になりて、死骸に重なり、夫婦自害と見えしを各取り付き、色々言葉を盡し、至極の意見を聞かせ、思ひ止まりて後、三十五日を立つを待ち兼ね、四番目

の娘お冬をすぐに妻し給へといへば、二人の親、萬事は人々の御了簡に泄れじ、何卒我々には聞かせ給はずとも此の首尾頼むと、先立ちし三人の娘のため、佛を尊み、僧を供養し、馴れし小袖の皆々脇さへ塞がりしを幡天蓋に縫はせ、斯る歎の又もあるべきかと、泪は袖行く水に經木を書いて、流れ瀧頂を立て、親の身の子を吊ふは逆川に、沈みて死なぬ命の愁く、お冬に縁組みの事各言ひも果てぬに、聲を揚げて泣き出だし、泪片手に挾箱の蓋を明けて、麻の衣の墨染、淨土珠數を取出し、自が縁は佛様に結ぶ志なり、此の度の愁ひの無きうちから夢幻と願ひ定めし世の中の姉様達の跡をも吊ふべしと願ひしに、此の宿を出兼ね、又もや憂き目を見し、亂れ心の黒髪あるゆゑと、手づから切るをやう／＼に止め、さもあれば親の不孝の第一なりと、親類集り、殊には下市の里に住まれし姨たる人を呼び寄せ、様々に言ひ宥め、せめては三日なりとも男といふものに逢ひ馴れ、其の後は出家になりとも隨意と泪に暮れて、魂の入り換るまで教訓して推し附け合點させ、祝儀の事済みて、いつとなく契深く、四年餘りも過ぎ行けば仔細なく喜こびしに、又月止まりて、産月に足らで空しくなりぬ、四人まで同じ最期なりしは世に例なき事、前生にいかなる悪縁を結び、親となり子となり、今の難儀に遭ふ、さてもうるさしと、彌善提心を起し、常精進の身となり、唱名の暇なく香花を摘みて四人が跡を吊ひ、片陰に取り籠りければ、表屋は昔と荒れて野犬の臥床となりぬ、發心の身となりても心に懸る山の端は、乙女といひて五人目の娘、今は十五になりぬ、是れも縁附頭をうてたく出家を勧め、最前

お冬が心から願の道を止めてよしなき男を持たせ、復らぬ事を悔みぬ、思へば、現の間なり、其方は髪をおろし、姉ごもが命日を伺ひなば、未來を悪しからじと勸めしに、以ての外、心入れ、たまゝ人間に生を受けて、男といふもの持たでは口惜しかり、親達の厄介にはならじと、忍びて庵を立ち退き、行方知れずとなりぬ、之れをも親子の間なれば深く歎かれしに、音信不通になりて、己と夫を定めけり、然も此の男山賊をして渡世とす、ある夜風暴く雨降りて、人音稀なる時を見合せ、乙女が案内して、男をつれて我が親の方に立ち入り、夫婦の寝られし上に疊を置き懸け、此の苦惱の内に少しの貯蔵を盗み、岨傳ひに逃げ行きしに、此の大悪いづれか免るべき、踏み馴れし道筋の岩も人影と見え、心遣る瀬なく、知つたる淵に飛び入り、男も女も眼前に恥を露して葛屋の名を下しぬ、

●先斗に置いて来た男

人の心ほど變り易きはなし、静かなる浦に家の風を吹かし、浪の噪がしきも身を修めぬが故と、世間より指さし、れけるは口惜し、殊に泉州の堺は萬づに古風残りて、物事内端に構へ、律義を本として、人皆花車に世智賢く、灸ばしにて目を突く如く、其の忙しき息も鼻もさせぬ所なり、爰に大道筋の南向二十七八間檜木造りの亭格子に、二重坐の挑灯を打ち輝き、奥深に豊かなる住居見るさへ羨まじし、と何を渡世も知れ難し、昔唐へ抛銀して仕合せ次第分限となつて、今此の金銀儲けにくい世の中に仕

舞た屋殿の八五郎と謂はれぬ、されども兩親に不孝と取り沙汰するほどの事悪人なり、不斷の所業、看も目に懸けて直段をしはがり、芋も百を何程と数讀みて買ひ、夢にも十露盤を忘れず、錢溜める分別ばかりして、袋町乳森の遊女を知らず、夷島の常芝居見た事もなくて、世帯持ち固むる釜にもなりぬべき人なり、ある時小家に集り歌留多の勝負を始めける、斯様の人の小判を、二十兩宛半斗にはられしを見て、近所の人これを驚き、こなたには氣が狂ふてや、斯る博奕業を遊ばしける事思ひもよらずといへば、彼の挾氣人打ち笑ひ、其方の不思議最もなり、今時何商をしても、一倍になる事はれより外にあり、長崎へ銀を下すは長々の配慮なり、これは一思ひの早業、千兩が忽ち二千兩になるものを、此の年まで知らぬことの遺憾多し、舟荷を積み住吉大明神に祈誓を懸けんより、金銀置きかけて歌留多大明神を祈るが陰道と、眞實からの顔色、さりとは知れぬものは人ぞかし、是れ皆慾心よりの思ひ立ち止むまじきと推量しける、案の如く親に疎まれ、此の事意見を聞かず、是れに身を染め自然人品も賤しくなりて、世上の附合を欲き、妻子を見捨て、人の物をたゞ取る事面白く、此の道のすつばのかはに出合ひ徐々取り上げられ、いつとなく内蔵空大名と言ひ立てられ、互に貸借もならず、久しき家に傳はりし諸道具を、夜市に出だすは惜しき事ではないか、と賣り立てられ、銀目になるほどのものは年々茶の湯振舞に出で、親代に人も見識りて眼前恥を晒しぬ、後には一門も見限り合力をせず、縁者に憎まれ、女房を取り返され、下々も暇貰ひ捨て、季時を待たず出で、行けば、伽藍の

如くなる家居に、燈一つたて正月に飾を搦かず、盆に鯖食はず、親子三人暮し兼ね屋敷を賣りて、又其の銀を其の日より打ち出し、十日も経たぬに負けて、其の後は安立町の中程に借家住居、昔の名残紫縮緬を着ながら、母親の手馴れぬに朝夕の飯を炊かせ、父親に水仙の早咲を造らせ、又は山刀豆胡瓜の種賣らせ、已は勝間邊の海道端に出で、溢紙を敷きて、曲物に一から十五までの木札を入れ、右の手に錐を持ちて、天狗頼母子と名付け、道行く人を詐し、馬士古着買味喰渡賣を招き、是れも博奕業にて相取を拵へ、愚かなる人の錢を取りて、仕合せなれば直に出茶屋の女に戯れ、酒に其の日を暮し宿には歸らず、年寄られし親には濱近き鹽さへ與へず、折節の寒天敷、松原の荒神の前も淋しく、割木の絶えて、悲しきこと思ひ詰めてや、夫婦同じ枕に心元を突き刺し、遠里小野の霜とは消ぬぬ、隣に近き、櫛屋針屋筆屋の驅け付け見しに、早締切れて是非もなく、各不便に思ひぬ、斯る時一子の八五郎歸り、此の分野を見ても更に歎かず、人々是れを憎み、取置にも構はず、野邊に送る人もなし、八五郎一人して空葛籠二つに二人死骸を入れて、一荷に擔ぎ、齋田の墓に急ぎしに岸の姫松の邊にて夜も拂曉なるに、此の所放塚組後より八五郎を斬りて、葛籠を手毎に持ちて、阿部野に隠れぬ、此の盗人の仕合せ、あけて悔しかるべし。

●心を吞まるゝ蛇の形

極月十三日の明け方より曇を叩き立て、春待つ宿の煤拂、小笹の當座箒も塵に埋もれ、人はなほ埃を被ぎぬれば、水風呂を炊いて入り加減よしといふ、女のいへば男聞きて、新湯は人の身に毒なり、先づ隠居の親仁を入れよと、心にある事を口に、出次第に謂ひける、不孝は是れにて萬づを知れたる人、陸奥宇都宮といふ所に、漆屋武太夫といふ商人なるが、始めは纒に硫黄灯心を肩に置きて、山家に通ひて世を渡りけるが、未だ四五年に出来分限人も不思議立てける、されども此の男常々仔細なきものなれば、さのみ人も疑はず、大黒殿の袋を拾ふか、狐福ならむと沙汰し侍る、人の仕合せは知れぬものぞかし、然れども分限に品々あり、世間に變らず、其の身相應の衣類を着て、朝夕も折節の魚鳥を味ひ、貧なる親類を取り立て、下々を憐み、神を祭り、佛の道を願ひ、親に娛樂を與へ、他人の義理を欠かず、萬事素直にして高貴なるは、天の惠深く、人の本意なり、世のありさまを觀るに、誠ありて世上に住む人稀なり、それは當分家榮えて滅亡するに程なし、唯正直にして、生業に一生を送らむは、心の取置一つなり、此の武太夫俄に樂しければ昔を忘れ、時得て我儘を振舞へば、所に憎み立てられ、人の付合絶えて、我が内の窺將軍寒いも暑いも知らず暮しぬ、抑有徳となりけるは山里に通ふ時、大隈川の水上に細く枝河の續き、其の流の源は谷深く、岩組銳にして、落ち懸る瀧の音に耳を轟かしぬ、樹立茂みて、蔭闇く、葉末に白玉碎き、不斷時雨の如し、水底夏さへ氷を破りぬ、此の川に江鮭つ魚棲みけるに、武太夫水練を得て、是れに入り、手捕へにし毎々人を獲しける、ある時淵と思ふ所を

捜しけるに、黒きもの山の如く、見えけるを、一掴取りてあがれば、峯より年々流れ込みて固まりし漆なれば、忍びて器を拵へ、我が寶にして取りて歸り、是れを商賣するにぞ、たゞ取る金銀後には置き所もなかりし、人皆氣を着ければ、猶慾心深き企して細工の上手に龍を作らせ、水中に沈め置きしに宛然活きて動く如く、日數経りて是れを見るに、口を動かし尾を縮め、それとは知りながら恐ろし、此の事宿に歸り親に語れば、されば人間は慾に限りなし此の上の願何かあるべし、平に止めよと様々意見せしに、却つて親に仇をなし、己が一子に武助といひし十四になるを引き連れて、彼の淵に行きて次第を語り聞かせ、我が如く取り習へど親子ともに入りしに、最前の龍に精ありて、武助を啣へて振ると見えしを悲しく、藻屑の下に身を沈め、二人ともに息絶えて、二十四時を過ぎて體のあがりけるにぞ、見る人親の恥なりと憎み、哀れといふものなし、此の事露はれ數年斯様の事を横領せし科とて、此の家欠所せられて、親は所を立ち退き、やう／＼命を助かり、悲しき浮世に住みぬ、女は親類とてもなきものなれば、其の儘の乞食となりて、耻を顧みず人の門に立ちぬれども、姑につらく當りしものとて、すたり行く水をもやらず、ほごなく餓死にあひぬ、

●當社の案内申すほごをかじ

縁付にあらためて同一宗門を願ふこそ道理なれ、淨土は二十八日を祝ふに、門徒は精進日といへり、

今の世は後生の晝にさがり、西は極樂有難し、相州鎌倉山雪の下といふ所に、藤澤屋の木工右衛門旅人の泊宿をして世を渡りしが、娘一人ありて後、木工衛門夫婦世を早うなりぬ、此の娘二十六まで縁遠きと貌おもはしからぬ故なり、いつとなく軒荒れて、影洩る星月夜も獨り寂しく、浮世も協はぬから捨て心になつて、朝夕親の香花を取りて涙に暮しぬ、人皆不便を懸け、似合の事もがなご思ふに幸なくて年経るうちに今日を送り兼ねし其の頃、若宮八幡の前に才覚らしき男、鬘付あごあがりにして、上髭仔細らしく置きて、木綿縞の袴に馬乗あけし長羽織に、割鞘の大脇指さして、神主にもあらず、地下人とも見えす、海のものごも山家のものごも知れぬ男、金太夫と名を付き、此の所初めて参詣の人に先立ち、當社へ案内申しますと、早口に腰を屈め、是れなる銀杏の木の葉は頼朝の御内儀の、丸鏡の下へ入れられし残りじやと申し傳へました、あれなる切石が梶原様の碓部屋の跡、鶴ヶ岡と申しまするは、昔時佛の蠟燭立を爰で鑄ました所と申す、是れが静御前の綿帽子掛の松、小袋坂と申すは大黒殿の墓所なり、切通と申しますは、土佐坊が讀歌留多を賣つた所、扇ヶ谷といふは、淺利の與市が出店、此の岩に疵のござるは朝比奈が下駄の痕、それに杉の大木の見えますが、和田の酒屋の跡と、酔うた顔色して偽八百、錢を取らぬといふ事なし、此の者の生國は丹波の笹山の町人なりしが、親の心を大きに背き、久離を切られて徜徉ひ、爰に來りて口賢く知己を求め幽かなる片廂を借りて一日暮しも氣散じなる世なり、此の男小判を溜めて人のおもはくの外なる内證なれば木工衛門が入聲取

り持ち首尾残る所なし、枕を並べ親しくなりて後、此の娘毎日持佛堂を開けて御明をあぐるを見て彼の男是れは何の爲めぞ、散々佛前をあらしぬ、女心に悲しく、いかに宗旨違へばとて後世に隔のあるべきや、自分に添ひ給へば、我が親もそなたは親同前其の位牌を打ち碎き給ふはつらし、子のないなかならば身を投げ果つべきものを、随意ならぬ浮世と、日敷經りて、此の子三才になりぬ、一夜の寢覺に、枕許近き灯の油土器を引き傾け、酒の如く一滴も残さず飲みける、其の後檢しけるに毎夜飲まざる事なし、是れ隠なく彼方此方にて飲ませ、前代珍らしき事ぞと沙汰せざる所なし、人猶不思議に思ひ、泣く時油といへば、其の儘に機嫌を直しける、幾なく五歳になりて常の人に勝れて賢し、殊更物言ふと大人の如し、夫婦悦び花の春を時得て袴の着初させて、近所ひけらかしけるに、此の子大勢の中にかしこまり、申し出すこそ恐ろしけれ、私の親は灯油賣が膚に金子八十兩着けしを、此の五年あとに斬つて、それより手前よくなられ、然も其の夕暮は雨風にして、二月九日虫出し神鳴響き渡りしと、まざくと語れば、各々つととして、此の悴が顔を眺めしに、いかにもく其の頃龜が井の谷にて油賣を暗撃、色々御穿鑿、今に知れずとありて、過ぎたる事を思ひ合せて驚きける、物に因果あり、其の中に其の油賣が従弟ありて此の事を聞き咎め、此の儘は措かじと俄に親類を集め、内談するを聞きて金太夫堪り兼ね、科もなき女を刺し殺し、已も同じ枕の見苦しく最後を取り亂しぬ、其の分に濟みて、悴子はたゝすむ方もなく、其の日は我家にありしが、暮天に行方見えすなりにき、今

に不思議の晴れざる事、

本朝二十不孝卷之三終

本朝二十不孝

卷之四

善惡の二つ車

廣島に色狂の棒組屋

枕に残す筆の先

土佐に身を削る鯉屋

木蔭の袖口

越前に散々の糠屋

眞に其人の面影

松前に鳴かす虫薬屋

本朝二十不孝 卷之四

本朝二十不孝

●善悪の二つ車

良き友は少く、悪き連はあるものぞかし、同一心の海深く、安藝國の宮島に通ひ、遊女仕に身を焦し切火繩一寸のうち、五里の所を早船にて、毎夜のさはぎ夥間二人、心から妻からこれほど似たる人世間廣島にも又あるまじ、一人は備中屋の甚七、一人は金田屋の源七といへり、此の二人親に寄食なれば、浮世の持ぎを知らず、數年貯へ置かれし金銀我が物と盗み遣ひ、所の長者といはれしも家次第に寂びて、十年餘りに淺ましくなりぬ、親仁若盛りにいろうくの艱難を碌き、今老いの入前斯る身なし、朝夕も烟絶えぬになりぬ、縁附頭の妹ありて、母親自然拵の衣類手道具まで盗み出して賣り拂ひ其の銀も揚屋のものとなりぬ、姪も裸ではよぶ人なく、哀れや腰元つかひの奉公に出だされ、世上の親の優しきを見て一入恨みぬ、尙ほ日向に氷の如く、水ばかり残りて後は火吹く力もなく、其の年の浪胸にさはがしく、節分の暗さを關はず、其七源七紙子頭巾を被り袴組の口を揃へ御厄拂に出でける、誠に乞食にしたらひなく、死なれぬ命の恥長く、東方朔が九千歳と聲可笑しげに喚げども、是れさへ仕合せなく、夜明方まで驅け廻りて、漸々二人の中に錢十八文煎豆二百粒ばかり、是れでは婿もあか

ぬ世やと、親達をさらりと西の國に捨て置き、源七甚七故郷を去つて、備前岡山より路錢なくて、此の所に足を踏み止め袖乞するに、未だ昔の名残額に見え、色白にして鬢附の奇麗なれば、門立も不思議がりて、通れ／＼の言葉あらく、身の置き所もなく、過ぎにし奢のことも思ひ出でし男泣の涙、豊島筵を漏りて餘所の見る目も恥かし、其の頃備前は心學盛んにして、人の心も率直になり、主人に忠ある人、親に孝あるものは御惠深く、自然其の道に入りて、國の治まる此の時なれば、二人の才覺出して足腰の立たざる野臥の非人を語らひ、甚七は片輪車を作りて、七十に餘る老人を乗せて、町筋に出づるより涙ぐみ、國を申せば安藝國、年を申せば二十三、いかなる因果の報にや、一人の親を養ひ兼ね、面を晒し勸進す、何も御慈悲はござらぬかと、聲悲しく誠がましく歎きしに、人施して錢米少時の内に山なして、後は車に積み剩りぬ、源七も年老いたる者を負ひて、其の如く歩きしに、人皆志を感じて情を懸けられければ、野末に篠竹を圍ひ、朽木のあるに任せて拾ひ集め、棟を並べて庵の形を作り、雨露我が家にて凌ぎ、昨日までは雲を見て臥したるを憶へば、今宵の娛樂此の上何かあるべしと、土釜に野澤の水を汲み込み、貰ひしものをひこつに炊けば、搗かぬ米あり、新米あり、赤米、真搗、小豆に限らず、様々の色なして、天目に竹窓、生あれば食ありと腹ふくるゝに外の願もなし、甚七老人に按摩をせさせ、終夜蚊を拂はせ、年寄の草臥を容さず睡れば胴骨を踏み叩き、とても腰抜役の汝めとつらく當るを、源七は格別にいたはりて、さりとて左様にすべき事にあらず、先づは親と

なづけ、然も其の庇にて今日の身の上を助ければ、其の恩は忘れじと懸にあたるを、却つて甚七猜み、それよりは笹戸一重の中を隔て、松火の取り交はしもせざりき、天誠を照し善惡を咎め給ふにや、甚七いつとなく人の慈悲を受け兼ね濁々になりぬ、源七は日に増し心の隨意に勸進ありて、後は雨風の時は出でず、此の老人を實の親の如く孝を盡しぬ、隣なる親仁の是れを見て、世を歎き、甚七を恨み、今日限り舌食ひ切つて果つべしと胸を定めし、此の人抑は賤しからず、越後にて名のある侍、仔細あつて浪人の後身を隠し、今淺ましくなりぬと、昔物語を甚七が留主の折から、源七に聞かせて、是非もなき泪を溢し、我空しくなりて後、何惜からねど、せめて骸を犬狼のせゝり捜さぬやうに、影隠して頼まれけるにぞ、一人哀れ増りて、自然のことありとも其の配慮はし給ひてぞ、我此の所にあるうちは悪しくは取り置き申すまじ、少しも心に懸け給ふなと頼母しくいふにぞ、老人手を台はして拜み、扱も／＼嬉しやと袖に玉を流しぬ、斯る時旅人と見えて馬乗物を釣らせ、用ありげにのみ、此の老人の面影を少時見定め、橋本内匠様かと取り附きぬれば、金彌か親子の縁切れず、是れにて逢ふ事の悦喜限りなし、我こと武州に下りて、隨身身躰を拵げども、ありつき遅く、彼方此方を見合せしに、望み協ひて先知五百石にて東國方へ相濟み、此の度暇申し上げ、御迎に参りしに、五十日の訴訟なるに尋ね兼ねて、日敷重なりしに、今日爰にて逢ひ奉る事、武運の盡きぬ驗と喜びぬ、老人此の程の難儀語り給ふにぞ、涙干す間は無かりし、斯る時甚七歸りて是れを驚きぬ、金彌取つて押

へ、情知らずの汝、是の儘措く者にあらねど、命を行末に自然に思ひ知るべしと、此の庵を崩し昔の野原となし、源七は此の度の志を感じ、我抱へ申すべしと、今一人の乞食も老足なれば、駕籠に乗せ東路に下りぬ、残るものごと、滅形合器具杓子、古筵の朝露夕部に風の身を責め、甚七が悲しむ此の事聞き傳へて、其の後は所を追立てられ、なほ行くさき迫りて、其の年の雪の頃、播磨の書寫寺の麓にて立ち窺みて死にける、

●枕に残す筆の先

都には今四十の外を關はず法跡して、樂隠居をする事専に流行りぬ、頭丸めしとて金さへあれば色里の太夫もそれには構はず自由になる、川原の野郎も猶遊山に變る事なし、世のむづかしきめに逢はぬが此の徳何にかは換ゆべし、されども女心は愚かにして、嫁に家を渡すといつまでも窺みぬ、京も田舎も見るに聞くに其の通りなり、土佐の畑といふ所に鯉屋の助八とて、獵船を仕立て出すものありしに、賢く世を渡る海の上を心に納め、次第に分限になりて助太郎といへる子を持ちける、一人もひとりからと利發にして、親の氣を助け、諸人の讃められもの、親の身にしては一入嬉しかりき、十九の時同じ所の娘を見立て、何に不足なく嫁に娶り、此の上に思ひ殘せし事もなく、母屋の裏に座敷造りて、助八是れに引込み、萬づの鍵を助太郎に渡し、商賣は律義なる手代二人後見させければ、此

の身代鬼に金持たせ、根強い事隠れなし、助太郎夫婦の間の好きことを、ふたりの親限りもなく喜び、此の上に孫の顔を見る事を願ひ、末に振袖の身なれば、下々も我が儘出して、臺所勿々に始末の事も心許なく、母親幾度となく見舞ひて、末々まで氣を着け給へば、あまたの下司ども奉公を大事に影なく働きのれば、萬事體の廻りて、舟問屋の勝手、是れまで持った女房様の御飯貝といへり、朝夕可笑しきとばかり仰せられ、御年は寄られても御志和魂利と、いづれも行末頼母しく、身を任せ、骨を格ます働さける、されども嫁の風習とて、是れほど悪しからぬ、姑を嫉み、春雨の降り續き、物の淋しき曙に、久々の部屋住居、今といふ今氣をこらしぬ、御最愛さ限りなきに思ふなかの別路、浮世とは斯る事ならんと、長枕の端に書き殘し、男の夢に萬一も見られぬうちと、閑纏ばかりの亂れ姿にして、此の宿を忍び出で、身の行末は定めずなりぬ、助太郎目覺めて枕に筆の紀念、是れほど男泣大方ならぬ愁歎、各驚き尋ねけるに、山本近き比丘尼寺に驅け込み、此の身出家の望みはなく、唯世を捨つるといふにぞ、仔細あるべしと様々詮議の折節、皆々爰に尋ねあひ、庵の主によく、此の人を預け置き、宿に歸りて此の事を申すに、兩の親達安堵して、其の後迎を遣はしけるに、更に歸る氣色なし、助太郎此の女を戀ひ焦れ、親のことは外になして彼の寺に行きて、夫婦は二世と戯れ日敷を重ね宿に戻らず、科なき母親邪見の名を立てける、それにも構はず一人の子なれば、不便とばかり思ひ込み、兎角は姪我をうるさく思ふゆるぞと、終夜物案じて我さへ身を捨てければ、子の命の代りと思ひ

詰めて、觀念し、心地悪しきと言ひ出だし、其の日より湯水を飲まず、十九日めに果敢なく世の夢となり給ふ、助太郎は時節の死去と歎かず、女房は喜び、それより宿に歸り、昔の如く世間を勤め、一人の親仁をも耳の遠きを幸に、あるに効なく押し込めて、顔見る事もなかりき、一歳ばかりほど過ぎて、書置せし枕取り出し見れば、母親の筆にして書き付け置かれし、世を見るに煙年寄りて姑となる、人の心の恐ろしきに、やさしき狼を恐れる子の可愛さ餘りて、惜しからぬ身なれば、千歳も散らぬ花嫁子命を呈らす、と書き残されし、是れを聞き傳へ、人の附合欠けて、自然取り籠りてありしが、夫婦刺し違へて果ける。

●木蔭の袖口

曇りなき身を疑はるほど世に迷惑なる事はなし、天誠を照し給へども、其の時節を待たず、身を失ふこと悲しや、心の浪風立つも、人の云ならしにして是非なき事あり、越前國敦賀大湊に榎本萬左衛門とて、百姓ながら商人半分の者あり、随分賢く立ち廻り、此の所の市に出店、都の春の花を爰の秋に咲かせ、馬引野人を招き、活牛の目を抜き、龜井算などは、中括に巾着の口を締め、世間の人を腰に提げるほどなれども、仕合せは思ふまゝにならず、するほどの事左前になりて、資本を耗らし裸になりぬ、必ず悪事は續き田島もとりめなく、四五年の荒野となりて、皆御年貢に賣り取り、悲しき中にも

無用の智慧あり顔を、日頃出だし置き、わりなく頼まれ、人の公事沙汰に懸りがましきものとて、後には親類さへ音信不通になりぬ、猶又連れ添ふ女房にも思を寄せ、氣を惱ませて月日を過ぎし、次第弱りになりて、二十六の五月の末に浮世を闊となりぬ、二人の中に万之助とて、未だ乳房を忘れぬ一子ありて、歎も一入止む事なく、それより四十九日までは、香花を取りて万之助が枕蚊帳に寄り添ひ、少時も夢は結ばず、呱き出す時殊更に悲しく、摺粉地黄煎を與へ、膝の上に抱き上げ鶏々ゆれども呱き止まず、夜は明けず、今の刹なさ、子といふものなくてあらなむと、口鼻が事を憶ひ出して面影に立つ、男ばかりにして住み憂き事を思ひ當りて歎き、身の苦しき時子を捨つる藪垣を忍び出で、半町ばかり、野末なる念佛寺の門前に行きて、辻堂のうちに万之助を捨て置き立ち歸れば、人の身を離れて、板敷の冷ゆるを覺えて聲を上げれば、魂も飛び出で、又懐に入れて、捨てねばならぬぞといふ時、夜も明け方になりて、軒端なる雀の啼りて、己が子をさまゝに育むを見て、たまゝ此の身を受けて、此の志口惜しきと、又宿に歸り、五十日の吊、精進をもあげて其の日より里々へ通ひ、商の糟買を身過ぎの種として、かたゝの籬に萬太郎を入れて行く道すがら、子を片荷に漸々一村に入りぬ、此里やさしくこれをいたはり、色々此の子の人なる事を申しぬ、折節庄屋の廣庭に女ばかり茶事して集りしが、此の中に似合はしき後家ありて、いづれも取り持ち、軽々しく縁組を急ぎぬ、此の女房見苦しからず、然もしほらしき心底、夫婦の取組喜ぶにあらず、近き頃に子を失ひ、其の乳のあが

りもやらすあるなれば、人間一人助くる思をなして、我が子かはらす萬太郎を育て、世の持を大事に夕に織りて朝に賣り、木綿して三人ともに飢えず、寒からず、幾なく家富みて、其の後は下々もあまた役ひ万太郎も、十六になりて、角前髪の采躰も是れを羨みぬ、されども貌に心は違ひ、不孝第一の悪人、年中親の氣を背きしを、繼母よろしくとりなし、潜に意見する中にも人の嫁なごたよるを頼に申せば、却つて悪心を起し、日頃の恩を忘れ、繼母の難をたくみ、追ひ出すべしと思ひて、父に申せしは、迷惑ながら、いはねば天命を背くなり、母人我への調戲、さりとは面目なく、随分堪忍して今までは包みし、自然傍から見し人あらば、罪なくて指さ、れんも無念と、まんざら無い事に涙溢しぬ、父親驚きながら、よもや左様の事あるまじきといへば、御疑道理なり、其の證據を御目に懸け候べし、宿を出で給ふ躰にて物蔭より見給へど、親仁を外へ出し置き、庭前の柿の盛りなれば、稍色づくを取るべしといひけるにぞ、母も立ち出で眺められしに、萬太郎好き首尾を見合せ木蔭に入りて、頸筋背中にいかなる虫か入りて身を疼めける、疾くとつて給はれといへば、母親何心もなく、左の袖口より手を挿し入れ、少時探して、何も手に中らず、されども心許なし、着物脱いで内を檢めよといはれし、父親遙なる生垣より是れを見て、扱はそれよと一筋に思ひ定め、年月の恩愛一度に忘れ、子細はいはで暇の状出され、俄に飽かせ給ふはいかに、悪しき事あらば日頃の好誼に、一通り仰せられての上は恨みもなきと、歎くに万左衛門肯入れねば、是非にかなはぬ身とて墨髮切つて家を出で、殊勝なる法師

となりぬ、實に悪事千里、萬太郎が所業、誰いふともなく所に沙汰して、諸人憎みたて、身の置き所もなく、坂地へ立ち退きしに、七里半の道中にて時ならぬ大雷神、鳴り落ちたるとも覺えず、行くうちに万太郎を乗せたる馬ばかり残りて、口曳男立ち歸り、此の不思議を語りける、

●ほんに其の人の面影

無佛世界なる國里和朝末々まで今はなかりき、殊更世の掬も静かなる松前の城下に、久しき浪人岩越數馬といひしが、近年孔子頭に變へて、名も夢遊と改めける世に、住めば夢にも遊ぶ暇なく、虫藥を合はせて今日を暮しぬ、寄る年の口惜しく、奉公の望も絶えて、七十歳にて入道し、其の後は丸腰になつて、武士の顔色もせず、木綿着物の上に縮緬の單羽織を懸け、三十年になる編笠、折目を裏より紙子にてつゞくり被れば、日影者といはれて、腫物切疵の膏藥賣りて、姿も心も町人になりぬ、内儀も歴々の息女なりしが、昔を捨て、朝夕の米を炊ぎ、手足も自から荒れたる宿に、是非もなき年月を送るうちに、男子二人作彌八彌とて悲しき中にやう／＼と育て、十七十五になりぬ、さすが天成美はしく若衆盛りにして、執心の人絶なく門に市をなしぬ、後は命を懸けて作彌を忍ぶ人あり、八彌を慕ふものあり、此の美少氣のとほりたる事、衆道の正中、情を本として其の道理の辨別深く、惱める人に心移せど、親の夢遊油断なく護りて、氣の毒なる戀の關、隨意ならぬ身を恨みぬ、夢遊はごなく

名の夢になり給ひ、作彌八彌が悲み殊更母人歎きの止む事なく、世間も恥ぢず、かなはぬ人を世にあ
るやうに、餘り氣疎かりき、此の貌二人の若衆とは格別違ひ、背高く瘦せ枯れて、色蒼穢めて顔長く
常さへ醜かりしに、此の度愁に沈み、髪頭を其のまゝに身を捨てければ、凄じげになりて他人は見る
さへ嫌ひぬ、是れも其のほどなく夫の事をいひ死に、哀れや無常野に送り煙とはなしぬ、其の夜は雨
降りて物寂しく、近所に人の歎きを聞はず、月待して音曲の數々過ぎて歸るに、憶病者ども何が目に
見えける、作彌八彌が母人の幽霊來ると假初に言ひ出し、其の後は我も見し、人も逢ひつると、由な
き取沙汰をして、夜に入れば往來とまりて、所の騒動となれば、作彌八彌が身にしては、世の外聞口
惜しく、兄弟寐覺にも是れを忘れず、其の折から窓の開音歴々と母親の面影庭に認め、親子のなかな
がら恐ろしく、兄の作彌は手を合せ、なご成佛はし給はぬ、さりとは淺ましき御事やと、涙を袖に浸
しける、弟の八彌甲斐々々しく、枕にありし牛弓番ひ放ちければ、形は消えて涙と光あり、立ち寄り
て見るに年經りし狸の鼻筋より射通し、未だ息の荒きを止刺して、騒ぐ氣色もなく取り置きける、是
れは此の所より東の宮山に住みて、今までいかほどか人を惱ましけるに、此の後野道の仔細あらじ、
此の度の功八彌なり、と古の頼政秀郷にも劣らじと是れを讃めざる人はなし、此の事國主の沙汰に及
び、文武の達者立ち會ひ、詮議のありしは下々に思ふとは格別なり、兄の作彌再び見えし母を悲むの
所、是れ武士の實ある心底を感じ入れられ、當分二十人扶持下し置かれ、末々御取立あるべきとの仰せ

渡されたり、弟八彌と變化にもせよ、親の形と見て、是れに手づから弓矢の敵對、不孝の志深しと、
御取り上げもなく、此の國を立ち退きける、

本朝二十不孝卷之四終

本朝二十不孝

卷之五

胸こそ踊れ此盆前このはんまへ

筑前に浮世に迷ふ六道の辻屋うきよにまよふむだうのつじや

八人の猩々講やっぺんのかげがら

長崎に身を汚す墨屋ながさきにみよをよごすすみや

無用の力自慢

讃岐に常の身持ならば長生の丸龜屋さぬきにつねのみまもりならばながいきのまるかめや

故き都を立ち出で、雨

奈良に金作の刀屋ならにかねづくりのやいばや

本朝二十不孝 卷之五

本朝二十不孝

胸こそ踊れ此の盆前

桃や櫻や梨の子是れぞ蓮の葉商賣、七月十三日の曙夕暮は、麻柯の焼火して、世に亡き魂を祭る業の哀れは秋なり、露に涙に兩袖の凄、筑前國福岡の町はづれに、辻屋長九郎といふ船乗ありしが、ながなが筋骨を痛ませ、次第に老の浪立ち弱りて、彼岸に眠る如く盡きぬ、其の跡を後家楯を取つて、世帯を能く持ち固めける、子二人ありしが、惣領は長八郎次は娘にて小さんと名付けし、是れには入習を取りけるに、長八と心を合せて、親の時に違はず、大廻の渡海を乗りて一人の母親を二人してはぐくみける、思へば波の上の仕合せ定め難く、内證の悪しきは阿波の鳴戸より渡り兼ね、盆も正月も宿にて年を取る事なし、此の節季も留主ながら、借銭の淵は許さず、賣り懸けしたる人々庭に立ち併び節供前とは格別否でも應でも、百貫に塗笠一蓋、母親せがむにぞ、身を置き所なく悲しく、戻らぬ聲子を怨み、せめて斷り文なりとも下しぬれば、各様の御腹の立たぬ事ず、手を合はし詫言、さてもさても利なく、錢が一文ござらぬと入物あけて、箱崎の明神を誓文に入れて、二人の者の歸るまでの斷り、やうく肯分け、四十五六人の懸乞とても濟まぬ事に、挑燈蠟燭の費算用して立ち歸りぬ、其の中に博多より通商人味噌酒の賣懸、取らでは歸らじと一人後に残り、角なき鬼の顔色し婿があ

かぬと鍋釜抜くこ、廣敷に坐を組み、何時となく眠りの出で、人のものいふも現に聞ぬ、母親他人のあるとも知らず、我ほご淺ましきもの又あるべきか、連合の佛棚も飾らず、蓮の飯を祝ふべき始末もなく、東木も絶えて今朝よりは雨戸を毀して焼くなど、煎じ茶きれて、煙草なく燈火の油も事欠き、嫁が轆轤引より竿を漉みしが、今の間の光にて頼みなし、是れより先に命消えたしと、母の歎を構はず娘は庭に下りて、身振に色科やりて、明日の晩よりの踊のならし、いかに若きとてさりては心なく、世のおもはく身のほごも恥ぢぬべし、汝が年は十八嫁十六なれど、世間の思ひ遣りありて、彼の如く身を捨て、内證を秘し、親里へも是れを知らせず、斯る前後を凌がるは、女の鑑にも末々まで知らすべき最愛き人なり、未だ此の春縁組して半年も経つや經たぬに衣類敷銀手道具までを無くして、嫁なればとて面目なし、汝彼の人がやうに志も變るものかと言ひも果てぬに、娘は穿きたる雪踏を親に投げ付け、不斷の寢間に行くを、母も今は堪忍ならず、手許にありし爪切持つて起たれしを、嫁抱き止めて漸々に是れを詫び濟まし、片蔭に立ち忍び、美しき髪壓の押櫛并を抜き出だし、玉子色の帯を細き組帯に仕替へて、此の三色持ちて出でしが、少時ありて歸り、右の袂より錢百四五十取り出し、左の手に鹽饅五つ素麵二把、懷より白き餅を出だし、姑に與へければ、四五度も戴き、涙を流し、此の思ひいつ報すべき、嬉しや其方の御志と丸團扇にて嫁を煽ぎ立て、喜ばれし、懸乞宵よりの事ごもを段々見て袖を浸し斯るやさしき女のあるべきか、扱もくご感じ、聞より出で

ければ、各是れを忘れて驚き、夜の明るるまでまし／＼てから、唯今才覺もならずと又斷りを申す時、懸乞涙にくれて不孝なる娘もあるに、此の嫁子の心入れ、さりては肝に銘じて、何と讀むべき言葉もなし、この上ながら懸にし給へと、財布の口を開けて錢二貫三百、細金五十目ばかりあるにまかせ、此の嫁に進ずると言ひ棄て、歸りぬ、孝あるゆゑに大の興へ、憂き所を凌ぎしうちに、長八も聲と同一に、思ふまゝなる仕合せにて再び國元に歸りて家榮えし、娘と嫁の善惡を語れば、長八胸にすへ兼ね、此れを追ひ出し、聲には他より宜しき人の娘を子に貰ひて、始めの如く夫婦となし、猶變らずして生の松、千代とも契を籠めける

● 八人の猩々講

浪の鼓の色もよく、長崎の湊にして猩々講を結び、樞村のうちに松の尾大明神を勧請申し、甘口辛口二つの壺を併べ、名のある八人の大上戸爰に集る、大蛇の甚三郎、酒吞童子の勘内、和東坡の藤助、常夢の森右衛門、三入機嫌の四平、釣掛升の六之進、早意の久左衛門、九日の菊兵衛、此の者ごもの參會、元日より大年まで酔ひの醒めたる時もなく、いつとて千秋樂は、酒飯み懸る時唄うてしまひ、兎角正氣のあるうちは、身を酒瓶の底に沈め、萬世の娛樂是れに極めける、外より羨ましく隨分の遊戯好一盃なる口の男、此の夥間に今まで幾人か交りて身を崩し、今も酒に飲まれしもの其の數を知ら

ず、折ふし豊前の小倉より此の所に宿を引ききて、鳥繪を書きて世を渡る墨屋團兵衛といふもの、先祖より酒の家に生れ、あから飯めといはれて以來、終に上戸に出撞はず、十九歳にて都に上り、三十三間の矢數酒咽を通る、勢、星野勘左衛門、和佐大八が弓勢にも、其の道々にて劣らじ、天下上戸と名も橋といふ酒屋より、金箔置きの鬘斗着是れを出しけるに、金の範こゝちしてそれより飲自慢して、長崎の酒所を望みて盃店を出しける、此の所の下戸普通といふが、他の國の飲大將にも負くる事にあらず、團兵衛狸々中へ亂れ入りて、夜日十三日の續け飯み、兵の交り、弱い所露はれ、すこし草臥れつきて無理に我を立つる時、母親異見せられしはさりとては、大酒をやめよ、其方が父親團右衛門も不斷好まれ、碁會の座敷にて宵より拂曉までの酒宴、内島休トといへる鍼立と、當座の口論、さのみいふほどの事にもあらぬを、互に酔ひの紛れに次第に言葉荒く、刺し違へて可惜浮世を果てられしを、兩方ともに世上の胡慮、草葉の蔭まで宜しからぬ名のみ残り、女の身にさへ口惜しく、孫子に傳へて酒といふもの一滴も飲ませまじと思ひしに、親ながら隨ならず、汝幾度か人のいふ事を肯かず、他に勝れての酒興、命のほども雲落、向後留りて母が心を休めよ、然れども俄にやむ事もなるまじ、此の一度を断りて日に三度夜に三度の限りを定め、一度に五合宛一日一夜までは敷すとあれば、團兵衛親を睨みつけ、其方の煎じ茶を飲み止る事はなるべきや、世の娛樂、是れより外はなし、酒に捨つる命、何惜しからぬ、今にも我往生せば、沐浴も諸白を浴せ、棺桶も伊丹の四斗樽に入れ、花山か紅葉の洞

に埋まれたし、春秋の遊山人の吸筒の滴り懸れる願もあり、後世さへ斯く想へば、況して現世に此の娛樂を止めまじきと、なきく飲み明かし、酔ひ暮れて五日七日も續けさまに寝て、世の事を外になしぬ、是れを思となりて母果てらるゝにも、枕を上げず、此の死目にあはず、適の後に夢醒めて、歎くに効ぞなかりき、

●無用の力自慢

行司唐團を翳して四本柱の中に立てば、観進元の大關は丸山仁太夫、續きて和歌之助、馬之助、寄關には扉閉右衛門、關脇には撫釜白藤、左右に立ち別れ、前相撲始まりて、次第に形の山高く、金比羅の祭にあまたの見物、讃岐圓座の所狭なく、上方の手取在郷の力業見て面白さはれぞかし、其の後は相撲流り出で、里の牛飼、山家の柴男までも、緞子の二重廻を掻きて四十八手に骨を碎き、片輪になることも厭はず、無用の達者を好みぬ、爰に高松の荒磯と名果りて、力ばかりを自慢して昨今取手の男、丸龜屋の才兵衛とて歴々の町人、兩替店出し世間に知れたる者には慰みながら是れは似合はざりき、それ人の玩弄には琴碁書畫の外に、茶の湯鞠楊弓謠など聞き良し、何ぞや裸身となりて五躰危き勝負、さりとて宜しからず、自今之れを止めて良き友に交り、四書の素讀習へと、親仁分別らしき意見、こんな事が耳に入れば一兩年もあとに家譲り、萬づに關はぬものをも母親は男勝りの智恵を出して、才

兵衛を潜に招き、またも其方も十九の春なれば、花見がてらの都に上り、金銀溜めしはこんな爲めなれば、島原に行きて太夫を残らす見盡し、大坂の芝居子に出合ひ、其の若衆氣に入らば、直に身請して三津寺新屋敷とやらに家でも買ふて取らせ、心安立寄所にせられよ、這度千兩二千兩遣へばとて、跡の減る内蔵でもなし、首尾は母に任せよと旨い事いふて聞かしても、才兵衛一圓合點せず、只世の中に相撲取るより外に、何が遊興なしと中々止むる事にあらず、一人も一人から悲しく、今は教訓の言葉も盡きける、あまたの手代不審耳を立て、斯る親達を持ちて心の隨なる色遊をせば、浮世に思ひ残すことあるまじ、扱も若旦那の悪物好と深く悔みぬ、其の後は力業の意見いふ事ならずして、彌増しに肉食を好み、筋骨逞しくなりて、十九の時三十ばかりに見えて、前の形は變り、格別になり給ひぬ、一門中内談して、とかくは縁組を取り急ぎ、宜しき妻あらば自然志も直るべしと、相應の人の息女貰ひ、祝言事濟みて後、一度も部屋に入る事なく、首尾の悪きを歎き、乳參らせて育て上たる姥に、此の事はせければ、男盛りに力落しては口惜し、弓矢八幡摩利支天南無不動明王身が燃えて女は嫌と言ひ切つて、可惜花嫁をたて物にして淋しがらせ、我獨り寝間の戸の明暮、相撲より外に娯樂なしと、毎日修行募りて後は、力あり、術あり、荒磯と名乗れば、尻に帆懸けて逃げ、相手もなく四國一兩の取手になりぬ、今は恐らく我に立ち並び、手合せする人もやと廣言皆々憎みし折ふし、山里に夜宮相撲ありて、才兵衛罷り出でしに、在所より強力進み出で、才兵衛と引組んで、何の手もなく

宙にさし上げ落しけるほどに、捨舟の荒磯に埋もれし如く、大方は眞砂に熱え込み、胴骨砕けてやうく乗物に掻き入れられ、憂き事に逢ひて宿に歸り、様々養生するほどに果敢とらずして我と心腹立て、些少の事に人をあやしめければ、下々恐れて後は病家に行く人なく、勿躰なくも親達に足を撫らせ、大小便とられ、冥加に盡きし身の果、親の罰當りと名乗りける、

●故き都を立ち出で、雨

奈良坂や時雨に菅笠もなく、手具といふ町より夜を籠めての旅出立、鶏も我と鳴き駭べして行くは誰が子ぞ、刀屋徳内といふ者の袴、諸藝に器用なりしが、銅鐵反へまはりぬけ、鞘持つての喧嘩好、親に幾度か袴を着せ、常にも不孝なれば、目狭き所より言ひ立て、久離切らせて其の里を追ひ出しの鐘の鳴る時、春日野を後に何時か仕合せ良く歸り、三笠山も今が見納となりなん事もと、何とやら悲しく大明神を恨み、氏子は千金にも代へ給はぬとの御事、金子一步もなくて遙々の東路に下るを、哀れと訪ふ人もなしと、獨言の浪に聲ありて、佐保の川を打ち渡りてと謠を門々にて謠ひ、勸進して漸々四十七日めに御江戸に着きて、麴町六丁目に請人宿の丸助といふ方へ、朋達状をつけしを頼みに尋ねけるに、細かに様子も聞かず、こゝもと持の爲めとや、其の若盛りにて何を致されても、口過ぎほどの事は氣遣ひなし、扱先づ何を望みたまふぞ、些の資本あるかと尋ねしに、貫鬚髮撫で附けし風情も

なく、此の寒空に切々の絹袷ひとつになり、細繩の帯して雪踏草履片足々穿きて立ち出で、我呼ばるゝほごに立ち飯れば、もの言はぬ前に涙を溢し、懐より汗手拭の半ば穢れたるを取り出し、是れに其の大根すこし容易て欲しきとの願聞くより、物哀れにて交ゆるまでもなし、易き御事と一把提げて内に入れば、此の子の二親と見せしが、過ぎにし夏の紙帳を身に纏ひ、小升横櫓を枕として目ばかりうごつき、嬉しやそれを食ふて今日の命をと洗ふ間を待ち兼ね、夫婦手に觸れて、親仁はやう／＼一口かぶりて跡は棄てられし、母は思ひながら咽を通らぬと、手に持ちながら涙に沈まれし、徳三郎是れを見て、扱も淺ましき有様と思はざる袖を絞り、いかなる故に斯る憂き事にあはせたまふと尋ねしに、此の若衆間はれて猶悲しく、我々は仔細ありて長々浪人、斯くも武運の盡きぬるものか、此の七日八日は二人の親達に、湯を呈らすべき薪も絶えて、堅固なる天成そのまゝに見殺すとの口惜しきと語れば、親仁に十八文残るものとて米八合、徳三郎も返事爲兼ねて赤面し、迷惑さうなる様子を見て亭主も通者、金銀あれば爰へは下られぬ筈なり、それを儲にこそと合點して情を懸けぬ、先づ此の家吉凶と想はれよ、今まで何程といふ限りもなく、諸國の久離被切を受け込み、首尾良く飯宅せぬもなし、其方も追附幸あるべし、其の内は我等を親と想はれよ、さて一兩年は奉公致させ、其の後は分別あるべし、先づ出代時までは纒の棒手振なりとも致されよ、後大名になつてもそれが身に着いて居るではなしと、霜先の朝道を急ぎ、四谷町はづれに里人を待ち大根の出買して、夕に賣り仕舞、昔の娼

樂を今思ひ當り、或る日雨風の烈しきにも身を厭はず、賣り出で芝の土器町の末に小家勝なる淋しき所に廻りしに、板屋まばらにしのべ竹の菱垣崩れ懸り、北窓を御文殊更の清書にて張り塞ぎ門柱に關川内匠宿と用に立つ手にて、張札浪人らしく見えて、内は枯々に名は仰山に知らせり、此の草戸開けて十四五なる若衆美しき形をいつ枕をあげ愚かなり、虎之助知らぬ人に何を申すぞ、黙れ御所柿の良きは百につき何程か、鴨は番でいくらほごか、其の八百屋に問へど、此の身になりても流石昔を忘れぬ借上、聞けばいたはしき中にも可笑し、徳三郎はそれより何となく宿に歸り、米味噌肴を調べ、彼の家に急ぎ、門の戸を開くれば、最前の若衆間に泣く聲怪しく、晝の大根賣なるが心許なしと尋ねけるに母は七つの鐘の鳴る時夢の如く果てられ、親仁は只今息絶えけるといふに驚き、近所にて油を調へ見るに哀れ深し、虎之助燈火にて二人の顔を拜み、今はと自害するを留め耻は跡に残りしものと道理責めて心を沈めさせ、二人の亡骸を母は虎之助に負はせ、父は徳三郎肩に懸け、野臺の烟となし、其の夜は虎之助が伽して難儀の始終を語り、此の度の御恩命の内には送り難しとおこなしくいふにぞ、徳三郎奈良にて親達への如在身に應へて悲し、それより十日ばかり毎日見舞ふうちに、生國信濃より歴々の武士尋ね給ひ、段々様子を聞きて年月の事ごも、嗚々と涙に目は開き給はず、折節徳三郎居合せしを扱も頼母しき心底、武家にも珍らし、此の虎之助は某が實子なるが、十一歳より關川内匠方へ養子に遣はしけるに、永の浪人のうち孝盡せし事、我が子ながら神妙なり、いざ國元へと伴ひ、徳三

郎には金子百兩賜はり、未々の事まで申し合せて別れける、其の後徳三郎は通町に店出して、商の道
廣く幾なく分限になりて、南都より二人の親を迎へ、朝夕孝行を盡し人の爲めとなり、慈悲善根をし
て直なる世を渡りて、日本橋の邊に角屋敷次第に家築え、昔の奈良刀今金作にして箱に納め、永代松
の枝を鳴らさず、此の御時江戸に安住して猶悦を重ねける、

本朝二十不孝卷之五終

懷
刃

懷硯

序

雨の夜、草庵の中の樂しきも、旅知らぬ人の詞にや、亦人のいへるあり、知らぬ山、知らぬ海も、旅こそ師匠なれど、我朝なく、草鞋の新しきを頼み、夕々油單の垢馴るゝをわざにて置くは、外の濱風を身にふれ、胡砂吹く夷が埃にも、塗にしは、親にも告げよこいひし、島守とも身をなし、生の松原、箱崎の並木の數も、よし覺ゆるに、或は恐ろしく、或は可笑しく、或は心にとまる人の咄しを、莖短きか

筆して旅せぬ人にと如左

貞享四年花見月初旬

懷硯總目錄

卷之一

第一 二王門の網

明けて悔しき鬼の管入の事

第二 照てりを取る晝舟しるふねの中

祈れど聴かぬ骨牌大明神の事

第三 長持には時ならぬ太鼓

留守の娘利發を出だす事

第四 案内知つて昔の寢所

一夜に變る男姿の事

第五 人の花散る疱瘡ほうそうの山

衆道しゆだうに身代り立つ事

卷之二

第一 後家になり損なひ

心の駒は將棊に好き入る事

第二 付たき物は命に浮桶

一足飛の地獄海船乗る事

第三 比丘尼に無用の長刀

武士は義理の恥敷き事

第四 鼓の色に迷ふ人

覗きをくれて窟知る事

第五 椿は生木の手足

都のお客に藝盡見する事

卷之三

第一 水浴せは涙川

一度に五人女房去る事

第二 龍燈は夢の光

見馴れぬ面影の海的事

第三 氣色の森の倒石塔

徳猫遺恨の事

第四 枕は残る曙の縁

二月籠り堂の事

第五 誰かは住みし荒屋敷

姿繪針刺となる事

卷之四

第一 大盗人入相の鐘

身の隠れ家葛籠に極むる事

第二 憂目を見する竹の世の中

頼母子掛て戸の鑰明る事

第三 文字すはる松江の鱸

結ぶの神も儘ならぬ事

第四 人真似は猿の行水

子故に俄發心の事

第五 見て歸る地獄極樂

法師の輕業命勝負の事

卷之五

第一 佛おんかきの似せ男

無筆は無念なる事

第二 明て悔しき養子が銀箱

思はぬ身代の事

第三 居合かあひも騙だますに手なし

室の色町喧嘩けんかの事

第四 織物屋の今中將姫

通力つうりきの神も筆の事

第五 御代の盛は江戸櫻

袂たもとから敷金しきかねの事

懷硯總目錄終

懷 硯 卷之一

第一 二王門の綱

朝貌の晝に驚き、我入つに下りぬ、日暮れて道を急ぎ、何國を宿と定め難きは、身の果敢なやと、思ひ籠みしより、修行に出給ひ、世の人心、銘々木々の花の都にさへ、人同じからず、まして遠國に、變れる事ごもの有りの儘に、物語りの種にもやと、旅硯の海廣く、言葉の山高く、月よりは其よ、見人こそ違へど、面白可笑き法師の住所は、北山等寺院の邊に閑居を極め、獨りは結ばぬ笹の庵各別に構へて、頭は霜を梳りて散切となし、居士衣の袖を仔細らしく、名は伴山と呼べど僧にもあらず、俗にもみえず、朝暮木魚を鳴らして、唐音の經讀みなご、菩提心の發りし釋迦や達摩の、口眞似するうちにはあらず、唯謠の代りに聲を立つるのみ、不斷は精進胎あるに任せて、魚鳥も餘さず、摩禪の夢覺めては美妾頭に誘はれ、鹿子の袖の吹返し、留木の薫きく間も、紙袋の抹香の香移るも、煙は皆無常の種、始めて狩衣の裾短かく、草鞋に石高なる京の道を踏出しに、更に張笠の上に音なして、降り續きたる五月雨、黒木賣の渡り絶えて、白川の棚橋埋み、爰に目馴れぬ家程の浪重なりて、岸根の崩るゝを嘆くに、水嵩まりて堤の切れかゝり、里人太鼓打續き、末々の枝川、諸木も葉付の筏を流し、三條繩手凄敷く頂妙寺の惣門につきて、佛壇自からの流れの題目となれり、寺中法師の腕立も叶はず、

南門崩れて二王の浪につれて口開き口閉ぎ、青き息をつき給へども、誰取上ぐべき様なく、岩角に當りて、終に碎けて濺猿しくなりぬ、日も暮れに及びて、七條通りの町人に、木樵屋甚太夫と云ふ男、薪の行水につれて、熊手にして掛け上げゝるが、彼二王の片手を取上げ、律義に驚き、召連れたる男に、鬼の腕といふ物なり、是家の重寶、かまへて沙汰する事なかれと、竊に宿より半櫃取寄せ、是れに納め、俄に注連飾りて内蔵に納めぬ、鬼の手を拾ひしと言へば、人皆興を冷しぬ、然ども此人日比鹿末なる事とて、言はざる者なれば、いづれも見ぬ先きに、横手を拍つて、是未代の語句なれば、見せて給はれと、町内にて年久しき人、譬へ命を取らるればとて、世に望みなしといふものあり、又若き人は、前後かまはぬ無分別、身躰よろしき人は、斟酌して是を見ざりき、彼是十一人、見るに極め、女房に暇乞の盃し、鎖帷子着るもあり、重代を差すものあり、又は飾分の大豆を懐中するもあり、棒乳切木長刀、思ひくゝに振り掲げ、身震はしながら是を見んと、森くは、今も愚なるは世の人ぞかし、既に夜にもなれば、見る時も今なるべし、亭主は人よりも、更に身を堅め、手燭燈して藏に入り、是なる櫃にあり、蓋を開ると、立かゝれば、各目と目を見合せ、四方より取廻し、櫃の内を覗きけるに、不思議や此腕、誰が目にも動く見えて、氣を失なひ、我と持ちたる刃に怪我して大きに惱みける、此事沙汰して、其終夜洛中の人々、門に市なして、見る事を望みぬ、明の日頂明寺の二王と知れて、前夜の事のかしき、假初事にして、世の費となりて、此男を二王門の綱とぞ、申しける、

第二 照を取る晝舟の中

人の身は繫がぬ舟の如し、伏見の濱の浪枕「爰に一夜を明して、晝の下り舟あらば、大阪までの便りと眺め渡れば、昨日夕邊大方の出舟の跡淋しく、京橋の旅籠には疊扣きたて、茶笥賣は衣片敷きてうたゝね、蕎麥切舟牛房も焼絶へて、床髪結さへ、所の若者の角ぬいて居るなど、此里も日の内の隙をかしく、問屋の門鞠を見て居し時、播州より、改めて飾の舟下るといへば、法師といひ旅と申し、夢も結ばぬ暫時が程、便船の斷聞て、情ある人々は嗣の間に乗り移りければ、我は火床の前に身を進めて、人の管笠にも觸らず、船頭にもよい天氣と機嫌どり、豊後橋を下し、楊枝が島を過て、淀小橋を越へて、男山の姿も最殊勝に、清濁るをもかまはず、素人謠又は山崎通ひの小歌、浪に聲忙しく十里が間の慰み、攝河兩國南北の川岸柳に鳥も面白く、一村の祖母五十人程、小舟に乘行くは、六條關参りとて難有く可笑く、心々の人附合ひ、此舟四人してかけられるに、一人は播磨の郡土坊主、此度長老になりての歸るさ、一人は近江の布屋、又は長崎の町人、今一人は大阪長堀邊の、材木屋の一子なるが、親は隠れもなき始末者、久しく貯へ置かれし金銀を、色の道に使ひ捨、幾度か異見せられて止む事なく、廿二の時勘當にて、江戸に下りて、其より越中に立越へ、自からにふむ撫の山、年月世を稼ぎて、身の辛さを忘れず、此五年餘に、金子三百兩仕出し、なき商の道油断なく、流石は上方人とて

北國人此風俗を眞似て、所の實なれば大阪へは歸さじ、爰に取留てなご、乞聲にして、追付縁を結ぶ時、難波の古き友達、信濃の善光寺參りの折節、廻り逢て、互に昔を語るに盡きず、今は二親の嘆き給ふを話せば、故郷忘じ難く、其人に詫言状を上げば、母の親殊更に戀しがりて、兎に角歸れとの仰せに依つて、越中の出見世粗方に仕舞、儲け溜し金子も見せて、親に悦ばせ申さんと、乗掛葛籠に入れて、其外絹綿の土産物、錦着て歸る心地して、今日の舟路も潔く、酒菓子も乗合の仲間として物堅く一錢の事までも、目子算用に、何れも旅功者なる摩者、損徳なしに罈をあげ、未だ大阪へは舟の上六里半、牧方あたりより身拵へして、竹杖までも取廻し、萬事に氣を付るうちに、舟人が糲米櫃より、布袋屋骨牌の、十馬八九の足らぬ取集め物を、出しければ、小者共一文二文に讀みて、程なく跡先に四五文づゝ置きて、手元忙しく勝負しける、清兵衛下人、越中より召連たる男、百差皆になして、鬘鏡八分に、即座に賣て、是も打込めば、律義者にて上氣して、周章狼狽たる貌付をかしく、取返して取すこて清兵衛立掛り、てんがうにするうちに、錢八百負になれば、是切といふ所へ、播磨の長老進み出、後生大事に捻りければ、九品の淨土かふこて、衆生残らず根から取れば、一向に置かけ、つゝの豆板一步穿鑿になり、長老六七兩も勝給へば、近江の布屋差出、長崎の人大氣に掛り、三番まきに付目取て、山の如く置立しに、次第に勤りて千兩計、小判彼方此方の手に渡れば、船頭古御器出して、てらをうたせけるに、是さへ金子十兩にあまりぬ、舟は急ぎもやらす下しけるに、雨上りにして

水早く、程なふ長柄川に來て、大坂が見ゆるといふ時、清兵衛三百兩残らず負て、越中より親達親類への遺物、絹綿も直打して、皆々負になりて、川崎を瀬越こて、有丈置て取られ、舟は八軒屋につき、長崎人機嫌よくあがれば、續きて播磨の長老の仕合、百兩餘りも勝て、此度の京の入用をしてやり、不慮によき同船を致しましたと、念比に暇乞をかし、布屋は小判十四兩と絹綿取て、澁紙包にさせて、舟より足早に上り、小戻して船頭を呼びかけ、草鞋掛が片足ある筈じや、見てたもれど、是まで取て歸る、清兵衛跡に残りて、船頭に種々嘆きて、てらの内より金子二歩と、錢二百貫ひて、舟より直に長堀の親の元には行かずして、又身拵へして、明荷物を小者に持たせ、遙々古里に歸る甲斐なく、徒足にて越中に下りぬ、假にもせまじきものは博奕、あざ家を失ひ身を捨るのひとつ是ぞ前ふたに三つがあがるにしてかゝせまじき物ぞ

第三 長持には時ならぬ太鼓

老若暫の氣を移して、生死の堺町を見物人は今も知らず、息引取は墓なき借籠を片手にして、圓座所席なく、數十人の貌つき、都て逢ひ見し近付こては一人もなし、世界の廣き事の思はれける、大方は侍の附合なりしに、鞘とがめ、詞論も絶えて静かなるとき、津浪笛鼓打收りて、是が今日の猿若助三郎が出て、三拍子揃ひ袴の座付、玉川千之丞が狂言こて、人皆な咳嗽音止て、是一番待ち見しに、京

で聞たる聲に變らず、面影の通ひ小町、昔を今に見なし、果の太鼓に、立出しに小芝居に播磨が六道の機關、閻魔鳥は是しやと、看板叩立る中に、西國風の勝手を爰に出せし、町人を白く走せど、少しも恐るゝ人なく、かへりくらはして、當言いはれ、無念重る折節、浪人らしき男、廿歳餘の風情、物軟に短刀を落し差に、編笠先下りに世を忍ぶ有様して、十二三の野郎に、紙子の廣袖、鈍子の衣裏は、宛然脇差袋を解きて、掛けたる様なり是物好さは見えす、詫ての草履取、手を振る勇もなく、主人に續て通りしに、彼我もの顔に手をさして、小人島の鎗持と見立て、悪口いふにかまはず、其程過しに、跡より來つて野郎が鼻を撮上れば、せつながらりて赤面する時、溜兼覺悟して、竊に小者を宿に返し、八丁堀稻荷橋の途中にて、向ふより聲を掛て、最前の狼藉覺へたかと、左りの肩先より切落せば、殘る四人驚き、暫らく抜も合はせず、身ひせしを、又壹人鬨先を切付、首尾よく立退くを、辻番手柄を見るより、心して門、打ずして通しける、三人漸く氣据へて、彼者を追掛けしに、筑地の末、小屋掛町まで逃げのび、次第に險くなつて、濱手の草葺の内に走入り、只今追手の掛者、身を匿して給はれ、萬事は頼といへば、答ふる主もなく、十五六なる娘、形の優しげなるが、一人留守して、東明の窓の下に、結ばれし糸解き捨て立出、其草履を其處に脱ぎ捨て給へ、裏より脱道ありといふにぞ、前後覺えず忍び行ひ其後娘は長持に寄り、仔細ありげに錠をおろし、時、三人走りつき、此家なるはと亂れ入、見廻せば其人なし、扱は此長櫃に匿せしに極まる、急いで出せと詰かけしに、娘少しも騒ぐ氣

なく、如何なる事ぞ、我は知らず、人の家に斷なしの曲者壹人も餘さじと、掛古びたる長刀おつとり、切てかゝる、女に手向ひはならず、三人共に身を潜め、難義の折から、近所の人々集まりて、兎や角詮義の所へ、二親御堂より下向し、父は肩衣かけながら、母は綿帽子取りも敢ず、是はと娘に縋り、始を聞届け、安堵して、親仁三人の者を引つけて、我今こそ哀れ、以前は疲馬にも乗り、鎧鎧の二筋も持せて、豊田五左衛門と名を呼ばれしが、今かく淺間しき住家なればとて、娘計の内證に入りて、存外せし故なし、己等世の掟を背く物取なるべし、さもなくば主人を申せ其儘に歸さじといふにぞ、三人道理に責められ、様々手を下げて人を殺めし者を付込み、折節長持を締させ給へば、心の急まゝに、誤り申すど、段々詫言聞届けて、然らば左もあるべし、近頃見するも恥かしけれど、此上に改めねば、武士の本意にあらずと、鑑取て蓋をあげ、三人のうち壹人に覗かせけるに、哀や浪人の有様、衣類の入物なるに、辻なしの傘一本、日光挽のはした盆、鎌倉の繪圖の破れ、稽古乗の木馬、神付の紙合羽、塗足駄、箔置の大鼓、ひとつも錢になるものはなかりさ、皆々見兼てと歸る、三人の者も、禮義を述べて別れぬ、其後事なく鎮まつて、夕暮方になつて、長五左衛門稟合に語られしは、人の難義は何時を定め難し、今日の迷惑思ひも寄らず、昔ならば、譬へば、驅込の者なればとて、天晴出しはせじに、其時々々を捌て、長持の恥を晒せし事よと、棒鞘の相口握りて、涙を溢す、娘も今淺猿しき親の御暮し、思へばいと女心の、亂れけるを辭め、今日の御難義は自からがなす事なり、仔細は是

も浪人らしき侍の、血刀さげて駈入り、頼むといふ一言、見捨難く、裏へ抜けさせ、長持に入れたる様に見せ掛け、其隙に逃延び申すべしと存じ、追手の者の氣をとり候と、此事委細に語れば、長五左衛門夫婦、手を拍て、女の早速には扱て、我子ながら頼母しく、是に付しも、浪人恨めしく、日數を送くる内に、今は賣るべき道具もなく、憂秋九月の節の前になりて、追々菊の霜枯に、一日を暮しかね、世の人は千歳を延る盃事、水を呑む力もなく、此儘朽果る身の習ひ、日影に埋む苔の石にて、手をつめたる如くになりぬ、はや九月七日の夜、武藏野の月清く、品川表の海照りて、遊山船の歸るさに、遠音の糸竹、心は其に移りて、頭を振て鼻唄へど、昨の腹にて今日は淋しく、置る棚をまぶれど、鼠も荒ぬ宿の悲しく、妻子の志を思へば、長命へて甲斐はなしと、常にもてなし、磯邊に出で、小脇橋にて心元をつくに、足弱車の膝震ひ出、手先に力なく、死ぬる事さへ我儘ならずして、其口惜さ武運も斯まで盡ぬるものと、地に伏して嘆きぬ、娘は遅きを案じて尋見て、此有様に驚き、去とては御卑怯なり、墓なくならせ給ひ、母は何とならせ給ふべし、世渡りの種は是にありと、袖より金子五兩取出し、親たる人に渡し、娘は皆くれに見えずなりぬ、母又是を嘆き、尋ぬべき便なく、夫より二三日諸神を祈り給ふに、不思議や、有所の知れける、此島續きに隠し遊女ありて、契を當坐切りに、さもしき事なるに、是にあたら身を沈めて、僅なる金銀にて、二親を養ぬる志、艶しく哀れなり、其日より髪形を直し、新枕と祝ひける、其客になる人は、屋敷方の小者中間、又は渡海の船頭、

八王子の柴賣、上下宿の六尺願人坊主、或は肩の上の商人、向島の野人、理もなく入亂れて、一生浮流れの女となる所へ、長五左衛門駈付、親の合點もせざる娘を勾引してと、強請にかへつて恥を思ひ未だ其身に染らぬ前を嬉しく、前金返して連れ歸り、扱も危なき仕合、いかに親を思へばとて、我子には淺猿しき心底なり、名こそ惜けれ、命は夢の間の有無物、列て最後と夫婦の中に娘を置、一度に聲かけて自害をする時、門に馬乗物の音なして、歴々の侍内に入り、某は杉戸數馬といへる浪人なりしが、此度古主へ八百石にて歸參致せり、過ぎし年息女に命を救はれ、危き所を遁れ、本國に下り、首尾残る所なく、此事一門に語れば、夫こそ祥の縁組なれ、其斷を申入れ、御不足なりとも、某を聲になし給へど、是非に申受け、夫妻に定めて、互に悦びの花の時、二度運を開ける心地して、娘諸共に引連れ、霞ヶ關今越えて、奥州にぞ下りける、其後長五左衛門も、古主に呼び還され、本知千石とれば、神も見捨給はず、弓矢の家長く捨られず、武士は頼母しきものにぞありける、

第四 案内知つて昔の寢所

淡路島、通ふ衝の鳴く聲に、世の哀見る事あり、屋島といふ港に、舟泊して、一夜を明すに、去とては面白からぬ所なり、昔の小歌に、花の屋島とは、何が目に見えて謠ひけるぞ、春さへ櫻もなく、秋の夕暮の心して、浦の管屋に立寄りけるに、女集り茶事して樂み、有觸たる嫁訪り咄しすべき者が、

物毎急ぐ事には、仕違ひありと、分別らしき物語り、何事ならんと聞くに、此濱の獵人に、北岸久六といふ者ありて、毎年罽網に雇はれ、東の海に行事あり、何時もは大勢組して下りしに、過ぎつる秋は人進まず、勝手づくにて我一人下りぬ、久しく便の事もなく、其身無筆なれば、自からに世を背きて、親類にも氣遣を致させける、其年の秋日和荒て、獵船數多損じたるを、風の吹様聞けば、扱は久六も世に無人となりけると、一門嘆くにぞ、人の口にて最後まで見たる様に申なし、一連に二百五十人、外海にて相果しとや、當年は心掛なりしに、下らで仕合と皆々いふに、辛さの餘り、嘆く中にも、女房の身にしては一入悲しさも勝り、明暮是耳にして、命を捨る程に思ひ込しかば、女心の優しく聞えぬ、扱も久六は入簪なりしに、夫婦の挨拶よく、二親に孝を盡せば、身の程思はれ、此男を惜みぬ、其冬も立、春過て一年近く知れざれば、愈々死んだに疑ひなく、里を出て行別れし日を、命日に、夫々の僧を供養して、残りし物を誠の親元に返し、それが事は次第に忘るゝ習ぞかし、かくて女も若し此儘に後家になし、世間にある事なれば、後夫求めて親の心を助けよと、色々に諫めければ、中々女は合點せず、近々に髪をも剃し、責ては亡人の爲に、香花の志深く、浮世を弗と思ひ切しを、各様々に申慰め、親人不幸第一、是非と至極させて、無理やりに又も入縁を取組、今日こそ吉日と祝言を定めける、男は、同じ浦の獵師、小磯の奎兵衛といふ人、久六よりは萬に生れ勝りて、不足なし、二親の喜び親類の勇み、二度の入婿、かゝる濱邊も袴着る事見習ひ、女は黄楊の挿櫛、猷々

の滄盛半ばに、何處も怪氣は必ず變らず、幽鬱板戸に礫打かけ、驚かす事幾度か、それも夜更て静まり、寢所に木枕並べ、互に打解けて、久六が事は自から忘れて、奎兵衛可愛がり、此時の氣に打任せける、此宿の昔々、宵の草臥に明けの日まで、緩と長寝して、戸を明ぬ所へ、久六旅姿して立歸り案内知つた顔に立入り、久しく逢はざる女床しく、寢所に行けば、南窓より影寫りて見しに、しごけなき枕の様、髪も昔よりは美しく、此浦の美人なるものをと、少し自慢心して、添臥に夢驚かせば、女興を醒して、泣出せば、夜着の下より奎兵衛出て當惑、久六異物になり、是はと改けるに、段々初め語るにぞ、大方ならぬ不首尾、因果といふは是ぞかし、人も多きに、殊更奎兵衛は、久六と年月遣恨の止ざる者なれば悪し、常より深くありて、久六分別して先づ舟吹流され、奥の海に行し難義を語り、其後心靜に女を差殺し、奎兵衛を討て捨、其刀にして其身も失せける、鄙びたる男の仕業には、神妙なる取置ぞかし、

第五 人の花散る疱瘡の山

懸鯉險處拾生涯、暮鐘爲號促歸家。扇子に空しく留む二首の歌、白菊と忍の里の人間は、思ひ入江の島と答へよ、と聞えし鎌倉山、明けもやすらんと道急ぐ旅人も、爰の氣色に立止まり、其墓に哀れを催ふしぬ、都て世の常なき様は、由縁あるものゝ名のみ残りて、幾人か消え、如水沫泡爛と、御

經には説給ふ道理、思ひ續けて行けば、日蓮上人の土の牢、今は妙久寺の庭に形ありて、星降の梅が枝古りながら、最殊勝に匂ひ、殊更に異なる花の眺め、櫻に勝て人の山を崩しぬ、其中に色形優れ、此生れつき鄙の都は是れなるべしと、人の譏を愈ふ美少年、若黨二三人召連れ、輝媚たる容色、見る者假初にも懐まざるはなかりき、爰に々時專九郎といへる浪人も、春の日和の理なく、長閑なる折からの、浮立つ心に誘はれ、其人並に此所に立交り、最前より此若衆に、意魂を失なひながら跡を惹ひ、歸りさの屋敷まで着込み、あたりの家に立より、此の隣の門構へなるは、如何なる御方と問へば、彼は武蔵より歸らせ給ふ、御隠居所にして、大谷右馬之助殿と申し侍る、今他處から歸り給ふは、其孫子左馬之丞殿にて、比比御見舞に上りての御逗留と、具さに語るを聞届け、我家に飯り、猶し彌増し戀の柵、涙川の深くぞ思込、詫し愛住居の起居苦しく焦れて、送る日類のどけしなく、傳手の便もなければ、明暮之を煩ひしが、元より此專九郎仔細ありて、身代稼ぐ身にもあらず、只獨りの渡世には、元結捻り、甲斐なき命を繋て、上手の名を得しに、或時、左馬之丞僕、是を聞及びて、買に來りたるを、夫共知らず、煙草など吞て、一つ二つ四方の咄の次手に、思はず噂ありて、渡りに舟の便りを得て、一命を抛て頼み掛れば此男成程、それ丈の思ひならば、肝煎るべしといふに嬉しく、過し比より、有様を書綴り、送りければ、左馬之丞見て、誠に賤しき者とあれば、斯るしほらしき心根感じ入り返事して、それより深き契約となりぬ、左馬之丞故郷へは病氣故、當所の谷々の景を心晴しに、詠むる

よし言遣り、專九郎別を歎くのみなり、斯て歳半経ちて、左馬之丞例ならず煩ひ、四五日過ぎて癩瘡表に顯れ、分て重かりしゆる、家來迄氣遣ひ、心地安からず、然ども專九郎は右馬之丞が前を憚りて、見舞ふ事心に任せず、早廿日に餘れば、袍乾て湯かゝりしに、面を脱たる如く、其跡は菊石大方ならず、次々の者まで、始めの左馬之丞とも覺えず、世に又有間敷器量忽ち變じて、二目とも見られず、自身にも心元なきにや、鏡に向へば知らぬ不若衆かと思はれ、此貌して再び專九郎に逢ふ事の辱しく、武州木挽稱宜町へ人を遣はし、我に似たる者あらば、尋ね立立て來るべしと言遣れば、金次第にて、取違へる程の美少年上しけるを、呼びつけて、其方は專九郎殿に行て、何成共、似合敷用を聞き、よく奉公すべしと遣はすに、專九郎露程も是に心をかけず、今此三十日の間の對面なき、戀しさのみ胸に迫り、幾度此者を見すれども、突戻し、今一度逢て思ひを晴れ度と許いひしに、左馬之丞扱は道立たる男、我今の容を見給は、年頃の執心も冷べし、然ども夫程に思ひ沈まれなば、逢ふべしと、竊かに屋敷に呼びて、此有様を見するに、專九郎涙を流し、斯も姿の變る物かな、夫故色ある者を、我に召使へとの志、をさく戀まさりて、自からも貌に疵をつけ、態と身を無器量に持ち下げ、彌々深きかたらひ、かゝる衆道の骨髄、昔より有間敷心底と、皆々感じぬるも道理ぞかし、此事過し年の春よりの取結びと、扇ヶ谷の竹下折右衛門といへる男の、具さに語るを聞捨にして出しぬ、

懷 硯 卷之一 終

懷 硯 卷之二

第一 後家になり損なひ

越前の國永平寺は、後深草院建長年中に、建立ありて、今に法音絶す、其流れ、派を別ちて久しく、山は世塵の遠ざかり、いと殊勝に、開山道元禪師の御影、拜み巡りて下向すれば、爰は府中の里、越の街道には家居勝れて、椽を磨き軒を並べ、煙寛なる町造目立ちけるに、人宿の女袖に縋り、日は早七ツに下ると引込けるに、何處も一夜の假枕、旅の寢覺の淋しく、明日の夕の里までの事、命は知れぬ行末、思ひ續て明し兼たるに、主の物語るを聞けば、此所分銅町會根藁屋甚九郎とて、始めは裏店借りて草履を作り、鍋取賣など、誰知らざるものなし、然ども其身一代に稼出し、俄分限となり、今は三ヶ所の家屋敷藏、肩を比ぶるものなく、其弟甚助甚七も幼少より、國里隔て賣られたるを、呼返し、手代分に家を治め、日に増して榮え、行末の頼母子かりしに、差繼の弟甚介、兄に代りて萬しごなく、商賣倉皇になして、然も色好みなるより、商事に託け、三國の港へ通ひ初め、二度の季節の帳前、度毎に、三五の十八散と違ひて、次第増の不足、大きに虚ところありて、甚九郎も度々異見するに聞き入れず、早彼所の初川といへるを、請出すに極りしと、脇より是を告げ報せたるに、堪り兼ねて、内證勘當して追出しければ、外に存む方もなく、哀に呻吟ひ歩行しを、母の不便増り、甚九郎が

目を忍びて、死なぬ程の貢して、同じ所の傍に、裏店借せて置きぬ、斯て年月重なり、或時甚九郎、徒然なる雨の日淋しく、日頃將基好みにて、六ヶ敷詰物の圖を案じける程に、朝の四つより七つ半まで詠め入り、扱も今合點が往た、是で詰物をと、吐息吐ながら、叩きける音したるに、何事と女房駈付けて見れば、早目を見つめて、冷汗瀧の如く、南無三寶といふ聲に驚き、母甚七も下々も、是はと計りに、醫者呼びに遣りて、口を開かすれども開かず、鍼たて血をとりても出ず、一握炙すへて、音なく、終に息絶えて、脆は人の命、之は如何事といふた許り、各呆れて、老母の嘆き一方ならず、女房も四年の馴染なれども、子の一人もなく、先づ近所の同行四五人駈集り、是非なき浮世の中、一度は我も人も、斯なるに定まり事、嘆きて返らぬに、念佛の一聲が、最早此上の爲なりと、老母内儀を慰さめ、先片脇に押寄せ、屏風引廻し、燈火をあげ、寺へ人を遣れば、坊主來りて旗天蓋の書付、諸行無常の一筆、六道の蠅蠅立を削る、沐浴の湯の下焚きつける、下女は涙片手に團子の磨を挽き、久三郎は野草鞋の鼻緒を着る、脇差に紙を巻き、中通りの女は經帷子を縫ふなど、尻も結ばぬ糸、哀に静まり返りし所に、甚助周章敷、子の甚太郎七歳になれるに、戻子の肩衣に、裏附袴の大きなを、胸高に着せ、自から身横に抱きて、微塵も氣の毒なる貌はなく、座敷の真中に甚太郎を下置、今宵の位牌を持ってからは、此家屋敷をば、皆我が取る程に、嬉しう思へど、しかつべらしき貌して、邊を屹度と見廻しける所に、其弟甚七涙拭ひて進み出、扱も太ひ人、此方は何時勘當許されて來り給ふぞ、

兄じや人死なれたとても、筋目なき事になるまじ、我斯てあるからは、此跡式を誰か取らん、是非欲しくば、死人と中直してからの事といへば、甚助眼を見出し、其方は知るまじ、過ぎし七日の夜、竊かに甚九郎殿來り給ひ、今までの勘當は、公儀へ訴へたるにも非ず、然ども一端町の宿老へ斷りたれば、十年のうちは、表向行來なき分にもてなせ、若し明日が日死んでも子はなし、甚太郎は甥子なれば、己が跡を遣るへしと、頭撫られ方々の約束、左右無きとて兄親方に理屈だて、早や敦賀に賣られ筒落米拾ひし事を忘れたかと、延上りて氣色するを、女房此有様を見て、奥に走り込み、衣類手道具何やかや、心に掛る欲る物、ごさくさ粉れに取集め、嫁入の時の長持に押込み、錠びんとおろして、何の氣もない貌して、姑の見る前にて、髪くるくくと束ねて切りかくるを、老母押し止め、其方が心底尤なれども、未だ若き身なれば我分別あり、待ち給へといふを、振放し、最早私の髪のある御分別は、弗々嫌で御座りますと、無理に鉄み切て投げ出す、甚介甚七は互に大聲あげて、面を張合許に立騒ぐを、同行中取押へ、先静まり給へ、此穿鑿は跡にてもなる事、死人には手をかけず、野送りの家も胃から詰掛て、聞かる、外聞も宜しからずと、老母諸共に宥めけれども、甚助是を聞入す、何の六ヶ敷事はなし、今宵の位牌を誰なりとも、指でも指たる者は、相手に致すと、脇差捻廻す、甚七は成程己が持て見せんと、問答果ざるに、同行も扱ひ草臥れ、兎角我々は日頃の好に、まつ沐浴をして仕舞ふべしと昇出し、頭に湯を一杓かけると、伝といふ聲と共に息出で、やれ齋生りたるはと水を口に注ぐ

ど、甚九郎目を開き、扱も氣がつきたやら、永々としたる夢見たりと、前後見廻はれば、大勢立騒ぐ、是は何事ぞと段々聞て肝を潰し、先づ其甚助奴は何處に居る、といふ聲に驚き、早や偽の顯はるゝかと、甚太郎を倒に懐きて逃げ出ける、扱腰を探りて見れば、金藏の鎧なし、是は誰が取りたるといへば、甚七私が取て置たる、懐より出すに、汝誠の志あらば、母には何として渡さるぞ、其心底より此愁を願す、跡式の欲論せし悪人奴、向後勘當と扣き出せば、誤まる道理に責められ、一言の返答もなく立出る、次に掛硯は誰が直せしといふに、老母を始め知りたる者なし、よし／＼鐵火を握らせ、穿鑿すべしといふ時、女房赤面して聲を震はし、それは私が長持にと、菱々取出す、其外目にたさる、似合しからぬ物を一つ／＼取出すに、誑悪なる心底、言ずして顯はれ、勿論剃髮の志より、即座に鬚拂ひたる様の、潔には似合ざる仕形、去逆は水臭き心様、行末思ひ遣られぬ、是までの縁なるべしと、夫は此世にありながら、後家姿となりて直に親里へ送られける、皆是慾心より起りて、慚愧甚だしく、熱觀すれば既に財寶も、黄泉の旅の糧にあらず、今より死したる心になりて、有銀三百貫目、祠堂銀に入れて、常念佛をとりたて、老母諸共以後の世の願ひ、本來の都に歸る山の邊に、庵を結びて行ひ清ける、

第二 付け度物は命に浮桶

神風や、住吉の浦静に、攝泉の堺、爰も都めきたる柳櫻町、錦の町の夕日影、西に傾き、鳴門の浪に立騒ぎにし村島、雲に霞に見渡せば、燈の磯屋の立並び、煙が嶋も仄に、淡路の繪嶋を出舟、武庫山風の心よく、和田の笠松も、村雨の跡思はれて、時鳥の初島なども詠めの浦、難波の三ツ四ツ五ツ、忘貝拾ふなる手近に、細江の藻に埋れ木の干潟に表はれ、玉々す濱續に一ツの嶋あり、殊更に面白く、民家の軒は雪の未明を奪ひ、松の若木のうちに、僅なる宮井ありしは、夷嶋とかや、その昔寛文八年神無月十日の夜、雨風烈しく、電光を響し、然も暖なる事夏の如し、其翌日見れば、夜のうちに此島出現せり、又同じ霜月に、雲龜上て萬代の例を祝ひ初て、人家多き中にも、蓬萊屋福右衛門とて、廻船數多長崎の商の出来分限、度々利潤ありて、此度また新艘の舟出、日次静なるに男女取乗ての酒宴して、まづさへぎる盃に千代を重ね、住吉の松太夫、白幣を翳し、舟魂をいさめ、獵きかせの大藏坊は錫杖を振たて、此仕合丸上下の順風、思ふ儘にお家の榮、千秋万歳、金銀は蓬萊屋、所繁昌と敬つて、申拂ひ清め奉ると、よい事揃ひを言立ける、扱水主楯取も目出度今日の酒盛と、順の舞の藝盡し面白く、暫らく簾かけし片見世に、腰掛て詠めしに、金箱に括り付し物は、何ぞと問へば、主の翁あれは浮木といひて、若し船破損の時、金は重き故に沈みけるも、此浮木を見て、捨すといふに、其時節ならば、乗る者生ん事難し、命の浮木はと問はれて、金銀は世に多し、舟に積むべし、命は二ツなし、歩行にて長崎へ行べし、今の世の人心、同じ風味なる藻魚を喰はず、危ふき餓を食ふ、此島一夜に現

す、物に始めあり終あり、一夜に滅すべきものに非ずや、君子は危ふきに居らず、速に愛を去りて南の橋に留るべし、

第三 比丘尼に無用の長刀

行けば筑後の國、爰も假寝の一夜川を渡るや、何の夢路なるらん、高良山の邊、岩根道を上るに、左の方の玉笹の中に、結びて間もなき庵に、年の程廿に二つ三つ餘れる比丘尼の、阿彌陀經讀誦して聞に殊勝様、さりさながら二上山を爰に移し、中將姫の面影思ひ出らるゝ、朝日映寫て、竹の組戸より覗きしに、佛壇の片影に、梨地の定紋清なる長刀一振、こゝがましく立てけるは、佛の利劍にも非ず、行すませる志とは格別なる、仔細を其人に問ふべくも、勤行の障となれば、竊かに此處を立去り、苦地の葛鬘など踏み分け、里の家に入れば、主がましき野夫の裂織といへる袖の詫しく、山刀をさして眞柴手束て、港の方に出で、渡世すと見えて、若牛に鞍置、童子鼻綱を携さへ、破籠様の物に篠の折箸、粟飯を樂と見えて女が門送りして、仕合の歸りを待つといふ、其聲の不束なるも、彼男の耳には如何聞くらん、斯る縁に引れて住みよかるべしと、心の程思ひ遣られ、此柴男に最前の荒増を尋ねければ、我知貌に語りける、當國の城下に、村井彌七右衛門とて、弓大將役を勤めて年久しく、其子息源内は未だ部屋住なりしが、奥に召使の腰元蘭といへる女、色香姿形、下々には殊更に勝れて

可愛らしく、乳母なるものに此下心を嘸き、大旦那の泊番の夜、お袋様の宵まごひの時、竊かに乳母が手引して、お部屋に忍ばせしより、懸渡る橋となりて、結びし水の心解け、漏らぬ契とは知れぬ、月日は流て早き習ひ、明くる春になり、定め通りの出替り、人知らぬ思ひを、誰が柵となつて、此別れを止めん、程なく去年の今日に當り、御暇給はりけるを、竊かに手段を廻し、同所の町外れに裏店借て、忍びて行通ふ互の心淺からず、深く進に、餘る浮名たつて、其より親里小野村といふ所に預け置、夜毎に行歸るは、思ひ深艸の何某より、通ひ路繁き松原、曙の鐘を聞て、辛く起別れ、鶏なき里もがごと、盡きぬ契りから世を恨みて、今宵も又暮るゝを待て急ぎぬ、爰に其比の暴れ組、家中の二番生、天田新七、小須万七、水橋岩右衛門、類を引く友七八人、此松影の下道に村立、月薄暗き夕々は、往來の律義男を留て、黽殺す、此慰何の樂みにも代じと、咥く所に、源内何心なく通るに人聲するより、流石忍び路の氣色から、身を進めて行を、此者共見て可笑き男の形振、仰山此方共を怖がるさうな、いざ揚て墜して一笑と、一度に左右より、混々と寄累り、何の苦もなく採て抛げ倒せば、弓矢八幡と刀に手をかけしを見て、抜かせては面白からず、手を働らかすなどいふに、又六七人取掛つて、後手に縛り揚、大小背中に負せて、杖をもつて擲き立、此罪人急げくと、大勢後より嘸立てる時の無念直ちに消ぬ度思ひ、譬方なく、責めて彼月に掛る雲放れ早くば、壹人なりとも面見知て、後日の遺恨晴るべきものと男泣、此姿にて女の方へ行くも恥し、屋敷へは猶歸り難し、是なる河

に身を沈むべしとは、思ひ極めながら、また屍の恥辱雪ぎ難し、扱も是非なき次第、侍更加に盡き果たり、早今鳴りしは八ツの鐘、逆も爰に存命て佇み詮なしと、夢に辿る心ちして悲しくも、彼女の編戸に運歩來り、足にて音づれけるに、女は早や待詫び、何の刻限にも來たり給はず、如何なる勤の障かありて、今宵は獨り丸寐の用意して、燈をしめし、夕に變りて物淋しく、其彼思ひやる枕に、夢も結ばず帯解かず、袖垣の戦吹く風に驚かされて、腹を立時、此音に取敢ず立出、何心なく伴ひ入れ、最早御出なきかと存じたるにと、先づ火をたて、見れば、是は如何なる御姿と呆れ果しに、源内差備向、口惜しと計りいひて、涙を潜々と流せば、女も何かは知らず、淺猿しき、御有様、假令如何なる鬼神にても、御前様を其如く致すべき者は、覺せずと潜然に、段々力に及ばざる仕合せ語れば、それは是非所誰か見知べき、必ず無念に覺し召すなど、様々諫めて繩切解き、終夜撫で和らげて、野寺の晨朝と同じく、別れて歸りける、爰に源内の從弟、鹿谷惣八といへる男、由良門之進といふ美少と、理なく兄弟の契約したるに、或夜の難談の次手に、此由澤田松原にての事承るに、源内殿の御事は、御自分遁れざる間なれば、我とても他に存せず、然れば聞く度に氣の毒千萬と、其有様語るに、惣八も驚きながら、慥ならざる事なれば、人達と知らず、先は慮なる事にしても、能き事聞くに似ず、といひて立別れ、其翌日源内に、若し此敵の様子は覺へなきかと話せば、皆迄言はせず、相手知れざるゆへに、有るに甲斐なき命を、今迄身命し、其沙汰せるものは、誰なるぞ、早く聞かせて給はれと、

早や顔の色を違へ、骨髓に徹して、急たる勢ひ見えけるに、惣八分別して、若し門之進に聞きしといへば、忽ち打果すに極るを、言ふべき道なしと思ひ、然らば近日穿鑿を遂げて、互に遁れぬ身なれば、諸共に打果すべき覺悟なりといふに、源内立腹して、既に聞給ひたる者を、相手にする思案、穿義も評定も入らず、只今承給はらんといひ募るを、それは聞分けのなき一言、平に待ち給へといへば、其方は親類に似合はず、外に思ひ代る方ありての事なるべし、今まで堪忍したるは、相手も見知らず、源内とも知るまじと思ひたればこそ、打置しに、語りたる者いはれずは、其方道さぬといふに、元より惣八門之進を厭ひけるより、それ程に思はれなば、如何にも引かぬといふ詞の下より抜合せ、潔く差違へて果ける、門之進是を聞きて、所詮此噂したるは我なり、又我に告げたるは岩右衛門なればと、此仲間へ押つけて、段々書付け、果状つくれば、扱は顯はれたりと、所も同じ松原にて立合ひ、打果して門之進も討れぬ、其蘭といへる女、此事聞て發心しての比丘尼なり、

第四 鼓の色に迷ふ人

清見潟、心を關に止め兼て、未明急ぐ鐘の聲、旅宿の夢、松寒ふして、風に驚く三保が崎、田子の入江に差掛り、弓手にさつと山氣疎く、哀猿叫んで物詫しく、磯邊は衛群たち、猶淋しき眞砂地を行くに、塩焼く濱の薄煙立登り、白雲富士を盗み、心當なる狂歌の趣向も仇になれり、猶行末由井神原などい

へる宿に、矢珂と名に付けし、目馴れぬ魚もをかしく、眠り覺しの煙管手に振れ、吹上の松原を過ぎ、早くも舟渡りして、浮島が原より、枯野の薄押分け、足柄の山を始めて見し事も、藜杖廊を出しより、異なる風景に眼境を悦ばしめ、猶奥深く入るに、櫛貫りて山茶花色ごり、葛の枯葉も秋よりは勝りて、賤しき岩尾の恥を隠しぬ、下漏る雫自からに凍りて、山の頭も翁めきたる風情ありて、炭竈絶へて樅の切株のみ、あらけなき熊笹を分行に、霜も諸袖を浸し、朝日願へど影遅かりし、忽然と岩に下ぬ、池崎に響きて、微妙の鼓の音のみ、爰には不思議と聞耳たつるに、程近く、此なる岩窟に正しく人やありける、紅の細ものなる、羅絹の袖ほのめき、焚しめたる薫の程を逆ひ、現心になりて村杉の葉隠より、差覗きけるに、年の程假初に見し時は、里の揚巻振分髪程過ぎ、十三計りの美童の、人家離れて此所に住む事も由なし、我を見ながら物いはず笑はず、繪にかける俣かど疑はれ、暫らく物思ひしが、過つて近く立寄り、夢の心地になつて、如何なれば久しく、御座けるぞ尋ねしが、我其昔は駿河の府中に、酒屋長藏といへる者の娘なりしに、九歳の時母に後れ、五年経ざるうちより、繼母しきに掛りぬ、世にある習慣とはいひながら、殊更に妬み怨まれ深かりしかども、我誠の心より夜晝に身を襄し、孝を盡しけるに、十三歳の春より、時の母、道ならぬ心にならせ給ひ、度累なれば人も見咎むる程になりしを、其一人二人沙汰せし時、此咎を俄かに我にゆづりて、通ふものありと父に告げ知らしめられしに、此事只ならぬ曲事と、糺明に逢ひし時には、最早有の儘に白状すれば、忽ち母の

悪名のみならず、橋を渡せし奴まで、命を絶ちての不孝の咎遁れず、所詮我一人の越度になり、一殺多生と、孝との道に叶ふと思ひ定め、猶々誤まりたる通りの段々、書置して、其夜竊かに裏道より出、此山陰に駈入り、五日は水も飲まず、覺えし誦經念佛して、六日より倒れ伏して枕あがらず、今は最後に極めし時、不思議や異香空に薫り、口に露の注ぎ掛ると覺えて、自から息通ひ出しより、力付、時々怪しき童子天降りて、伴ひ遊び、身體軽く、時しらぬ飲食飢へず寒からず、躑躅の咲くにて春を知り、栗毬の落たるに秋を知りて、三十年此山に住み、神通今覺えて、居ながら古里を見るに、早や母は先だち給ひて、十七年になりぬれば、是を語る、天道人を殺さずとは、誰がいひけん、道人稀に來り給ひて、語るも不思議なりといふも愚なり、暫しと思ふ昔語り、尋常の三日にありける、其後里に出て、又歸るさの夕、府中に假寝して、明の日主には是を語れば、横手を拍つて、其長藏といへる者、今は跡絶へて所縁なし、是は奇異の物語、道人先達して其所見せ給へといふに、二三人伴ひて、又右の岩窟に往きて見れば、彼鼓羅綾の衣残りて、二度見えす、

第五 椿は生木の手足

夜だに明けば、尋ねて紀州街道に出づべきに、邪見の里の情なく、獨法師に宿借さじと、無義道なるも、誰を恨の葛、信太の森の下影に、涙な添て時鳥木の葉夏ながら紅葉に、枕に夢も結ばず、かゝる

時こそ、世の憂を知らるれ、更行鐘を嵐に傳へ聞ば、九ツ、まだ宵ながらとはいへど、辛きが爲は秋より永く、遠里に麥搗く歌を伽に嬉しく、薄雲る月の習ひ、豹蚊いこゝ群りて悲し、かゝる所に怪しき姿せしもの、急がしげなる足並しごろに、只今御本社よりの御使者と、八葉の車轟かし、御名代なるは、無禮するなど先走り、此森の社壇開けば、眞體葛の玉姫と聞えて、静に歩み出立向ひける時、使者車より下りて、杓取直し、今般の御祭禮、御旅中御機嫌よく、今宵祠に入らせ給ひ、京中の氏子共、悦ぶ事限りなし、就ては例年の如く、諸國御流を汲む官の者に、其功の仕方によつて、官位あるべしと、仔細らしく、冠を撫下し、其爲深草飛丸勅使なりといふ時、皆々頭を下て蹲まれば、玉姫座を退りて、飛殿是へと請じ、御社の早介に言付て、國中に廻状を遣はせば、蟻通の歌之助を始め、暫時の内に寄集まり、皆々献上物を差上げ、赤飯山を築き、油揚を御調、酒は大和屋に念を入れ、釜の取肴まで運び、此度の御事と上を下へと返し、酒次第に長じて是より藝盡し始り、金熊寺の彦助どの、いざ遊ばせといふ時、辭退申せば恐れあり、私は里々の麥秋を志す、住寺玄海と名乗の果す、祈禱、八卦、月待、日待の一祈り、摩訶般若波羅密と、舌の廻らぬ所はあれど、口早に繰返し、印を結びかけ、手を打て其儘の法師がら、化功甚だ餘ありと、一番に御免を蒙りける、次に黒装束の中納言、いはずして知られたり、雨雲の馬より、眞倒に落ちての何某、蟻通の歌殿よな、三番に家原に住みて手久しきちよこ兵衛、姿は二八の花の貌、色紫の帽子をかけて、何處へ飛ぶの定めなく、しごけなき形

振、満座死にまする惱みける、次に錢箱這出でける、昔の鐵輪は三足、是は一足も見ぬねど、尾の隠されぬが氣の毒、前に計しお札にて、手漉の水四郎と知られぬ、五番に水間の野老堀のぬく介、形は其儘大木となり、兩手は梢の如く、時ならぬ椿の花、折に来る者を勾引す、次に出しは艶姿、假令へば島原の野風、大阪の萩野にも、劣るまじき風俗、衣紋氣高く引繕ろひ、何なる粹も轉させん其化粧、何もならぬと興じけるは誰ぞ、事も思かや、乳守に名高き葛城が假姿、大泉陵の慕あらし、と會釋して入れば、色黒き聲高なる男、是は佐野の梶盗の門之介、次に鉢巻に釣髭、大小見ながらねだれ者、酒手くれねば通さぬ男は、助松のねち助と、大笑に尻聲なく、明くれば元の林になりぬ、

懷 硯 卷之二 終

懷 硯 卷之三

第一 水浴せは涙川

五十鈴川の小石を拾ひ、戀の夜に入る人の門口、藪に打ち付け、天の岩戸も破るゝばかりに響き渡り、伊勢の山田に旅寐せし、夢を驚かしぬる宿の主、何事ぞと尋ねしに、近所に嫁入りありといへり、誠に二柱の始め、男神女神の其より以來、人皆格氣より起りて、かく磔を打つ事よと大笑ひに目を覺し、東路に下り、其後又此宿へ、通り掛に立寄りけるに、人失心たりとて罵るまじき事とて、亭主の語りけるは、日外女房呼びし男は、中世古といふ所に、松坂屋清藏とて、身過に賢き、世間愚なる男なりしが、常に寄合ふ謠講の宿には、彦左衛門、徳介、松右衛門、新助、師匠は武右衛門、一所に並び居て、今宵は清藏遅しといへば、彦左衛門進み出で、此春女房持つてより、少々の用事には、門にも出でず、晝も大方寐て居ると見ゆたり、世の中は皆あの通り、過不及なる事のみにて、無男といひ、餘程足らぬ者が、今の女房など持つべしと、下手な氏神も知り給はじ、憎き事は、一昨日も、ちよつと見舞ひたるに、夫婦白晝に巨燧に暖り、然も己が音づるゝと、二人ながら蒲團被りて、俄かに空船、去迎はその仕方の悪さといへば、皆々口を揃へ、法界ではなけれど、あの男めに逢たら女房を持せて置くさへ、腹立つに、餘り見苦しき有様、今にも來らば言ひ合せて、去らす談合せんといふ所へ、

清藏来り、一ツ二ツ世間咄の序に、松右衛門一分別ある顔して、斯う話すからは互に悪しき事あらば、いひて直すが道と思ふから、近頃言憎れども、此度の御内儀の事、器量は尤も、人の沙汰する程の諸躰残る所なし、去れども今まで行かずに居たるは、大分仔細のある事、誰も知るまじ、持病に癩癩といふものありて、年毎の小寒の末、大寒の差入に、必らず發りて、御手前の命を取らるべしと、最負に思ふ程の者は、是汰沙なりといへば、清藏肝を潰し、それは如何なる病といふに、卒爾是が發ると、先づ丸裸になりて、白晝に大道に走る、常々秘す事を口走る、道具を打破る、科なき下人を打擲き、疊を切裂き、我男の咽笛に喰ひつくと言立てる時、清藏色を違へ、南無三寶と暫しは物もいはず、扱も、是非なき事と、是を眞事と思ひ、能くこそ知らせ給へ、大寒も早程近し、命一つ拾ひましたと、直に宿に歸れば、跡は大笑ひして、謠は止にして夜を明しぬ、清藏は宿に歸り、女房呼んで、ちと思入れあれば暇を遣るぞ、只今歸れと、立ながら三行半さらりと書きて抛出せば、女房涙を流して、是は如何なる事を聞て、かく仰せらるゝぞ、様子聞かせて給はれといふに、何程憤りやつても、涙が怖い物でなしと、愛想なく引立ければ、此悲しき限りなく、然れども、女の理なき泣くゝ里へ歸りければ、親達の不思議、常々人の沙汰に逢ふ程、中よき夫婦といはれて、今俄かに去らるゝは定めて其方に不義あるべし、切々憎き女奴と、奥の一間に立て籠め、仲人七右衛門を呼びて、此由語れば、是は思ひ寄らぬ事、清藏此分別あらば、私に知らす筈、先づ参りて様子承るべしと、清藏方に行け

けば、早や疊を上げて、七右衛門殿とも覺えぬ、彼の様なる病者を、よふこそ肝煎しと、恨み數々、其は心得ぬ不足承る、仔細語り給へといへば、右の段々追付塞に近し、何と七右衛門殿、人は嘘を吐物では御座らぬといふに、去逆は其様な事とは夢にも知らず、と呆れて歸りぬ、月日消は早く、寒さの明日、此女房衣裳常より改め、美々しく飾りたて、物好の模様染蹴出し、歩みの容姿更に勝れて、見る者惱まざるはなし、老母と同道して、右悪口いひし五人の者共の家毎に見舞ひて、寒も過ぎ行ますれども、煩も致さず、風さへ引かぬ達者、お目に掛けんといふ見せ、清藏所へも立寄りて、随分無事に暮らして、此通りと言捨て出れば、清藏手を打つて、扱も人は跡方なき事を沙汰して、馴染めたる中を、離れさせけると思ふ上に、寄り来る程の者は、美しきお内儀を、何として離別なされたぞ、心立と申し結構なるお人、千人の中にも亦有間敷と、金を落したる様にいひなし殊に、此頃何處やら嫁らるゝよし、此男になる者は、仕合な事といふに、清藏此残念胸に迫り、節季の仕迫も誰と年をとる者ぞと、万事打ち捨て面白からぬ浮世、朝夕無念々々と口號み、廿七八日より髪をも結はず、正月着物も縫はせず、蓬菜と海老も相生の松も夫婦ありてこそと打伏しける、明くれば初春の空長閑に其彼當年の御禮者、聲なるも、正月早々から疝氣が起つて、寢て居るといへど、起き上らざる所に、子供數多大人交りの聲賑しく、水浴せくと囁たて通るに、清藏好しき事と其儘出格子より是を覗きてあれば、下の町の孫助ではないか、誰が娘を呼んだといへば、下人太郎介、舊冬より頼みが参りて、

此方の始のお内儀様の、嫁で御座りましたといふに、今は堪兼ね無念至極と奥へ駈入り、何の面白からぬ浮世に、存命て詮なし、兎角世に二人共なき女房を、嘔吐て去せし五人の者、片端から刺殺して死んで胸を晴らすべしと、思ひ定め、長持の錠捻ぢ切り、脇差取出し、髪は去年の二十日過に結びたる儘なるを亂し、先づ彦左衛門方へ駈込めば、此春の目出度さは、何れも若うならしやりて、五百八十七まがり、浦連繩飾り幾久しく、と盃事して居る所に、彦左衛門は何處に、禮に出ましたと言へば、隠れても匿させぬと、壹尺八寸ひらりと抜きて、家捜しするぞと、奥から口へ走り巡りけるに、子供は恐れて逃散り、邊側の者も、是は何事が起りたる、年の始めなると、戸閉て肝を潰し、彦左衛門は留守なれば、夫より松右衛門所に行きて一騒ぎ、徳助へ走り行けども、皆々禮に出たる跡の間に、五人の者の家々を抜身にて駈け歩行しに、途中の禮者肝冷し、元日に此様な事は、終に例なき騒動、やれ喧嘩よ狼藉者よと、飾松踏倒して逃ぐるもあり、其から謠宿武右衛門所に行けば、折節居合せ、此有様を見て驚きながら、先づ静まり給へ、如何様とも此方の存分の通り、致すべしといへば、流石師弟の挨拶ありて、暫らく静まりしうちに、宿老に宥めさせても聞かぬを、旦那寺の長老、醫者の春徳、上下四町の年寄をかけて扱ひて、漸く堪忍するになりて、命は助け、右の五人の女房、皆々去らせ給はれど、いふになりて濟みぬ、其より清藏五人の家々に行て、荷物まで拵え、自身其親里々々へ送り届け、或は子供數多のある中、思ひも寄らぬあかぬ別れを悲しみ、哀はいふ計りなし、武右衛門

女房は、今年六十一なりしを堪忍せず、馴染て四十二年、今になつて去らるゝ、是は如何なる因果と嘆かれしも道理ぞかし、惣じて此類の惡口いふまじき事なり

第二 龍燈は夢の光

何の虹ぞ、更に今反橋渡せる夕景色、紀の三井寺の有様、近江なる、湖此處に譬て都の富士は磯と詠めり、折節の秋の風吹上に立ち、白菊數咲きて、浪に映らふ星の林の如し、是なん織姫の宿木とも傳へし、布引の松、千代古りて、毎年七月十日の夜、龍燈の光鮮なる、玉津島姫の姿めきたる、嫁子を誘なひ、貴賤遊山船に酒歌の樂み、或は琵琶の播音、樂天が髻を撫る、澤陽の江もよもや是にはと、自慢の男此處よ寄なん、沖浪騒がしく、次第に夜更け方になりて、人の心も空なれや、晴れ行日の影を外になして、龍神の燈捧も今なるべし、見ての語り句にもやと、群集の輩、瞳に汐風を厭はず、詠めに首の骨も弛怠なりける、昔より所の人の言ひ傳へしは、此光を見る事人の中にも稀れなり随分の後生願ひ、人事をいはず、腹たてず、生佛様といはるゝ程の者が、仕合よければ、ちらと拜み奉ると聞きし所に、大勢立重なりて居るを、我慢に突退け推退けて出でし男、眞向に進み、珠數の緒の長きに、咄し半分繰り難せながら、各あれ見給はぬか、今あがらせ給ふはと、目を眠り頭を項垂しに十人のうち七八人は、磯に釣火するを見付、有難し、日比人悪かれと思はぬ證據、今顯はれたりと、

貌皺面て拜み、又二三人は罪が深いやら、何程延上りても見えぬと、頭掻く程の者は眞實なるべし、道人はとても及びなしと、観音堂に通夜せんと、初めは普門品讀誦などしながら、一切眠るうちに、其曉の空に、紫の雲霞變じ、海上風絶へて、浪間に金色の光、水玉湧返り、微妙の調子に響き、不思議やと見る所に、鬘ぶら結の童子數十人、瑠璃燈を捧げ、跡に無量の鳥甲と見へしは、田螺鮑ひんとしたるが、魚の尾鰭冠して、管絃を奏し、此松に掛奉り、各々海上に跪き給ひ、此方を伏拜むと、御厨子自づから開かせられ、持給ふ一莖の蓮華をあげて、善哉々々鱗共と、三度點頭かせ給ひて、又戸帳に隠れさせらるゝと、皆波間に入ると、枕の鐘と夢が覺むると、一度にて感涙肝に銘じ、宵の後生願ひをかし。

第三 氣色の森の倒ひ石塔

杖扶暫し留る、大隅の片里に涼しき暮を待ちて、深邊を行細石水に、夏なき心地のして、更に都を思ひ糺すを、爰に梢の茂み、宛然其氣色の森に、郭公の折節を知らせ、纒なる村雨も旅の習とて、轉く、漸々に迎來て、近附にはあらぬ方に、仔細を語つて、一夜の假寢に夢見る隙もなかりき、人の姿は鄙もさのみに變らず、明日は五月の五日とて、松火あかして、跡上なる月伏を剃ると、老人は肩衣かけて、寺佛に勤めなす有様、東門徒の名號、いと殊勝に拜まれければ、女は柏の葉にて、黒米の餅な

ごを包みけるは、是なん上方に見し、眞薦の粽の代なるべし、釣鍋に小き籬を仕かけ、葉茶を煎じて、伊勢茶碗の手厚きに汲みなして、我を饗應ける、何處にも鬼はなき、君が代の道の廣きを、今見る事、却りて話の種ともならんかし、明る曙急ぐ草鞋がけ、脚絆のし、干になるまで、圍爐裏の椽に掛けて、取雑ての咄聞くうちに、隣に人聲の喧しく、未だ盛りならざる女の、叫びけるは、如何なる事と尋ねしに、主の語る、彼は過し比まで、此國のお屋敷方に、和田太郎七とかやいへる御内に、十一二歳より四五年、奥に召仕はれて不便がられしに、俄に物狂はしくなりて、堪らざりけるより、此比送られて歸りしを、兩親之を嘆き、一人の娘を、生ながら地獄に落す心して、力に及ぶ程、醫療祈禱に暇なく加持すれども氣色静まらず、是れより十七里を経て、名譽の道人ありけるを呼越し、餘に強く祈られ、自から本性を顯はして、我れ此女と朋輩にて、化けて隠居の御袋様に可愛がられ朝夕御食まゐる膳の向に前足折て、御口元に目をつけず、嗜み居るに、御心つかせられ、鯛の評残しを殘らず、虎よくと頭撫でながら下され、腥物さへあれば、何處の屋根の上、藏の隅に居眠りしを居るにも、呼び給ひし御心入、嬉しかりき、或時御娘子御平産ありし、御見舞の留守には、我獨り淋しき襖の中に立籠められ、一日一夜御寝卷の上に眠り、御歸りを待つに遅く、早や腹に力なく、夫れより臺所へ出て見るに、いつもの鮑貝には、乾飯の如くなりてあるをも、誰あつて心を付ける者もなく、餘りの事に膳棚にかゝり、匂ひを尋ぬる處に、小き青皿に、飛魚半を喰ひ止て在りしを、手にて徐と擡

出すを、此女走り來り、夕飯に添へんと思ふて、置きたるものをと、釘に懸たる摺小木を以て、肝心の鼻柱を健に喰され、絶入する所を攫んで放られ、忽ち眼眩み、三度舞ふまでは叶はず、息斷へける時の一念、何處へか行かん、扱亡骸をば、竊に、溝の側に掘埋められ、開きより暗き畜生道の、輪回を放れず、其時隠居様へは、行方知らずと詐りし恨み、生半かくなる事を聞かせ給は、跡をも吊ひ給らんものをと、潜々と嘆きぬ、聞もの了簡して、尤の事に思ひ、然らば如何にして退くべきぞといへば我に別に望みなし、一生暖なる事を知らず、夏冬時を分たず、巨燧して此の家の内に置給はれ、朔日、十五日、節句晦日には、鯉節天蓼を櫓の上に備へ給は、只今速に退くべしといふ時、夫は安き事、成程心得たりといへば、嬉しき笑を含み、悦ばしき聲、若々といふと、氣色静まりぬ、今に至つて其家には、不斷巨燧して置かねば祟りける、或時病人、又口走る事あり、我は同屋敷の與九郎といへるもの、此女に度々執心、搔口説きて遣しけるに、辛からは只一筋に辛からで、情混の偽を誠と思ひ、年の二年心を碎き、人目を關の明暮忘る、時なく、今は時節悪く、今宵は勤に暇なしと、根から否とも色には出さず、それをば神ならぬ身の白糸の、夜は焦れ盡は燃え、胸の煙に立迷ひ、富士はおもひの磯、涙に浮身の沈むに極まりし時、すでに命の絶え行水の柵、一夜は止てと、音づれたるにも、情なくいなせの捨言葉もなく、食事自からに止みて、是を思ひ死、誰か此憂さを問はん、今は恨の一いいふべきたよりもなく、魂は大開寺の暮にも留まらず、冥途にも往かず、一念、此女の影の形に添

ふて、片時も放れず、幸に此度の妖怪の縁に引かれて、怒を顯はす、只恨めしきは、空しく果てし後、夫ともおもひ出しもせられず、今は取殺して苦患に沈むとも、呵責に逢ふとも、共に黄泉の旅の假枕、一度は此思ひを晴すべしといふ聲、始に變りて、荒なる男の五音、段々理を責めて物語り、聞くに哀を催せり、時に祈禱せし僧、隨求光明大悲咒を繰返し、此後は跡をも吊ひ、又は此女に出家をさせ、永き未來一蓮托生の契を祈らすべしといふに、和尚の教化骨髓に徹したりと發起菩提の心を顯はして臥しぬ、其後病氣右の如く本腹して、此事を問ふに、覺えありといひしに、死靈の有様を語りて、比丘尼となし、浮世を忘水、清き心の花をたて、香を焚き、人は煙の程と消えて其心根、思ひしられ、其身堅く勤めて、昔の衣を露に絞り、今は煩惱却て善根になりぬ、然ども其験には、此比丘尼墓所へ參る度毎に、石塔倒るゝ事の不思議や、一念五百生、懸念無量劫、誠なるかな、我此所に夏の比一宿して、西海残らず巡り、同じ年の雪の山見し時、再び此に來つて、此女の物語を聞く、世にはかゝる例もあるものかとは、彼石塔の元に行き、見ぬ其人の跡を吊ひて歸りぬ、今はこけ石塔とて、名は大開寺の庭の叢に残れり、

第四 枕は残る曙の縁

奈良坂や、露時雨のみにして、兒の手柏の色付、雲霧の二面に渦巻き、鯉の形せる山も更なり、春日

の里、三條通りに軒の松年古りて、昔宗親といへる小鍛冶の、住ける邊に、纒なる煙今もたて、板屋かすかなる所に、知邊の人ありて、尋ねて一夜を明し、枕に行燈の影映りて、飛火野の秋の風、尾花が袖の淋しさを、旅の習と思へばなり、漸々三笠山に朝日の出しより、乾井の水を結びて、目を覺すなご、朝きよめの宮廻り、志ざして詣でけるに、櫻村の奥深く、殊勝の外より勝り、白張の袂を纏し、烏帽子可笑氣なる様したる、八百八屋稱宜の貌付、皆かはりて、世の中の廣き事のみ思はれ、我ちかづきは都に見たる、爰も紅葉の洞とて、幣取敢ず、神前に額づき、後にまわれば、八重櫻の春思ひつる、三月堂二月堂にあがりて、抑も此観音は、孝謙天皇天平勝寶四年、御草創あり、寶字四年二月十五日より、始めて行はれける、今に松火の奇特、燈心燃へざる事を怪しき、其外不思議の多き事いふに暇あらず、殊更本堂に籠り、七日の斷食する輩、願成就せざるといふ事なし、嗟二佛中間の利益は此菩薩に止らせ給はぬよと、魂に銘じて有難く法施奉り、歸るさの南堂拜めば、二僧集まりて物語りするを聞けば、昨日の事、獨は三條通、西屋傳十郎とて、角前髪、器量人に秀で、並びなき美男、深く祈誓かけて此堂に籠る仔細は、手貝の白銀屋喜平次娘、おさんとて姿も見苦しからず、十人は七八人も好程の生れ付なるが、此傳次郎と懐み深く、數通播口説て遣しぬるに、如何なる因果か、其嫌なる事、胸に支へて物も喰はれず、随分無義道に返事すれども、此女中々にも思ひ切らず、哀れ大慈大悲の御影にて、彼女の弗々思ひ切る様にと、心をかけて、東の片隅に淀なれば、紙帳釣りて籠りぬ、又

西の方は花岡町、墨屋外記娘おしな、美形此所に沙汰ある程の器量、心を掛ぬはなかりき、或時酒屋門十郎といへる風流男に見初られ、見るから好ぬ風な厚髪と思ひしに、出入の比丘尼を頼みて、是も思ひの數書綴り、今は千束に餘れども、身の毛彌立て疎ましく、假令流の女となることも、彼男とは嫌なるに、煩纏文を來を、手にさへ取らねと思ひ止す、逆も詮なき事に、仇名起ては由なや、重ねては又見るに及ばず返せど、彌増の戀草露の命の有限はと、言來たるが病となり、同しく此男に思ひ切らせたび給へど、紙帳の中に斷食して、兩人の願ひ微塵も違はざる事も不思議や、七日のうち願成就せざれば爲飢き苦しき堪難く、叶へば五鉢草臥れざるよし、言傳へし、去程に此二人の者、晝夜普門品を百卷づゝ繰返し、信心強盛に祈をかけし一念、豊空しからんや、既に七日満する、曉の雲の光り、音樂空に聞へ、内陣より白髪なる老翁、手に水晶の尺八丸、蓮華に持添ながら、枕にたせ給ひ、兩人の者に告げさせ給ふは、汝等が願ふ所、あまり底心から丹精を抽んずる故に、納受するなり、其證據として、是を取らするぞ、思ふまゝなる事せよと、天鷲絨の長枕を給はると見て、夢は夢にて覺め、枕は眞の枕、二つの紙帳の間にあり是は有難しと門十郎、急ぎ這出で取らんとすれば、おしな是を見て、其處な男は狼藉をする其は此方に願ひ有て、觀音様から貰ひましたと引取を、門十郎こちも御夢想蒙りての事、斷食して力はなけれど、此方の方に劣らんやと、引合ければ、おしな涙を流し聲たて、悲しや大事の物を遣ぞ、思ふまゝなる事せよと、仰せられた此枕を、人に取るゝ事の口惜やと

いふに、寺僧駈付、是は何事と、段々聞て、既に二人の心に違な物は、願の如く止むべし、其上に此枕一つを、二人に下さるゝから、並べて寝よその御媒介、しかも年比もよひ夫妻、さあ各の分別次第といへば、互に劣らぬ美男美女、此詞に氣を付、目を見合せて、離れぬ夫妻となりける、

第五 誰かは住し荒屋敷

爰に下總の須賀山、昔は如何なる人か住みけん、四丁計の石垣、半ば崩れ掛り、茅花交りの望原に、器の欠のみにして、物の哀も折からこそ勝れ、化して路傍の土となり、年々春草生すと、言るも眼前の境界ぞかし、側に草の庵の露に、八十路に二つ三つ足らぬ翁の、藁鞋を作りて、世を渡る聲と見えて、膝の下に石火鉢、古綴の火繩僅に煙をたて、絞煙草を樂むより外に、自から求め少なきは自然と、聖賢の似せ物なるべし、立寄て上總への道筋を次手に、是なる屋敷は、如何なる古き跡なると問へば、語りぬ、昔時此所に高塚沖之進とて、代々爰を領し給ひ、御家の繁昌に時を得て、隣國の大守の娘を嫁りけるに、此奥、ある夕より氣色例ならず、床に起臥し惱みて、今際の時、御念佛を進めて、久しく垢づきたる蒲團を取代るに、お乳姥御枕の下より、物書ける杉原一枚取出すと、呆れし顔して、其儘懷に押入、側に行て能々見れば、廿一二歳の女の姿を書て、四十四の骨々に明共なく針を立並べ、さも凄然調伏の形、身の毛竦立て怖しく、其着物の色、下に黄無垢白無垢の衣紋、上には芥子鹿の子の、

少し古びて、菊流しの模様染、帯の寄金、貌立目元の上、脇に黒子のあるまで、あり／＼と書たるは、其儘奥様の生寫し、思へば此度の御病ひ、是は如何なる者の仕業ならん、扱も悲しき憂目見る事よ、幼少時より今まで育奉りて、御心も人に勝れさせ給ふに、淺猿しき此有様、穿鑿せでは堪忍なり難しと竊に、沖之進に語れば、夫は憎き仕方、糺明の仕様ありといふうちに、奥様の御氣色變り給ひて、立騒ぐうちに息引取せられ、廿一歳、惜人は必ず死するならひ、嘆きて返らず、野邊の烟とはなしぬ、此事七日経と詮議するに、先御寢所に相詰たる者ならで、お枕下には置ぬ筈なれば、腰元のゑん、お梳のもん、禿共は除きて、此兩人の内なるべしと、竊に一間に呼び寄せ、斯様の事他所よりする業に非ず、極まつて二人の中に紛ひなし、仔細早く白状せずんば、有丈責にかけても、いはせねば置かぬと言ども、元より此者共、其覺え無れば、口を揃へて是は勿躰なき御意を蒙る、身に更々覺えなければ假令如何様の責に逢ふとて、申べき事なし、常々奥様の御心らかにまし、細かに御氣疲せられし、御恩の報じ難なく、御果遊ばしてより、只今の悲しさを、一方ならね、却て思ひ寄ざる御改め如何なる因果と、涙を流し、聲を揚て泣出すを、何程に陳じても、己奴を其儘置べきかと、逆も和かなるうちには、いふまじき氣色に見えたり、責よと下知をなし、大裏の椋の木に縊りつけ、寒き嵐に脚布計り、三日の間水も飲ませず、随分術なき責を巧みて、是を思ひ知れど、内股より初めて針を差込みける此辛さ、見ぬ後の世の劔の山か、生半命の早く消えんものと、涙に暮て、死する事は定業

なるべきが、如何なる悪事を工みて、此の如く殺さるゝと、只人の心底に嘲けられん事の、口惜さといへば、未責の軽くやあらんと、堀の深く湛えし所に、足に石を縊り付て追込み、首計り出させ置かる、頃は十二月廿二日、特更其近年稀なる寒じ様、雪は降らずして竹の破る音、晝夜止まず、彼の山蔭の瀧氷りて、音絶る計りなるに、二人は水の中に一日一夜は、息の通ふ程念佛して、五日目の暮に、兩人聲を上げ、科なき事に一命をとり、主なればとて非道は立つまじ、此一念終に思ひ知らすべし。無念や口惜やと罵りながら、其堀水の泡と消へぬ。此女の兄弟はあれど、主命力無く、過ぬる月日、沖之進今は召使の下女、數多用なければ、皆々御暇給はる内に、物纏のゆたは、御病中より其身も病ひ、程經て里に歸りしが、隙遣はさるゝに附、着替ども取りに來り、私が大事の針が見へませぬ、お乳の人詮議し給はれといへば、針程の物が、何と穿鑿なる物ぞといふに、それは百五十里彼方、京の住屋伊豫が上磨、男なれば刀脇差と、同じ我が針といふに、尤もなり、何に刺て置たるぞと問へば、それは隠れもない、奥様の御病ひ前に下されたる、衣装繪の雛形に、然も七本さしてといふに、お乳はつと思ひ當り、彼咒咀たる繪を出して、是かといへば、成程これ〜と悦びて歸りき、扱は責殺せし女には科なかりし物を、といひて返らぬ非道、其年經たずしてお乳頓死をし、沖之進は其翌年、怖しや氷の劔、其身を通すと叫き死して消へ、跡は散々に潰れて、財寶春の雪の如く、崩し出る草原となれり、是を思へば慥ならざる事に、人を疑ひ、鼻の先なる女の心より、針を棒に取なせし業なり、今に其屋

敷残りて、雨の夜や月ふる日には、化したる姿見ゆるよし、拔苦與樂の資糧にもと、法華經の提婆品讀みて通りぬ、

懷 硯 卷之三 終

懷 硯 卷之四

第一 大盗人入相の鐘

山寺は物の不^ふ由なる事こそ多けれ、錢有ながら豆腐蕪賣も絶えて、酢醬油にさへ事を欠くのみ、爰に越後の國立山の邊に、嶺梅庵とて、常は人の通ひも稀なる、草の戸の明暮、吐雲といへる獨法師、万異風に紙衣の襟をも折らず、清貧自からの樂と爲て、卅塵を貪らず、朝に一飯あれば、夕には白湯啜るに薪なく、或時其麓の里より、志あるよし、齋料調菜を送りて、施を行ひたる其明の夕、隣國暴れし夜盜六人、此庵に押入て見るに、人ひとりもなければ、此屋には主はなきかと評判する時、吐雲古き皮籠の内より、誰なるぞ騒がしや、餘寒さに、爰に風を防ぎて居るといへば、皆々是聞て、此の生活を仕始まりてから、寢道具一つなき、貧家には入たる事なし、責めて湯なりとも沸して、飲むべしと無興すれば、吐雲葛籠の中より、湯より酒が其處々の棚の隅にあり、爛をしられたらば、已も一つ相伴すべしといふに、扱は氣の通りたる主と打寛ぎて、終夜佛事の残を賞翫して、四方山の雑談になり、此酒只呑む可に非ず、懺悔して後生にすべしと、上座の男より語りけるは、我其昔は、出羽の國秋田の城下に、梅倉徳介とて、氏系圖家中に肩を比ぶる者なかりしに、功なくして祿を不足に思ひ、十一年虛病を構へ、一年に一度の禮にもあがらず、比は櫻咲く山陰に、女房子供伴ひ、京を

心に慰み、花見て歸る夕暮、乗物釣らせて運びける所に、國の家老の徒若黨五六人、酒樽幾どは見えながら、此女交りなる中にたわむれかゝり、無作法數々なるを見兼、さきに進む大男奴を切倒せば、残る五人抜合せたるを、又三人討て捨、此由奉行所へ訴へしに、先は手柄と讃められ、自からと仕りたり、今の世には軍なし、是を武邊と自慢心なる所へ、家老中よりの使者として、只今登城すべしとの事、扱は褒美の仰付られか、知行増加かと悦びて、城に登れば、遠騎兵庫之介立出て、此度の手柄申す計なし、扱殿に仰せ出さるゝは、數年の病氣に似合ざる達者、偽なくして偽あるに似たり、直に改易に仰付らるゝと、言渡さるゝに力落て、此面目なさ忘れられず、其より縁類の方へも往て詞なく、却て過を語る事の耻しさに、野に臥し山に夢見て、命情なきに糧は貯へず、昔の義理外聞も入らず、徨ひ歩くうちに、野邊の送りの枕飯といふ物を、ちよつと盗み初めて、今は其に成固まりしと語りぬ、今一人は關東の學寮に、十四歳より師の坊の前を走り出で、托に飯料を求めて、七年の勤學、所化數多の中に秀たりと、人も沙汰し、後には何れの本寺の、和尚に座り給ふべしと、いはれける夕の窓の下に、意魂を晝に移して、繰返す夜は微明と、明窓に走りし反故を見れば、微かに假名文の外れ、其水莖の流に消る思ひ、命とる程に書綴りたるは、馴し中々の契り、誓ひして變らじと見しは、彌宜町に匿れなき、玉川の何某と、其末は消ながら、是に心浮かれ初、何とやら面白き其縁の慕はれ、假初に通ひ馴れ、度重なるに色には染易く、花紫の一本に、學問心に乗らず、資縁少しなるに、書物買はず是

に打入、隣の七條借て二度返さず、代なして首尾を調べ、生れ付如才なくて、大咎者のいはれ、法中に嘲られ、學寮に佇ならず、終惟子一卷にふきあげての上、悪名發とたち、追放せられ、此處も寄せられず、彼處も塞がり、漸く法効の僧の、寺持るを幸に尋ね行、無理に躡込み、祠堂銀を放して夜脱して、次第に功積り、今は斯の如くなり下りぬ、又一人は、伊賀の國久村の右衛門太郎とて、田島五町、作徳大分なりしも、皆濟時には横に寝て、幾度か水牢に打込れ、未進首丈にも驚かず、此誑惑天に通じけん、一歳の洪水に、榮えの秋の頼みし五月の末に、有丈の早苗田を一も残らず流され、其荒田買手さへなく、雜穀すこし山島に作り置たるも、又早に青葉冬枯の如くしなされけるにも、人夫雇ふべき力もなく、他所には水を取つて、耕作忽ち生返りぬる羨しく、此時分別の仕始に、我物いらすに、只取る所を思付、隣の島に水一杯湛えしを、夜の内に、暇を切落し、自と崩れし様に拵へ置けば、人は干潟となしぬ、是よりよき工夫出来たりと、此類の事幾つか積れば、人皆氣を付て、所を追拂はれて此躰なりと、今一人は、飛驒の國草鹿大明神の神主、八卦は一つと知らねど、一生人の身の上の善惡、よい加減に嘘をつき、相神主の與五太夫が目を開まして、賽錢を皆此方へ到遣、昔より二間の社家なりしを、難なく一間を潰して、我獨りに司ごりし心より、横道數積れば、庄屋が利發に理を責られ、丸裸にて所を追出されたる、爲の果、今烏帽子といふ名字は、此因縁なり、我は又大坂の大港に匿れなき、木屋小八兵衛問屋の、第一なりしに、かけ木のおとりを試し、望に取かへ、此重みの違ひ數

大分の事なれば、利徳存じの外に取込み、俄長者となりしに、一旦の依怙は、終に天道の罰を蒙り、二年の内に人知ず、滅多々々となりて、塵も残らず手を打拂ひ、家屋敷鼻紙袋まで遣りて、未不足銀一貫三百九十七匁五分二厘、扱にしても聞ず、命計我物にして、其夜に近江の徒弟を頼みに行けば。早速し跡なるを、強請り掛つて、纒二三十目搦取、是より此道思ひ付て、此程に修行したりといへば、某は京三條通りの西、白銀屋彦九郎とて、上手の名を得たりしに、烏丸大隅屋道閑老、其身は隠居しながら、自然の時の金子壹兩、枕篋に仕込、其外家督も孫の太郎吉、とらるゝ筈なる時、此太郎吉假初に、ひよつと島原へ通ひ、若氣跡向知らず、使ひ出し、彼枕篋を狙はれしかども、錠を開事叶はざるを、我に談合ありしに依て、心元なかりしより、生受せしに、即座壹歩十を手付とて給はる、是我に任せ給へと、其寸法大方合點仕りたりと、七つ八つ鑰をうちて遣れば、其内に丁度合たるがありて、其後は相鑰打屋と、看板を出しけるに、所有夜盜共忍びくゝに頼みに来るまでもなく、壹歩宛に極め、程なく金子溜りて、家をも買ふべきと思ひし時、捕へられし盜賊ありて、相鑰の打手、穿鑿にさゝれ、雜織共、附届するうちに、裏の路次より扱て、迷ひ初て是と、大笑ひになりて、此物語も亭主の心に絆されて、心安く仕る、是はお御燈と、銀包みて差出せば、吐雲腹立して、盜人の物、佛は受給はずと突出せば、猶殊勝がりて、巾着の底拂ひて、皆錢箱に無理に押込て歸りぬ、今もかゝる無慾の道心者あるものか、誠に心は善悪、二つの入物ぞかし

第二 憂目を見する竹の世の中

浮世の日を見果ぬ。岩見の國、人丸塚の邊に、近き在所に、左近兵衛といへる男の、軒は萬鬘の茂みに、疎の恥を匿し、朝食の烟絶へくゝなるにも、破鍋綴蓋、似合しき女房を求めけるに、一人の老母に、不孝に當とて、離別し、自から晝夜孝を盡しぬ、天より是を憐み給ふにや、七八年のうちに、七八十兩の分限、其所には珍らし。比は五月半、枕蚊帳、濫團扇、手細工など拵へ、八九里傍の村里に賣に行、留守の中をば、隣なる律義男を頼み、今宵は歸るまじといひて出、其明の日になりても、此扉開ざる、不思議と訪て、老母くくと、呼ごも返事なく、扱もよく寝入給ふと、其儘置ば、早や七つ下になる、是は心得ぬ事と、戸押開けて見れば、老母朱になつて、其邊は血流れて、息も早や絶へたり、南無三寶といふ處へ、左近の歸りて、此有様に肝を潰して、思案に落ざる事、誰か意趣を含みて殺すべきとも覺えず、左近兵衛屹度推量するに、金あるといふ事、此隣の者知る故、母を殺して取るべき分別、と思ひ定め、此事外より爲べきに非ず、親の敵は其方と、何の苦もなく打殺し、此段く名主斷り、代官詮議して、檢視來りて改むる時、血は夥しく流れて、疵慥ならずと改むれば、其後大藪ありしが、折柄の根ざし、寝間の下より、生へぬきたる精にて、老母の心元刺し通したるに、ありける、扱は彼男を故なく、殺しぬる科通れずと、其より左近兵衛を成敗して相濟みける、是を思ふ

に、見届けざる事は言間敷なり、世に不思議なる事は、此類に限るべからず、されど見慣れぬ物には、必ず驚く習、鳥の空を飛び、蛇は足なくてよく行き、一つの玉より水火の出るも、今まで人の見ざる事ならば、幾程か疑ふべし、奇人の命を取といふ事も、早や珍らしからず

第三 文字すわる松江の鱸

神無月の朔日の日、出雲の國八重垣の、宮居に詣でけるに海邊浪高く、松に嵐響きて、殊更に神閑、社論神主の外、民家の門を閉て、昔よりの教を守り、万の鳴を鎮めける、誠に日本の諸神、此大社に集り給ひて、男女の縁を結び給ふといへり、其二柱を立出、側なる杉原の、茂き一里に入しに、四阿屋造の鬮葺の庵に、八十餘歳の法師、真言律を行ひすまし、いと殊勝に住みなされけるに、自から生垣を破り、或は片板戸押倒して、南面の縁側、西の翹、人皆立舉り、物見る氣色、如何なる事ならんと、我も其人並に立覗けば、未脇塞て間のなき女の、烏羽玉の黒髪を自から鉄にして、散り行く柳の氣疎く、可惜花の春を待すや、こは如何なる事と尋ねしに、かみ髭りんと作りたる男の、語りけるは、此里の傍に、拵拵、丸之介といへる浪人ありしに、所作すべき業なく、貯へし者皆になし、人知ぬ薬を賣しに、家中の蓮葉女、いたづらに妊めるを、墮す名譽を得、元手繰なるに、薬代に金銀多く取て、渡世とする内に、一人の娘を儲ぬ、成人するに従ひ、器量人に勝れ、十四歳の時、似合しき所ありて、祝言事濟ける、其翌日暇の状をもつて歸りぬ、又其秋幸の取結ありて、千秋樂と諡ひ、島臺の松に千代かけて、盃の浪は越すとも、と祝ひたるも、其夜の明るを待兼て、里に送られけり、漸く四五年の内に、五ヶ所去られて歸るは、未だ縁の來らざるものと悔みし、明の春は疫病流行、丸之介夫婦相果しより、此娘は姨なる許に二歳暮す時、隣里に、身代よろしき好色男に、若右衛門といへるが一目見て美形に打込み、貰ひかけしに、今の世は偽にては立す、再々嫁入し事有様に語るに、假令ひ千所へ行たりとて、其にはすこしも構はずと、服心なかりし上は、相性八卦残る所なく、吟味して、逢ふたり叶たりと悦びて遣せし、祝言目出度執行ひ、相手は變る新枕、其身には夢にも知らざる所に何處ともなく此女の前夜より、胞衣被りたる赤子幾百人、物身に緊と取つき、水泳ぐ眞似して、立並びたるを見るより、身の毛彌立、覺めて夢も結ばず、繼の一間に終夜所作くりて、何心なく氣ちまひり、此男是より其所に、隠なき後生願ひになりぬ、今思ひ當れば、度々去られしも、此有様を見られたるに予ありぬらん 扱其明の朝、姨の方へ送らせける、是は如何なる因果、最早縁の道は思ひ絶たりと悲み、自身に覺へなく、人の所思餘り心憂さに病となり、物狂はしく、然れば此事を忘れず、大社御社前にて、其所謂を告しらしめ、給へと祈りけるに、夢の中に語らせ給ふは、汝が親のなせる罪の、酬來ての寢姿の有様を、詳く教へ給ふに、有難く、發心して跡吊ふべしと、歸るさの松江を通れば、怪魚あがりたりとて、人立ち數多なるを見れば、鱸に文字据たり、丸み内に拵拵と、扱は親の

りて、祝言事濟ける、其翌日暇の状をもつて歸りぬ、又其秋幸の取結ありて、千秋樂と諡ひ、島臺の松に千代かけて、盃の浪は越すとも、と祝ひたるも、其夜の明るを待兼て、里に送られけり、漸く四五年の内に、五ヶ所去られて歸るは、未だ縁の來らざるものと悔みし、明の春は疫病流行、丸之介夫婦相果しより、此娘は姨なる許に二歳暮す時、隣里に、身代よろしき好色男に、若右衛門といへるが一目見て美形に打込み、貰ひかけしに、今の世は偽にては立す、再々嫁入し事有様に語るに、假令ひ千所へ行たりとて、其にはすこしも構はずと、服心なかりし上は、相性八卦残る所なく、吟味して、逢ふたり叶たりと悦びて遣せし、祝言目出度執行ひ、相手は變る新枕、其身には夢にも知らざる所に何處ともなく此女の前夜より、胞衣被りたる赤子幾百人、物身に緊と取つき、水泳ぐ眞似して、立並びたるを見るより、身の毛彌立、覺めて夢も結ばず、繼の一間に終夜所作くりて、何心なく氣ちまひり、此男是より其所に、隠なき後生願ひになりぬ、今思ひ當れば、度々去られしも、此有様を見られたるに予ありぬらん 扱其明の朝、姨の方へ送らせける、是は如何なる因果、最早縁の道は思ひ絶たりと悲み、自身に覺へなく、人の所思餘り心憂さに病となり、物狂はしく、然れば此事を忘れず、大社御社前にて、其所謂を告しらしめ、給へと祈りけるに、夢の中に語らせ給ふは、汝が親のなせる罪の、酬來ての寢姿の有様を、詳く教へ給ふに、有難く、發心して跡吊ふべしと、歸るさの松江を通れば、怪魚あがりたりとて、人立ち數多なるを見れば、鱸に文字据たり、丸み内に拵拵と、扱は親の

靈に紛ひなし、淺猿しと、流灌頂を執り行ひ、愈く後世の營して、彼是の菩提を祈らんと、此老僧に頼みて、刺髪するにて侍ると、語りけるを聞に、哀増ぬ、

第四 人眞似は猿の行水

心猿飛で五慾の枝に移り、風は無常を告る鐘が崎、筑前の國の浦里を過て、遙なる山添の野をわけて行に、煙は愁の種なる三味を見しに、多くは少年の塚、其中に新しき塔婆を削りなして、折節の花菊を手折り前なる竹の筒に水をむすび、仔細有氣に竹垣の有様、是なん猿塚と記せり、如何さま様子あるべき事と、其なる一つ庵に立寄、尋ねけるに、隱坊此事を語りけるに、當國太宰府の町に、白坂徳右衛門とて、沙汰ある分限、殊更息女お蘭美形、亦比なく、今年十に六つ七つ餘り、名は國に香はしく、見ぬ戀に沈みぬ、爰に隣町桑盛次郎右衛門とて、色好なる男、深く是に懐み、何時ぞの比より、人知れぬ契り、人目の關も通ひ慣れては、咎めぬ方もあるぞかし、されども互の親たる者は、おもひ掛なく、最早年の盛り、縁付遅き事を氣の毒がる折ふし、出入の男を頼みて常長の祝言を結ぶべしと、膽煎せける、殊に此方は酒屋、彼方は質屋、幸の事、願ふても又なしと、仲人口を以て、手に取様に勤めたるに、徳右衛門合點しながら、宗旨を問へば、次郎右衛門法華宗にあらず、其なれば如何程金銀ありても、男振にもかまはず、ならぬと言さるこそ笑止なれ、此由次郎右衛門に語れば、世の中

は裏表に、己が宗旨を替る計りと、俄に妙法寺を頼みて、總の長き珠數に持かへて、是を又徳右衛門が方へ、彼男遣して次郎右衛門殿今朝御經頂かれ、改宗なされたといへば、徳右衛門、いや／＼根のきの法華でなければ、信心薄し、早や此方に心當ありて、約束して置たりと、手短かいひたるを、次郎衛門に傳へけるに肝を潰し、扱は我思ひは空しうなりけるよ、此談お蘭に知らせての相談かと、文細々と書き口説き遣れば、露も知らず、如何なる所へか遣られて、憂お思ひをすべし、中／＼君ならではと誓ひし妹春を、親の合點なければとて、なる間敷ものには非ず、若し脇へ參る事儘に定りなば、是方よりさう致し申さんと、返事したる明の日、徳右衛門前に呼びて、本町紙屋彦作方へ、縁邊極しと言付られしに、胸迫りけれども、流石色には出さず、何となく受て、急ぎ部屋に立入、内々の首尾、俄に調ひ申すよし、然らば今宵の内、何方へも忍び出たき、思ひの數／＼書きて、竊に送りければ、次郎右衛門此支度して、裏門に待合せて、夜半に連立出、夜の中に七里歩み、明の八つ時分に、此里に縁薄を頼み、才覺の路銀にて、ちいさき庵を結び、辛き憂住居の中は、古里忍び出し時、此娘日比可愛がりし猿ありけるが、夜の事なりしに、跡より慕ひ來るを、道一里餘り過て見付、扱も畜生ながら此心入、不便さに伴ひ來り、ありしにかはる賤の手業は、戀より起りて、此日蔭に身を縮め、様を窺し、次郎右衛門は煙草を刻めば、お蘭は木綿の枷といふ者を繰りて、渡世とするも、二人かく割なき語らひと思へばこそ、一日も暮さるれ、淺猿しき有様、此猿も過ぎし時寵愛せられしこと忘れず、

氣の毒なる顔して、夫ぐにあたり近き山に行て、薪など柏の枯枝、松の落葉掻集めて來り、茶の下を燃し、二人に給仕する躰、をかきし中にも可憐く、夜は疳癩所を打捻り摩り、期夕の貧しき體、此女窶し姿を熟視眺めて涙流し、宛然昔を忍ぶ思入、目見え物こそいはね、人に同じく氣を兼たるぞ、優しく、責て是を折くの慰みに、憂を忘れて經し年も暮れて、明の秋一人の男子を設け、名を菊之助と呼びて、秘藏是に代るものなし、と寵愛するに付ても、昔の暮の程思ひ競べ、果報なき子の行末まで、哀に不便深く育てぬ、或時此子を寢させ置て、鄙びたる所の習に、朝暗きうちより、茶沸したるに呼れて、四方山の物語のうち、何もの事を思ひ出けん、此猿留守の中に湯を沸し、湯玉のたつを見て、盃に丁度一杯とり、何の加減見る迄もなく、此子を丸裸になし、内儀取捌き、善く見覚えし通りに、湯の中へ入るゝと、喚といふ聲計に息絶ぬ、是に驚き夫婦走り戻り、取上て見れば、早茹海老の如く、皮も續かず、二目とも見えず、扱も死なしたり、我身に代は今一度俤にまみえたしと、聲をあけて嘆くも道理、次郎右衛門も呆れ果、如何に畜生なればとて、餘なる事共、よしく因果の生れ合と諦ながら、涙は止まらず、内儀猿を捕へ、兎角汝は我子の敵、今打殺すと木刀振上しを、次郎右衛門止めて、尤とはいひながら、最早返らぬ事に殺生するも、却て菊之助が菩提の爲惡し、奉公と思ひて爲たるべけれども、流石智恵なきは詮方なしといへば、猿涙流して、手を合せけるも又酷く覺て、先は野邊の煙となしぬ、其後此猿七日に、墓所へ参り、折くの草花、山に入て櫛手折て、

爰に挿し、一日に三度宛詣て、涙を流し、百日に當る朝、水心靜に手向け、竹の鏝にて、自から咽笛突通して果ぬ、是を見て夫婦子に離れし跡には、責て此者慰みぬるに、其さへ此有様嘸迷惑に思ひ込し心根を感じ、右の墓の隣に、猿塚つきならべ、二人も發心を遂げ、彼の庵に絶えず題目唱へて、法華讀誦の聲止す、跡吊ひしと語りぬ、

第五 見て歸る地獄極樂

僧佛を賣りて世を渡る、四國の海の深き巧をして、淺き衆生を迷はす事あり、是皆心の闇、秋も末つ方に風絶えて、類船爰に寄、泊り磯といふ所に、一夜を明し、山は南に、讃岐の國の浦氣色、松も殊更に年經り、一入眺に續き、是なる筈の屋に、海上の子供の集り、今佛法の晝なるに、佛壇を飾る三具足の鶴龜、華足等を倉皇々々に抛やりて、草庵自からに荒し、邪見の濱、里見るに痛ましく、かかる狼藉はと鹽木樵る翁に尋ね待るに、重荷を岩に打かけ、眉毛の白ふして長きを押撫、柎に諸手を助けて徘徊仔細を語りけるは、過し年、此所に空樂坊とて、修行に功を積み、不思議様々振舞、假令ば金比良の嶽、三十餘丈の所を、鳥より軽く飛び、法談の詞に花降り、聽聞衆の中の善人衆人を見通しに、萬の失物まで、此僧に頼み、其外にも奇妙を見せければ、近郷の優婆夷群集して、尊み、日に増して繁昌、始は篠竹四本の假葺なるも、後には自から結構に美を盡して、此一庵を建立し、今年

の春より、先達て六月十五日の日に、往生すべしといひ觸し、前かごより其用意に臨終壇を飾らせ三ヶ國觸れさせ、月日早く流れて程なく水無月中旬になる時、近國より集る人、數万人に及びければ四丁四方に矢來を結せて、兼て其儀式を飾り、十五日の朝、裝束をあらためて床に座すると、西の方に向ひ、低頭合掌して、快く終を執れり、遺言として椅子に載せ、是を拜ませ、二日の内は結縁の爲にと、勿躰なくも其昔靈山の釋迦入滅に異ならず、群集して賽錢山の如し、扱十八日の朝、弟子なるもの數人に向ひ、常々空樂申されしは、遷化したりとも暖ある内は茶毘すべからずといはれし、不思議なる事は今に暖冷すといへば、若し万一蘇生給はば、何かあらんか、かく有難き御僧の亦世に出給ふとも、覺えずといふ時、息出で初て、夢の覺たる心地なりと、眼を開き、扱も我此度地獄極樂を見て來りしに、日比各々に教化したる通り、後生の願ひ様にて、八寒八熱の苦みに落んとも、金銀眞砂の樂みなる所へ行べきとも、望み次第、見せらるゝものならば、疑ひ多き者を連だちて、見すべきに、構て何れも嗜み給へ、其證據に閻魔大王より、御判を賜はりし、是見給へと脊中を脱けば、七の推に王といふ文字の下に、大きな判据りたるを、皆々拜みて、今まで未來の有か無かと疑を爲しものも、是に我を折て信心を起しぬ、此事國中に匿れなく、夥多しかりしを、國の守より御尋あり、此僧を召され、末代に及びて、此類の事有可事に非ず、其閻魔の判改むべしと、裸になして見れば、黒く煮込込たる様に、在くどあり、洗へども落す、是は合點往す、兎角一責責て見よとありし

に、水をくれても落す、鐵砲にかくる時、最早何を匿し申す可き、此命ありてのこと、跡方もなき作事なり、餘り貧に生れつき、錢の欲き餘に、かく偽を巧みたりといふ、然らば其王の判は、如何なる事ぞといへば、三年以前背中をほらせ、入墨致させたり、扱て高き所より飛びたるは、如何にと尋ねけるに、是も二年の内、高き所から再々飛び練磨の功にて下へは飛べども、上へはならずと、有の儘に語るを、其儘成敗にも爲可を、其さへ出家といへる徳にて、うつろを作りて、縛りながら乗せ、行衛白浪の定めなき浮世に、かゝる事もあるぞかし、今は言出す人もなく、殘る物々あの庵に、立像の彌陀如來も、此に信心を失ひ、誰參り下向の者もなく、氣疎破窓に、月の夜ななく通ふのみにして、風の音も悽く、晝は童子の遊び所となりぬ、誠に佛法の瑕瑾なりと詠りぬ、

懷 硯 卷之四 終

懷 硯 卷之五

第一 佛の似せ男

西の海邊が原に、表れ出でし似せ男ありける、旅の夕暮を急ぎ、日向の國、橘の里といふ所に、一夜を明し、折節郭公の、田舎聲さへ珍らしく、浮世の事ども、語らせて聞くに、未此程の事とて、宿の主の言葉に、仔細を籠めて咄しけるは、是より一里計南に、落水村といふ所に榎森與太夫とて、庄屋に次ぎて、田畠の高を作り、有徳なる百姓あり、萬の事賢く、天命を考へ、下人と同じく、耕作を勵みぬ、或時岡山に行きて、下刈をさせて、下人下女まで、眞柴頂き連て、歸るさの跡に、獨り残けるが其暮に及びても、宿へ戻らざりしに、各驚き其處に尋ね行しに、形は見ぬすなりて、梢の鳥時争ひ是に問べき便もなくて、皆々不思議をたてしに、小笹の片影、道なき末に茶小紋の羽織、荒く掴み破りて、是のみ残りぬ、何れも嘆く中に、女殊更に身を悶へ、諸神を祈り、其より廿日に餘り、國中の深山海邊を探しけれども、何の知邊もなかりき、是非なき愁の片手に三歳の一子を育て、甲斐々々しく其跡を立てる、里女には勝れて、美しければ、所の若き者、此後家を忍ぶに、少しも取亂すことなく、年月を累ね、程なく九歳の過るは夢なり、其又村續に、溝越傳介といへる小百姓、四五年の不作に遇ひ、日比かくまへの悪しく、妻子と夫々に見放、自から袖乞となりて、徘徊歩うちに、安藝の國宮

の市に紛れ、千疊敷といふ堂に、丸寝せしに、哀は同じ袖枕の邊に、聲まざ／＼と、古里を思はれける、橋村の與太夫に聞えければ、曙を待兼、彼の面影を見るに、年は經ども、形は違はず、自然の涙溢れ、何と與太夫、互に有様は、如何なる因果ぞと、籠付て嘆くに、此男けんによもなき貌して、我名は與太夫といはず、如何なる事に尋給ふぞ、我生國は大隅風の森の側、櫻村といへる所の者なるが、一門散り／＼の身となり、名は小平太とこそ申待れ、と身の上委細に語りぬ、聞ても不審晴れ難し、世に似た者こそあれ、年の程貌形、左の肩の首筋に、打疵の跡まで、與太夫といへる人の、面影と横手を打て、世界は廣し、是程似たる事は、と申けるにぞ、小平太與を冷し、其與太夫といへる人は、如何なる事ぞと問ける、傳介悲しき中の長物語せしは、抑與太夫といふ人、日向國橋村の老百姓、親類の事ども、妻子の嘆き、九年跡にくれてんに見へざる事、都度々々に咄しけるうちに、小平太横道者にて、我其與太夫に形の似たるこそ幸ひ、其里に行て、其女房を誑し、世を樂々々と渡るべき、惡心出來、猶傳介に様子聞届け、爰を別れて、日向の國近く分入、態と呆氣を面に作り、狗品に擱れし者と、折々詞の末に申せば、何時となく是を沙汰して、與太夫こそ其そこに天狗が落して、世に命はありけるぞと、いふ程なく、女は傳へ聞きて、有に非れず、尋行き、逢ひ見しより前後を忘じ、涙に暮れて、昔の與太夫に思込て、我里の家に誘ひて歸り、再び逢ふ事の嬉しさ、傍在所より従弟の末まで集りて、祝の振舞酒事あり、扱も年月の難義にや、疲れ給ふ事よと、悦涙を流して、皆々歸れば

女房越方の憂思ひをり、忘形身と思ひて、育てし與太郎も早十一歳、此成人見給へと、移り變りし四方山の物語に、夜更けて珍らしき、添寐の枕をかはし、昨日今日とたつは程なく、二年目の春、與太郎が弟も出來て、猶々落付けるに、其夏殊更の早にて、天下の百姓、雨を乞ひ、龍神を驚かし、様々行ひありしかども、其印なく、青田の早苗は、宛然の枯柴の如くなりし時、此橋村の御社、忝なくも、住吉大明神の、御本所にて渡らせ給ふ、既に十一ヶ年跡の早魃にも、當社を祈り奉るに、忽ち其利生あつて、萬民を潤せり、其時の願書も、與太夫書ける吉例なれば此度も幸ひ、堅固にて居ること吉左右、書せらるべしと呼出すに、小平太元より無筆にて、此時目の莢の外れし男ありて、是に氣をつけて、與太夫にあらぬ事を見出しけれども、女房合點せず、物書き給はぬは、天狗に擱れて、氣の抜けたる故と、その氣振いふものあれば、却て腹を立て泣悲しむと、影にて笑ひて面々の好々と、そのなりになりて、構ふ者なく、今に語り傳へり、世には斯る事もあり、

第三 明て悔しき養子が銀筥

世に無物は、卿の刀と化物と、人の内證に金銀ぞかし、何處はあれど、江州の大江は、山市の晴嵐、渡海の歸帆、此津の繁昌、馬借隙なく、逢坂の車、旅人袖を連ね、これや此關、戸閉ぬ御代の例なり爰に篠原屋の勘吉とて、北國の商をして、一度は家榮えけるが、何時となく身代薄くなりて、世間

向は昔に變らず、随分氣嵩に取廻したれども、自から不自由さ顯れかゝれば、日頃の律義に變り、人は必ず貧より、無分別を巧みぬ、勘吉一人の娘、十六になりて、形も大方に生れつきぬ、母親は過し奉の末、世を早ふして、其後は躰育ちに、萬の賤しげに、又は徒にもなりぬべき事を嘆くうちに、方々より言ひ入れたれど、曾て其談合に乗らず、我内へ似合の養子を願ひぬ、見え渡りたる所は、棟高ふして庭廣く住みなせしが、世上思の外、錢が壹文もなき世とはなりぬ、入智の敷銀にて此家を繼すべき事をゆみ拾貫目入十箱、中には譯もなき物を仕込み、此寶瓦石に劣れり、如何なる智にてもあれ銀百貫目娘に相添へ、家屋を譲りて、此身は其日より發心の望みといへば、皆慾の世の中、此家の養子を望む事、數を知らじ、其中に志賀の浪里匿れなく、松崎九助とて、其一村の主筋目なる家として内證寂しく、表向の虛大名、生中旦那様といはる、恨めしく、未極る妻子もなく、渡世何を營むべしと、思案半ばに暮しぬ、是を肝煎を身過にする、古手六次といふ男、勘吉が事を聞て、善き勝負と心にかけしに、思ふ儘ならざる方もなく、駆廻る時、九介と前方より近付なれば、幸に思ひて、此段段語り、今三拾貫目さへもつて這入ば、家屋敷と當銀百貫目と、美目形勝れたる娘とを、其儘渡し殊に聲入の夜より、勘吉は發心の望みなれば、當分の見せ銀さへ、三十貫目調へ給へば、此跡式は丸取り、斯様な結構な事は、又日本に二ツとなき事、殊に此方の年頃と良き夫婦、それは打て付た事と、仲人口に、嘘を吐混て勘むるに、九助も聞て早や心とさめき、是は成程相談致すべしと、伯父に

長濱屋とて、彦根の家中手廣くする商人、其日に志賀を出、舟を借りて急ぎ、六次が話せし通りを、一々語れば、其は頼母子身代、相違有か無を聞合せ、確と治定したる上ならば當分の見世銀は、何時なりとも借出して遣はすべしと、請合たるを悦び、志賀に歸り、六次を呼に遣りて、見世銀は如何程にても貸すべきとの事といへば、扱は目出度し、此方に少しも偽のなき事は、私の受合ます、急ぎ銀を取寄せ給へ、一日も早いによしともみたて、程なく日限定め、聲入に極り、彼三十貫目を持せ運ばせ、首尾残る所なく、千秋樂詣ひて、祝言は相濟み、勘吉は其夜より、只今財寶渡すと、藏を開かせ、有銀百貫目を櫛に見せて、何處へか行ぬ、兼てより此覺悟、定めて諸國の靈佛を拜み巡る、修行よき仕舞と、羨む人多し、扱九介は、商に取づくに、諸方の問屋共、聞つけて、何をかけても氣遣なし、先有銀が百三十貫目は、目に見えた身代と、方々より米薪柴何なりとも、好次第に、頼まねども人が肝煎、千貫目が商もなる様、仕掛たるに、九助思の外の仕事、先見世銀に濟すべしと、右の三十貫目をば、筥の封も違はず、伯父が方へ竊に濟し、未だ讓の百貫目には手もつけず、外より來る商品にて利徳大分あがり、此頃まで思ふ様に使はぬ銀を、澤山に遊女博奕にも、瓦落くと遺捨、五貫目三貫目の當座借銀の分は、人も氣をせず、自からも水の泡とも思はず次第に、惡所に撒り、よからの機勢の募り出し上に、仰山商物嵩み、舟九艘に積せ、北國へ廻しけるに、例の比叡の山嵐に打覆し、以上三十二人の水主、一人も助からず漸く、船頭片息になつて、竹生島に打寄せられぬ、此時諸方の賣物

受込み、萬指銀四十八貫三百九十匁、俄に是をたてねばならず、重ねての爲なれば、成程きつと携ひて、見せんと、藏を開き、彼百貫目の箱を、五箱取出させ、封を切て見るに、是は如何な事、銀には非ず、石瓦なり、九介工夫に落す、一箱々々と明させけるに、四番目の箱のうちに、一通の文あり、我始は身代人に負け、讓銀三百貫目ありしを、修學悪く、次第に減りて、只屋敷一ツ残り、内證人に知られんも口惜く、幸ひ獨の娘に、此銀を偽りて聲を望みぬ、夫婦は二世の契なれば、只不便と思はれ、此事人に知らせず、持參の敷銀にて、跡を立給へ、近比恥しけれども、世は張もの、返すく頼むと書止たり、九介 熟々思ひ返せば、無念やら道理やら、定め兼て、女房に此事を語れば、私は少しも知らざる事といふに、恨みて詮なき事ながら、此百貫目を當にこそ、萬大掛に仕散し、今更人が許すべきに非ず、と案じ煩ふに、早大節季の程なく、損銀を督促、掛を乞ひ、人の知りたる百貫目を差置て、人に借るべき手段なく、安否此に極りて、師走廿八日、不埒なるに人も不審をたて、逆も行ならず、節角聲に入、一年經ぬに引負、合七十貫目、今は昔の在所懐しながら、此面では歸られずと、分別締て宿を出、高觀音の山下陰に行ば、一人の非人ありしに、言葉をかけ、扱も其方は何として、其姿になられたぞ、故郷にて朝夕噂にて、行術覺束なしといひ暮すに、爰にて逢は、觀音様の御利生、此寒に痛はしや、是着給へと、羽織を脱て着せ酒を振舞ひての馳走に、此乞食自分には覺えはなけれども、是は過分と、よい加減に挨拶したるに、たわひなき程に酔せ、着物帶脇差頭巾まで

遺りての上に、咽笛貫通して、自身に北に立張きぬ、跡にて是を見付、やれ九介こそ自害したれと沙汰ありて其なりけりに濟みぬ、其後木芽峠の茶屋して、又女房を呼しとなり、

第三 居合も騙に手なし

涙の音響の灘と過ぎ、播磨海室津に舟を寄て、爰に一夜の礎枕、旅の草臥を助くる、橘風呂といへるに行て、入初むるより何處も同だみ聲、諸人の附合、或は淨瑠璃、鼻歌、芝居の狂言咄、心々の中に此程の事とて、此所の喧嘩のあらまし、語る人ありて聞に、如何なる律氣者も、色町にては、自から浮氣になつて、鞘咎、詞論、人の山をなす思ひの海、此處の傾城町の事とよ、毎夜噪ぎ仲間の男風流、草枕夢藏、高砂の久八、釣鐘數右衛門、閻魔の八左衛門、彼是四人、遊興は外になし、人を打擲して、是を慰みとなして、所の迷惑度々なれど、人皆怖れて抵抗者なく、日を追て此組下八十四人、惡には傾き安き世なり、或時備前より忍びて、色遊びに通へる男四五人、彼騒ぎ仲間に合、少しの事を言分に取結び、互に爰は止方なく、抜合て打合ひけるに、備前の者共、一命を惜まず、片端より踏倒し、或は手負、又は叫れて、息絶る難義の所へ、尾上八九郎といへる浪人駈合せ先は所最負、真中に立入扱ひけるに、死人はなくて各左右へ別れ、備前の人を是を仕合、騒仲間は危き命を通れ、皆々宿へは歸らず、竊なる野寺に行て面疵痛所を養生しける、こは身より出せし咎めなれ、漸く健に

なりて、彼浪人八九郎に一禮も申べき事を、却て察を巧み、年來我々が男達、此度の卑氣ひきとする事口惜、八九郎此儘置ば、世間へ沙汰して、生たる甲斐はなかりき、何卒手段をまわし、討て捨んと言出すより、おのゝ同心して、内談極めけるに、中々容易く討るゝ者にあらず、勇力人に勝れ、兵法調練して、朝暮其身に油断せざりき、いつぞの時節と見合すうちに、山は紅躑躅くれないの盛り、夕日殊更の折ふし、八九郎人をも連ず、麓たもと進行を、釣鐘の數右衛門つけ出し、俄に竹葉の一滴を調べ、山深く分入わけて八九郎を是非に招ぎ、面白可笑く酒になして、挨拶入代立替いりかわり、前後忘るゝ計に盛流し、我知らず草枕の所を、おのゝ鋒先揃へて刺殺し、顔の皮をめくりて、遙なる谷蔭に捨て歸りける、其後柴人の見出し、此沙汰募りて、諸人見みに罷れども、面損おもてじて見知り難し、爰に八九郎が妹お七といへる女、未だ十六なりけるが、兄八九郎が宿に歸らぬ事を不思議に、彼山に入て死人の佛を見しに、奥島の綿入に、縋子の袖裏、我手にかけて仕立着せましたに、疑ひなく心は空になりて、死骸に取付んとせしが、外より見るを忍び、暫らく涙を押へ、何となく我宅へ歸り、母の歎を思ひ、此事を語らず、其明日の日早く、身に菰こもをかけ、破れし笠に貌を匿かくし、袖乞そでこひの如なりて、八九郎死骸より遠き松影に打臥て、見物の有様を見答けるに、皆々哀と計いひ捨、暫らくは見る人もなかりしに、血氣盛さかの若者、一日に三度まで見みに罷りて、是を歎かず、笑はず、人立の所を放れて、兎角神ならぬ身なれば、人間は騙だまに手なしと、嘔つよきて歸るを、きつと聞所けて跡より其宿に付込つけこみ、其より我宅わがたくに歸り、母に此事を語りて、

人知れず訴狀を認め、所の奉行職に言上申して、歎き奉れば、彼者共を俄に捕へて、穿鑿に及びけるに、證據正しからねば爰を争ひぬ、然ども傾城町の喧嘩、世上に匿れなく、八九郎其時出合、扱あひし事より吟味仕出して、一人々々尋ね給ふに、其度々詞相違して顯れかゝり、様々の詮議に落ちて、人を殺せしその科を逃れず、此仲間残らず世の掟とはなりぬ、彼娘が事、流石は武士の家に生れ、女ながら智あり勇ありとて、歴々の郷侍是を貰ひて、一子に嫁合あせ、母も一所に引取り、孝を盡し待る、哀や人の身の里、八九郎生國肥前國前嵯峨の者なりしが、今播州の實相、室津の土とはなりて、塚のみ残れり、

第四 織物屋の今中將姫

古代より袖そでを入れず、襟いりの梢茂り、位山の氣色、名にふれて面白く、折節涼しさ、夏なき飛驒の山里に、一夜を明しけるに、賤の手業には優しく、上機うはたの篋ひの音、枕に響き渡り、夢も結ばぬ旅宿はたごの、主取交せての物語りの次手に、不思議なる事をこそ申待れ、此里に岡村善太夫といふ夫婦、四十餘歳まで一子もなき事を歎き、尾州熱田の宮に宿願をかけしに、祈る印のもうし子、其程なく誕生して、鄙ひなには並びなき形の娘なりき、次第に成長して、五歳より教へぬ道の、讀書暗からず、七歳にして詩歌を連ね、十一より所習ひの袖そで編あむけるに、さのみ餘の女に、手業の違ふ事もなくてありながら、人

の三日に一反を織下すを、半日織て、然も勝れて、美しく是故此家富貴して、殊更佛の道跡からず、人皆申習して、今中將姫といへり、此娘毎月朔日に、八剱の宮へ參詣しけるに、國里隔てし通々を一日の内に下向し待る、此事疑ひて様子を尋ねけるに、尾張の事ども道すがらの有様、委細に語りけるを、其後聞合せけるに、すこしも違はず、愈寄異の思をなしけるに、程なく十五歳になりて、都にも有間敷程の美形、爰の山家に焦れ、嫁に望み入縁の願ひ、若男共の是を懐む事限なし、善太夫夫婦次第に家榮えければ、自から娘自慢して、世上を見合せ、今に賀といふものを定めず、彼は見合せ、里續の長に菅垣伊兵衛いへる人、萬に不足なく、材木の商賣して、世を渡りけるが、是に望まれ、一子伊之助に嫁合せける、時に不思議は、此娘最愛の心出しより、熱田へ詣での通力も失り、機の早業も常の女の如なりて、形も何時となく醜るしく、山家育の風俗となれり、世には斯る希代もあるものぞと此事を語りぬ、

第五 御代の盛は江戸櫻

同じ櫻もよき所に咲きて、人に見らるゝこそ、花も仕合なり、或時武藏に行て、淺草の邊に一夜を明し、折から八十八夜の朝霜、旅の草鞋に踏分、上野の春に遇へり、宛然吉野を爰に、花の都も及ばざりし氣色、黒門先より末の松蔭まで、唐織の幔幕うたせ、袖累の衣裳盡し、鹿の子ならざる小裙もな

く、美を飾りての女酒盛、撥音の色彩、或は一節切に吹たてられ、裙返しの紅裏など見え、かゝる法師の身さへ、心浮かゝとなりぬ、又糸櫻の影に散り前を惜む、少年の混り、衆道は爰にこそ盛り、張強く情深く、是又見捨て歸る雁、便もなく、筆の林の墨染櫻の元に、玉虫色の襦子の廣袖を着て、厚髪跡下りに剃なし、金鏝の一差既しかせて、座して艶しき花は見ずして、古文の上巻を開き、朱を以て頭書、巳が宿にてもなるべき事を、無用の出過者とは思ひながら、千差万別の人心、殊更大下の町人、思ふ儘なる世に住めるは、有難き時津風靜に、並木櫻の影に浦町の、中橋邊の何某、噪ぎ歌に四五人、頭を振つての手拍子、何れか當世男ならざるはなし、酒も半の處へ、十七八なる若衆、空色の小袖に唐鹿の紋所、黒襦子の袴股だも取て、攫差の大小、浮世笹にて貌をかくし、羽織は小者に持たせ、彼小歌立聞せしが、遠慮もなく其座に入て、豊に座して、拾盃を取上げ、給仕せし小坊主に、つげとて差出しければ、溢るゝ計盛かけ、各々美しく過ぎて輿を冷しにける、其座に伽羅屋の新吉といへる美男に、二世まで思はれたきとて、飲殘して手より手に渡しけるに、いづれも酔の紛れに、無分別に聲をたて、祝言のことはじめ、三國一と謠ひける、其後盃數々に巡りても、此若衆笠をこらす、更に心打解けず、暮方まで歸りもやらず、折々醉任に見せて、新吉が膝枕して、爰を假の情と、空射せしとは思ひながら、嬉しさ袖に餘り、戯れも今ぞと思ふ時、江戸に住む粹の付合、一人々々外して殘る者とは松の夕風、辨當取置親仁ばかり、然も耳疎く、首尾ならば此時になりぬ、彼若衆傍を見

合せ、花よりさきに人の散る事を悦び、左の袂より金子三百兩、包しを取出し、新吉が膝の上に重く置けるは、少し賤しき様なれども、苦しからぬ者なり。其後耳近く囁きしは、我親として親類もなく、仇に朽ぬる花なれば行夫までを頼むなり。不便をかけて見捨給ふなど、貌に眞を顯はし、少し涙ぐみしは、戀といふ只中、其儘消えたき程になりぬ。様々誓して、命を限にと申交せしは、前後の辨へもなく、愚なる事ながら、其身になりては道理にぞありける、暫しのうちに打解忍笠も脱ぎ、心の程を顯しけるに、此人誠は女小姓なり、新吉に未だ婦妻のなき内證を能知りて、斯は仕かけ待る、此面影を思合すに、何時ぞやさるお寺にて見し様に、思ふ程それなり、兎角は不思議晴れがたく、我宿に連て仔細を聞くに、腹に譯ありて産月も近き難義を思はれ、長老様の送られけると、思案して仲人なしの縁組、是仕合のはじめ、近所へ弘めて千秋樂を誦はせける、相生の松風、猶千代かけて、夫婦の中橋に住みなして、東の伽羅屋と其名を残しぬ、

懷 硯 卷之五 終(大尾)

武道傳來記

武道傳來記

和朝兵揃つはらのへらの中に、爲朝のくろがねの弓、むさと坊が長刀ながた、朝比奈が力癩ちひな、景清か眼王めのおう、これらは見ぬ世の事、中古武道の忠義諸國に高名の敵うち、其のはたらき聞き傳へて、筆のはやし、詞の山、心の海靜かに、御松久かたの雲によろこびの舞鶴、これを集めぬ、

武道傳來記

卷之二

諸國敵討

第一 心底をひく琵琶の海

形も情も同じ美童の事

第二 毒薬は箱入の命

人質は夢の内蔵の事

第三 嗚嗒といふ俄正月

最後は知れて女郎買ひの事

第四 内儀の利發は替つた姿

せはしき中に預け物の事

武道傳來記

◎心底をひく琵琶の海

武士は人の鏡山、くもらぬ御代は久方の松の春、千鶴萬靈の棲める江州の時津海風絶えて浪に映ふ安土の城下はひかしになりぬ、其の頃平尾修理といへる人、天武天皇の末葉にして高家なれば、諸役御免あつて、世を遊樂に其の名を埋み、十五歳の時入道して眼夢と改め、其の後は長劍馬上をやめて禪學にもとづき、常の館をはなれ、西の方の山陰に、小笹かり葺の庵をひすべは、佛の縁に引かれ、生死目前の湖、是れ即ち弘誓の丸木船、一大事踏みはづしては有るべからすと、觀念の南窓に諸釋を集めて、見臺氣を移し、板戸内より締めて、人倫通ひ道無く、それより御姿を見ぬこと百日にあまりて、するくくの者之を歎きぬ、かはらずして長屋淋しく、花見し梢も前栽の秋の哀れに匂ひありながら、蘭衰へ、芭蕉なほ夕風に形をうしなひ、門に人稀なれば鳥の聲慕つて、いつとなく内證は野となりて、鹿もすむべき風情、此のあるじの心ざし、市中の山居是れなるべし、かねて妻女も持たせたまはず、子孫のねがひなく、心の行くすゑを見立て、美童を愛し給へり、是れもみだりに此の道におぼれ給はず、筋目正しき浪人の子共に、森坂采女、秋津左京、此の貳人同年にして十六歳、心も形も此れ程かはらぬ生れつきは無し、朝暮御目どほりを離れず、夜は御枕の左右にならび、わりなき御情にあづか

り、采女も左京もいやしからず、互に衆道の義理を恥ぢかはし、旦那一人の御心に兩人若命を惜まず、骨髓に徹して勤めけること色はかりに非ず、武勇を本として前髪役の意氣地立てすまし、今四五年も過ぎ行き、世間なみに形の變り、脇をも寒き前髪取りなば、其の節は又自然の御用にも立ちぬへき心底、更に申すにはあらず、二人神文取りかはし、かため言葉も空に、想ひの外なる主人の御發心、生きながら逢はで別るべきか、此の程はしきりに御氣を惱ませ給ふと聞けば、一入悲しさ勝り、諸神諸佛を祈り、石山寺の觀音經を讀誦し、多賀大明神に千本の小松を植ゑさせ、千代もおもふ効なく、次第に御心傷ませ給へば、今は抑せをそむき、戸扇引き破りて駈け入り、御面影拜み奉らむと立ち出でしが、爰は又分別所、さもあらば、結句頼み少なき御心にやさはらむ、何とぞ今生にて御拜顔すべきことをと、やうく思案をめぐらし、浦人をまねきよせ、棚なし小舟をかりもどめて、二人簀笠に身を隠し、そのまゝ釣の翁になりて、琵琶琴ひきつれて、汀つたひに御庵室の後にまはり、折ふし月の秋、中の三日、浪の花のうちつゞき、春は磯と眺め、旅雁心あらば、其の聲にして此の歎き告げよ、掛浪の玉には濡れぬ四の袖、糸の音じめに愁歎ふくみて、いと哀れにぞ聞えし、眼夢入道うたゝねの枕にひびき、紙窓を明けて見渡したまふに、人の心を繋ぎとめたる舟の中にして、いとなみ暇惜しき身の其れには優しく、漁夫かゝる者有明移る南江のおもしろやと、御心おのづから進みて、此の琴に合せて唱はせ給へり、歌臺暖響春光融々、舞殿冷袖風雨凄々、春秋のしづかに世の替れる有様、覺

むる間もなき夢なり、しばしも之に氣をうつして、江はよく舟をうかべ、又よく舟を覆すの道理、行ひの障なり、明鏡に像の跡なく、虚空の色に染まざる如くと、戸車の鳴る時、二人簀笠ぬきて、これ殿さま、采女、左京が餘りに悲しくせんじ、御音信を申上ぐるなり、年月の御厚恩、そもや忘れはつべきか、御發心の折からは、なほもつて近う召し使はれ、朝に岩もる雪を掬ひあげ、夕に御茶湯の通ひをつかふまつり、むかしの道をかへて、菩提の道に引き入れさせ給へ、殊更御心も常ならず惱ませ給へば、御命の程も定めがたし、今生にして名残の拜顔を御ゆるしあそばされ、二人が思を晴させ給へ、いかなる御氣をそむき、かほと御惡みの深きこと、運命に盡き果てける、これ殿様くど歎くにぞ、眼夢も取り亂させ給ひしが、是れもと色道の迷なり、何ぞ此の色に大願を破るべき事の道ならずと、なほ心底すわり、大かたの斷り聞き分けては歸らじ、爰は方便の偽り、諸天もゆるし給へと觀念して、おのれら爰に来れる者にあらず、年月我を負き、前後わきまへの非道、其の數累なつて須彌山にもあまれり、然れども行末此の姿の願ひあれば、日比の情にそれを尤めず、まつたく對面、正八幡も照覽あれ、七生までの勘當とあらけなく仰せければ、二人立ちすくみて、かさねて返す言葉絶えて、目と目見あはせ、涙湯玉を繋ぎ、覺えてあやまりは無き身にも、御一言にさしあたり、仔細をたづねたればとて、よもや分けては語らせ給はじ、後日に分別有るべしと、歸る浪のうちふして、夢心にて屋敷に入りて、せんずる所最期なり、眼夢も次第により行かせ給へば、御死去も程はあらじ、願は